
たからボックス！

霧山紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たからボックス！

【Nコード】

N8281X

【作者名】

霧山紅葉

【あらすじ】

異常が闊歩し過負荷が嘲う箱庭の世界。そこへ紛れ込んだ複数の異物。その中の一人である竜宮宝は自身の身を蝕む醜悪な異形を否定しながらもいつか幸せになれると信じ生きて逝こうとするが、しかし彼の持つ異能はそれを許さない。怨み傷付け壊して殺して――やがて曲げられ崩壊する。

自身を悪質極まりない人で無しへと変えていく異能は次第に彼を化け物へと変え、周囲はその劣悪な力を利用する。

自身の夢すら曲げられ崩壊した彼に、いつか幸せは訪れるのだろ

うか

——異形は彼を災悪へと変えた。世界は彼を兵器へと変える。そして異物の一人である金髪紅目の彼女は——彼を人へと変えようとする。

法則の外にて異能を扱い戦い続ける彼等。その先にあるのは幸せか不幸か。それはまだ誰も知らない。

つまりバッドエンドかハッピーエンドかはまだ決めてないっていう。以下注意書き的なあれ。

主人公に厨二病要素を多分に盛り込みました。オリジナルのメインキャラにTS少女が、後オリジナルのサブキャラに男の娘。転生者複数。原作改変有り。独自解釈有り。オリジナル設定も有り。

上記のどれかに遺伝子レベルで拒否反応を示す人は回れ右推奨します。

後あれ、そう確かあれだよあれ。何て言うんだっけ、そうそうあれだ。ゆっくりしていいってね！

こんな作者に遺伝子レベルで拒否反応を起こす方にも回れ右推奨します（キリッ）

「転生？　へー面白そうだね（現実じゃなければ）」な第0箱（前書き）

注意書きを幾つか。

- ・転生者複数。
- ・ハーレムなし。
- ・オリジナルキャラの一人がTS。
- ・恋愛は多分ないと思われる。
- ・厨二病的な設定やら展開やら。
- ・独自解釈とオリジナル展開あり。
- ・主人公が主人公らしくない。むしろ敵役っぽい。
- ・一部作品に対するアンチ的な文あり。

そんな小説で大丈夫か？　大丈夫じゃない。大問題だ。って方には回れ右を推奨します。

「転生?　へー面白そうだね(現実じゃなければ)」な第0箱

——転生。携帯小説サイトを頻繁に覗くような人達には、というかそうじゃなくても大体の人達にはそれがどういった現象なのかを説明する必要はないだろう。

神に殺されて、ただの偶然で、神の気紛れで、自分自身の力で——

何故転生という非現実的極まりない現象を体験する事になったのか。その理由は様々あるのだろうがしかし、今は転生する事になった原因ではなくもっと別の事に目を向けてほしい。

そう例えば、周囲が幼児らしからぬ言動の——真実実年齢以上の年数を生きてきた人格を持つ幼児に何の違和感も不信感を持たない事とか。

何故か二次創作などでは「頭の良い子なんだな、うん。物分かりも良いし、さすが私達の子だよははっ」なんて清々しい笑いと台詞で片付けられたりしているが、実際にそんな子供を産んだのなら親として自分達の子供に何かあったのか心配になったり——そうじゃないなら気味悪がったりして、その後は歳不相応の子供にどう対応すれば良いのかわからずに家族らしくない溝が出来たりするんじゃないんだろうか?

「○○は頭が良いんだな」「さすが私達の子だよ」「もうそんな事まで知ってるのか」なんて台詞を何の疑問も持たずに親が吐くなんて、それこそ二次元でしか有り得ないとすら俺は思っている。

いや、そもそも、転生なんて現象も二次元の中にしか存在しないのだろうが——実際に体験してしまった身としては、「転生?　へー現実にあつたら面白そうだねワロスワロス」なんて事は言えなくなってしまう訳で——

そして、先程も言った通り妙に大人びた幼児を爽やかな笑みで許

容するなんて人は現実にはいない訳で——いたとしてもその人は普通とは言えないだろうし、極少数だけだろう——転生してから今に至るまで、俺は両親からの好意的とは言えない感情を一身に受け続けていた。

育児放棄されてないだけマシだと自分自身に言い聞かせる事も出来るだろうが——というか実際に言い聞かせていたのだが、何事にも限界がある。

そこで話を戻して転生に対して気になるあれこれ。

良くあるモノだと神様とやらが間違っつてつい殺っちゃって、「あー、めんごめんご特典付きで転生させてあげるから許してな？」とか何とかで平和ボケした現代人には不相応過ぎるとすら言える程に過剰な能力を与えたりとか、願い事を幾つか聞いてくれるとか何とか。

そうじゃなくても何か切っ掛けがあって異能に目覚めたりとか。読み物として見るならそれもまた面白いと感じる人だっているのかもしれない。そんな奴が主人公らしく上から目線で説教なんかやってても不思議に感じないかもしれない。——が、現実になんか事があるのなら疑問を抱かずにはいられない。

何の努力もせずに得た力など——自身の身の程すら曖昧にする程にその人を増長させるに違いない。身の程を弁えずに増長した人間の説教？ それこそワロスワロスだ。

何か切っ掛けがあって力を手に入れたのだとしても、その人が得た力に惑わされない程に強固に確立した自我を持っているのかと聞かれれば首を傾げざる得ないだろう。

強固に確立した自我？ 少なくとも平和ボケした現代人がそんなものを持っているとは思えない。

いたとしても、それはきつと普通じゃない人だ。

まあ、つまりは、あれだ。

この場合の俺は紛れもない後者——切っ掛けがあって異能に目覚

めてしまった、強固に確立した自我を持たない元平和ボケした現代人という訳である。

切っ掛け——と言ってもそんな大事になるような事でもない。

捻くれていると何の疑問も持たずに自覚している俺は勿論、先程言った通り今世の両親に好意的とは言えない感情を向けられている。

まあ、それだけだったら家族らしからぬ溝が家族間に出来る——というだけの何て事もない探せば良くある構図でしかないのだが、しかし残念な事に今世の父親は俗に言う人で無し或いは碌で無しに分類出来る駄目人間であり、母親もそれに負けず劣らずの駄目人間なのだ。

つまり俺は、そう——何て事もない虐待を受けていたのだ。

自分自身気味が悪い子供だと自覚しているし、こんな虐待も探せば良くある。タダで飯を食べさせてもらえただけ自分は幸せなのだと自分に言い聞かせる事も出来たが、先程言った通りに何事にも限界がある。

俺がこの異能に目覚めた切っ掛けは、我慢が限界に達した。そんな誰にだってある至極常識的で当然の心理現象が起きた事だったのだ。

——曰く、^{ギフト}怨返し。

自身が抱いた怨を物理的、或いは精神的なダメージとして怨む対象に返す。たったそれだけの異能^{スキル}。

この異能を得た当初は歓喜すらしてあの碌で無しどもに牙を向いたのだが——しかし俺はこの力の脅威を知らなかった。

ただちよつと痛い目に遭わせてやる。なんて軽い気持ちで^{ギフト}怨返しを発動した結果——今世の両親は物言わぬ肉塊へ変わった。

焦った、そして怖くなった。^{ギフト}怨返しという紛れもない暴力を、軽い気持ちで使ってしまった自分が。

軽い気持ちでやったのに何故ここまで悲惨な状態になったのか——

——そう混乱する頭で考えて、気付いた。

軽い気持ちで——我慢の限界になる程の怨みを俺は返していたのだ。発動した直前はそんな事にすら気付いてなかった。無意識の内に人二人を挽き肉に変える程強大で根強い怨みを抱いていた事も、怨返し（ギフト）がこれ程に凶悪なものである事にも、そして——

——両親の死を当然の結果として受け入れる自分がいた事にも。

その後は、普段ならば聞こえる近所迷惑な父親の怒鳴り声もヒステリックな母親の金切り声も聞こえない事に不信感を抱いたのか、お隣に住むおばちゃんが我が家のダイニングに突入。血塗れになったその現場を見て顔を青白くさせながらも警察と救急車を呼んだ、らしい。

当然原形がわからない程になった肉片がまだ生きてるなんて事もなく当時二歳の俺が両親をそうしたなんて考えるなんて人も勿論おらず、世間には不可解な猟奇殺人としてその事件を発表する事になった。

だが、ここでこの話が終わり親を失った俺が親戚一同に盥回しにされるなんて事はなく——

「はじめましてですか。いきなりで悪いのですが、折り入って頼みたい事がありました——」

——事情聴取が終わり一息吐いていた時に接触してきた不知火袴と名乗る人物のせいで、^{ギフト}怨返しとの折り合いすら付けれずに俺は物語の渦中へ飛び込む事になってしまったのだった——

「——フラスコ計画。その実験体候補として、^{モルモット}私に君を養わせていただけないでしょうか？」

現在3歳。性別は男。今世での名前は竜宮宝（りゅうぐう たくら）。

自身が得た力の本質を未だ見抜けない俺は、その後フラスコ計画の内容を説明され疑念を抱きながらもつい首を縦に振ってしまう。

——何も知らないまま、何も気付かないまま、ただ恐怖を感じながら——

——人殺しに恐怖を感じた？ いいや違う。平和ボケした現代人であるはずの俺が人殺しに何の感慨も浮かべなかった事に対して

——大きな力は人を歪ませる。その事を理解した気でいた俺が近い未来に^{ギフト}怨返しに歪まされる事になるとは、この時の俺には心の底からそう思うなんて出来はしなかった。

——種別、災惡。ワースト 怨返しギフトの所有者、本名は竜宮宝。夢のない夢と
恐れられたり恐れられなかったりするの、は、数年後の話であつたり
する。

「転生？　へー面白そうだね（現実じゃなければ）」な第0箱（後書き）

めだかボックスの二次創作小説をもし書くのならこうすると決めていた事その1『異常に対して抵抗しながらもゆるゆると吞まれて
いって、最後には完全に異常に吞まれる主人公』

つまりはあれ。そうあれだ。「くっ、静まるんだ俺の右腕ッ」↓
「今までの俺が間違ってたんだ……」的な。確かに間違ってますよねうん。

「右腕が疼く……ッ」な第1箱（前書き）

もう既に何人かの方にお気に入り登録されていた事に驚愕。

べっ、べっに嬉しくなんかないんだからねっ（訳…本当嬉しくて涎が止まりませんうえっうえっ）

「こんな作者で大丈夫か？」 「一番良い作者を頼む」 「一番良いのはない（キリッ）」

まあそんな感じで第1箱。主人公の異常、っていうか災悪って種別になってるんですけど、宗像君みたいな『つい何かしたくなる』タイプになってます。

詳しい設定はその内本文で出す予定。現時点では『怨返し』ってやり返すだけの異常じゃないの？ っていうか災悪って何なの厨二過ぎワロスwwwみたいに読者様方は思うかもしれませんが、本文で言及されるまでは一先ずスルーしていただけると幸い。

ではどうぞ。

「右腕が疼く……ッ」な第1箱

不知火袴が言うフラスコ計画。それは天才が何故天才なのかを解明し、人為的に天才を作り出す事を最終目標にした一大プロジェクト、らしい。

何でもこのプロジェクトを成功させるため国内外問わずに多くのスポンサーがついているとか、国内だけでもこの計画に従事し人生を賭けている人物は十万を下らないとか。

その後も長々と続く説明を何とか理解しようと頭を働かせていると、ふと疑問——疑念とも言える——が沸いた。

計画の中核とも言える実験体モルモットの候補として何故俺が選ばれたのか？
得体の知れない異能——ギフト怨返しが一体何なのか、最終目標までの過程でその答えを得る可能性があるのならフラスコ計画の実験体になる事もやぶさかではない。むしろ願ったり叶ったりなのだが、決して俺は天才ではない。

異常というカテゴリーには入るのかもしれないが、しかしこの不知火袴と名乗る老人は俺が持つ異能——ギフト怨返しの事を知らないはずだ。

それを問うと「人伝に君が何らかの異常を所持していると聞きまして、それと同時に君をフラスコ計画の実験体候補として勧誘するよう指示されましたね」という何とも怪しい答えが返ってきた。

この老人はフラスコ計画の実験場である箱庭学園の理事長——つまりプロジェクトにおいて重要な立場にいる、そうでなくともそれなりの立場にいるはずだ。先程そう説明されたから間違っているはず。

そんな人物に指示を出せる人ってどんな人だ。っというか怨返しギフト

を得てから数日しか経っていないのに何でその事を知ってるんだ。
色々とおかしいだろ。

怨返^{ギフト}しの名称は出さずに何故俺が異能^{アブノーマル}持ちだと知っているのか、
そしてその人物は一体なんなのだと動揺しながら聞いてみたのだが、
上手くはぐらかされて明確な情報を得る事は不可能だった。

胡散臭い。一言で言うとなんだった。

実年齢以上の年月を生きてきた幼児——つまり俺を客観的に見た
姿よりもよほど得体が知れないかもしれない。いや、俺よりも得体
が知れないと断言出来た。目の前の老人も、そのバックにいるだろう
人物も。

だが、最終的に俺はこの老人が出す提案を受け入れた。

胡散臭い計画だし胡散臭い爺だしその後ろにいる人物も胡散臭い
が、何故か首を縦に振ってしまった。

何故か？ と問われればそれに縋るしかなかったから、と俺は答
えるだろう。

人を、それも自身を産んだ家族を二人も殺してしまったのだ。人
で無しだったが、それでも自分を産んだ両親を殺したのだ。

それなのに自分はどうか？ 殺した両親の無残な末路を見て当然
の結果だと歓喜していた自分はなんなんだ——？

きつとそんな自分を否定したいから、自分がそんな人で無しとは
認めたくないから、この怨返^{ギフト}しが俺に何かしらの凶悪な影響を与え
たからだ、そうやって自身を正当化したいがためこの計画に縋る
しか出来なかった。

醜く浅ましい自己防衛だと口汚く猛然に罵る自分が心の何処かに
いると気付きながら、しかしそれでも俺は首を振ってしまったのだ。
きつともう後戻りは出来ない。だが、後悔はなかった。

フラスコ計画の実験体候補として不知火袴に養われる。それを俺が了承してからの不知火袴の行動は早かった。

喜色満面とは言えないが、それでも嬉しそうに口端を吊り上げ笑いながら必要な書類を処理すると言ってその場から去る姿にはどことなく悪役臭が……。いや、なんでもない。

「後日また会いに来ますよ」と言い残し遠ざかっていく背中を見ながらしばしその場に佇む。

宿無しとなった——血塗れのダイニングで3歳の幼児を生活させる訳にもいかなかったからだ——俺は一時的に保護施設で寝泊まりする事になっている。背後から近付く事情聴取でもお世話になった恰幅の良いおっさんに車で運ばれてここ数日寝泊まりしている孤児院へ。

その後は特に何もなく、両親を無残に殺された——となっている——俺に腫れ物にでも触るよう接してくる孤児院のお姉さんお婆さんを鬱々しく思いながらもその日は終わった。

猟奇殺人事件となっているあの日から、事情聴取と不知火袴との初邂逅が起こった今日まで——既に三日が経っている。

現場にいた唯一の目撃人である俺の事情聴取がここまで遅れたのは、まだ精神的ショックから立ち直れていないだろうという存分に勘違いを孕んだ気遣いから。

まさか誰が思うのか、その犯人が実の息子だなんて——

……そういえば、^{ギフト}怨返しを知っているという事は、最低でも不知火袴とフラスコ計画に勧誘するよう指示した二人は、俺が実の親を殺したという事を知っているのだろうか？ 月明かりが差し込む俺以外に誰もいない部屋——何故か与えられた個室で、そんな事を考える。

きっと、知っていないなくとも予想ぐらいはついてるんだろう。壁に

背中を預け目を瞑る。元より月明かりしかなく真っ暗だった視界が完全な闇に包まれた。

残虐な人間だと、両親を自らの手で肉片に変えても顔色一つ変えない人で無しだと、そんな常識を逸した化け物だと思われているのだろうか？

——きつとそうなんだろう。事実そうなのかもしれない。お前はそんな残虐な化け物。常識を逸した人で無し——

そう耳元で囁かれたような気になって、サーっと顔から血の気が失せたのが自分でもわかった。

——違う。違うんだ。俺はそんな化け物じゃ、人で無しじゃない

震える声で否定するが、しかし囁きは止まらない。声だけではなく体中が震えていた。

——違う？ 違うのか？ いいや違わない。きつと違わない。お前は化け物だ。人で無しだ。人を人とも思えない残虐な化け物なんだ。嬉しかったんだろう？ 自身を害する有象無象を、怨みを抱いた畜生を、無残な死体に変えてやったあの瞬間、狂ってしまう程に大きな歓喜を感じたんだろう？ ——

震えを抑えようと膝を抱えるが、震えは少しも収まらずにその激しさを増していく。吐き気すら覚えながらも、瞑っていた目を見開く。

真っ暗な闇の中、月明かりに照らされた両親が怨み籠もった酷く不気味な眼差しをこちらに向ける。

——違う、感じてない。感じてない！喜んでなんかないし嬉しかった訳もない！俺は、俺は人間なんだ。化け物じゃない、人で無しでもない。そうだ、そうだよ。俺は人間だ。人間なんだ！だから人を殺したって喜べる訳ないし嬉しくもないし、そうだよそれが人間なんだ。俺は化け物じゃない。化け物は違う。俺は人間なんだよ！——

支離滅裂過ぎて何が言いたいのか自分自身わからないが、それでも口から漏れるのは否定の言葉。

幻覚だと理解していても、それでも不気味な、殺したはずの両親の眼差しから目を背ける。喉が乾く。頭が痛い。恐怖で胸が高鳴る。

——いいや、違う。全く違うし全然違う。お前は間違えようも勘違いしようもないただの醜悪な化け物だ。ただの残虐な人で無しだ

——

未だ止まない囁きに耳を塞ごうとした。そうだ、最初からそうすれば良かったんだ。

チカチカと点滅する視界も閉ざす。

どれくらいそうしていたのだろうか。次第に囁きは聞こえなくなる。

これで大丈夫だ。両親の幻影なんてもう見えないし、意味のわからない囁きもう聞こえない。そう自分に言い聞かせる。

その事に安心しホッと一息吐こうとして、気付いた。

見られている。そう、見られているのだ。すぐ近く、そう、顔を上げればその顔がドアップで映る程に近い場所から、二対の眼差しが、四つの眼光が、俺を射抜いている。俺を眺めている。

もう駄目だ。無理だ。無理なんだ。耐えられる訳がない。

スツと胸に落ちた、まるで元からそこにあったかのように芽生えた——或いはただ認めなかっただけなのか、認めたくなかっただけなのか。必死に抑えていた——感情。それはなんて事もない——怨み。

——死んでも俺に害を与えるのか殺してもまだ現れるのかあれだけしたのにまた俺の目前に立つのか糞が畜生め恨めしい憎らしい怨めしいああ糞怨めしい本当怨めしい何もかもが怨めしい何でこうなっただよ何でこうならなきゃいけないんだよ畜生め畜生がああ糞本当に何でこうなっただよ何でこうなっただよ俺が何かしたか俺の何が悪いんだそんな腫れ物を扱うような目で見るとんじゃねえよ俺に同情するんじゃねえそうだよ俺がやっただよ俺が自分の意志で怨んで殺して喜んで——

ハッと、眠りから目が覚めるような感覚とともに真っ暗になっていた視界に再び月明かりが差した。

幻影はもういない。だがだからと言って脳内を支配する恐怖も怨みも止まらなかった。

自分の意志ではないのに、意識してもいないのに、膝を抱えていた腕が解ける。

そしてゆらりと、タイルが張られた床と水平に右腕が持ち上がった。

つい、声を出す。何をするんだと、震えた声を、喉から絞り出す。

「——おい、何する気なんだよ。何をしたいんだよ。止めろよ、早くっ、早く止まれよっ！」

——何かが軋みを上げ、世界が崩壊した——

——
——
——
——
——

『緊急速報です！ 12月24日の深夜11時59分に、何かが崩れるような轟音を聞き付近に住む男性が外へ出て音のした方向へ視線を向けてみると、なんとそれ以前には確かに孤児院が建っていた場所が更地へ変貌していたとの事です！ 通報を受けた警察はこれを見逃し別爆破テロリストの犯行だと今も調査を進めております！ この事件の明確な被害は未だ判明しており、駆け付けたレスキュー隊が今もなお懸命な救命活動が続いております——え、生存者が一人、だけ……？』

「右腕が疼く……ッ」な第1箱（後書き）

めだかボックスの二次創作小説を書いた時に書こうと思っていた事その2『静まるんだ俺の右腕ッ。おい止めろよっ。うわああああああ』

つまりはあれ。そうあれだ。異常の影響で発狂する主人公。

「罪深い自分が憎いぜ（ドヤア）」な第2箱（前書き）

伏線とか次への布石というか。そんなお話です。

文章量がばらつき過ぎて怖い。一話一話の文章量を統一しようとする余計にばらつきが激しくなります。読者の考えるとばらつきはやっぱない方が読みやすいですよ。 うーむ。

そういえば、読み直してみたら「不知火袴ってこんな人だっけ」とつい首を傾げてしまったんですけど、どこに違和感を感じてるのか自分自身わからない現象がががが。

読者様方は何か違和感感じたりしてませんか？ 違和感を感じたのでしたらお知らせいただくと幸いです。

そんな感じで第2箱。話が全く進まへんやんこのポケット。作者のポケット。みたいな心境になるかもしれません。私の力量不足です。すいません。

「罪深い自分が憎いぜ（ドヤア）」な第2箱

バツと、唐突に意識が暗闇の中から浮上した。身体のあちこちが酷く痛むが、それを気にせずに右腕を持ち上げる。

酷く震えている掌をぼーっと眺め、昨日自分が何をしたのか考えようとして――

「やあ、昨日ぶりですかね。身体の具合はどうですか？」

――真横から声が聞こえた。その内容は何て事もない、ただの朝の挨拶である。しかし、しかしだ――

「……」

――それに返事を返す余裕など、俺にはなかった。

どこか困っているような溜め息が真横から聞こえたが、それを無視して視線を送っていた掌を下ろす。

昨夜、自分が一体何をしたのか？ そんな事は考えずとも、心の奥底では理解出来ていた。

そうだ、俺は何の理由も意味もなく名前すら知らない誰かに理不尽な怨みを抱いて――怨返しキフトを発動した。

なら、あの孤児院に住んでいた、醜悪で害悪な怨みを向けられた罪もない人々は一体どうなったのか――？

胸に焦燥が溢れた。その感情を抑えようともせずに、口を開く。

「あの、孤児院に住んでいた人達は……？」

漏れ出たのは、嫌な現実を認めたくない子供のような浅ましく震えた声。

ともすれば風に掻き消される程に小さくか弱いそれを聞き、真横に佇む老人——不知火袴が口を開いた。

「ああ、あの孤児院に住んでいた方達ですか？ 聞いた話によると、貴方を除いて生存者は一人もいなかったとか——」

――再び、耳元で囁かれた気がした。

——お前は、人で無しの化け物なんだよ——

「うつ、ウあ鳴鳴アアアアアあアあ呼呼アア■■■■■■■■■■ツ
」！

痛む両腕で頭を抱える。視界が霞む。息が荒くなる。頭が痛い。吐き気すら感じる程に胸中を掻き乱す感情——自分に対する恐怖と嫌悪。

何故か、何故か罪悪感を感じない。人を殺した恐怖も――ただ、そんな自分には恐怖が沸いた。そんな自分には嫌悪を感じた。

——何でだ。何で何で何でっ、何も感じないっ!? 人を殺したんだぞ? 理由も価値も意味も必要性すらなく——人を、大勢の人を殺したんだぞっ!? 恐怖を感じろよっ、罪悪感を感じろよっ! 何で恐怖も罪悪感も沸かないんだ!? どうしたんだよ、どうしたって言うんだよ。どうなってるって言うんだよ俺はッ!?

叶うのならこんな自分を殺したい——理不尽で醜悪な自分に、怨みを抱いたから——

その思考に何の疑問すら感じず、叫びを上げたせいか酷く乾いた喉から声を出した。

「ギ、^{ギフト}怨返し。発動——!」

直後——激しい痛みとともに意識が黒くなっていった。

「ふむ——」

身体中から血を噴き出し倒れた少年を眺めながら、不知火袴は考える。

——何故、この少年が選ばれたのか。それは竜宮宝があの方あの方に選ばれた事に対する疑問。

確かに彼の持つ異能——アブノーマル怨返ギフトしは、正確な情報すら知らされていない不知火袴でもその突き抜けた理不尽さや凶悪さ、それを理解出来る程に脅威的だった。こちら側にとっても、あちら側にとっても

——
が、しかし、この少年はその理不尽極まりない異常を少しも制御出来てない。今のまま成長し続けると、こちら側の敵——あちら側になる可能性が高い。

そこで、今の内から彼に怨返ギフトしの制御を身に付けてもらおうと、フラスコ計画の実験体候補という建て前で保護。その後は箱庭総合病院所属の医師達の下で精神的な訓練を積んでもらい、制御を完璧にするという目論見だったのだが——

「——いやはや、参りましたねえ。まさかここまで制御不能コントロールアブルとは……」

あの方から竜宮宝の存在を聞き急いで接触を図ったのは良いものの、しかし接触してから1日と経たずに異常を暴走。アブノーマル孤児院を倒壊させ住民達を殺害——こんな事になると誰が予想出来よう。

良くも悪くも予想以上だったのだ。竜宮宝の異常は。アブノーマル

予想外の出来事は起こったが、倒壊した孤児院。その瓦礫に埋もれていた竜宮宝を予定通り箱庭総合病院へ輸送。大勢の人間が亡くなりはしたがほぼ予定通り進んでいる——そうして安心していた所

に、目が覚めた竜宮宝が血を噴き出して倒れた。やはり予想以上だった。良くも悪くも……。

何が起きたのかは分からないが、何を思ったのかは分かる。

——異常にアブノーマル呑まれる事を恐れながらも、異常になつていく自分にアブノーマル嫌悪しながらも、それでも異常な事をしてしまった自分に対して殺したくなるぐらいの憎悪を感じて——

そんな異常な人を、不知火袴は何度も見てきた。

難儀なものだ。そう不知火袴は心中で呟く。

こんな理不尽がなければ、彼だって幸せに生けていけたのかもしれない。そう同情する自分がいる事に気付きながら、それでも不知火袴はこの少年を切り札として——あちら側に対抗するための兵器として鍛え使用する。それに躊躇う事はなかった。

「——まあ、しかし、この心理状態のままじゃ訓練なんてさせれませんからね。余裕が出来るまで訓練はお預けですか……」

血塗れの少年の、弱々しく歪んだ顔を眺める。血を流し過ぎたのか、顔色が悪い——一応医者と呼んだ。

今更、とも言えるが、今もなお血を流し続けている彼が死ぬと、不知火袴には思えなかった。彼は、この程度では死なない。何故かそんな確信があった。

彼に与えられた個室の病室。そこにバタバタと駆け込んできた医者達に「後は頼みましたよ」と言い残し、その場を去る。

しばらく歩いた所で、「そういえば」と声を出す。

「――あの方は、こうなる事を予想していたんでしょうか……」

立ち止まり、暫し思案してみる。が、考えても詮無き事だ。そんな結論が出て再び足を動かし始めた。

――
――
――
――
――

どうやら俺は死ねなかったらしい。再び目が覚めてしまった。
激しい痛みを感じながらも再び自分に^{キフト}怨返しを發動するが、思った程の威力ではなかった。

何故だ？　こんなにも俺は俺が恨めしいのに――

そんな考えが頭をよぎった直後、可笑しな事に気付いた。

――何故、自分はこんなにも落ち着いているのか――？

錯乱する程に自分が怖くて嫌悪して、自殺しようとするぐらいには自分が怨めしいのに――そんな精神状態であるはずの俺が、何故

こうも冷静でいられる？

嫌悪感はあるし恐怖もある。こんな自分は相変わらず憎らしいし怨めしい。しかし目覚める前、不知火袴の目前で自分を殺そうとした時に比べると嫌悪感も恐怖も少なくなっている気がする。

自分に対する怨みや憎しみが、嫌悪や恐怖とともに減少している。^{ギフト}怨返しの威力が予想したそれよりも低かったのはこれが原因か。と頭の片隅で結論を付け、何故冷静なのか再び考えようとして――

「やあ、少しは落ち着きましたかな？」

扉を開ける音とともに、どこかで聞いたような声が聞こえた。

そちらに視線を向けると、不知火袴が訝しげ気な表情を浮かべながらこちらに近づく姿があった。

今更な話ではあるが、そういえばここはどこなのか。それが気になって口を開こうとして――それよりも前に不知火袴が声を出した。

「――ふむ、目覚めたばかりのようですが、少し質問に答えてくれないでしょうか？」

この場所がどこかは気になるが、だからといって質問を無視して聞きたい程でもない。そう思って頷く。

すると不知火袴は相変わらず訝し気な表情のままこう尋ねてきた。

――何故、新しい傷が出来ているのか――？

どういう意味で言ったのか理解出来ず、つい首を傾げる。

そんな俺の心境を理解したのか、不知火袴はその後こう説明した。

——曰く、俺が自殺未遂をした様子を見てこのまま放置するのは危険だと判断し、最近開発された強力な精神安定剤を注射したらしい。

だからこんなにも冷静になっていたのかと納得していると、不知火袴は続けてこう言い放った。

——精神状態が不安定な異常に用いるため開発されたその精神安定剤は、試作段階の時点で実験体となった異常達アブノーマルの大半を冷静にさせるぐらいには強力だった。

が、何をどう間違ったのかその後も試行錯誤を続け最終的には感情の起伏すらなくす程に強力な、むしろ毒と言っても間違いはない代物になったとか。

この事実を知ったお偉いさん達が即座にこれ以上の開発を禁止したのは良いものの、それでも幾らかは世間に出回る事になり、一時的に冷静にさせるためその精神安定剤を偶然入手していた不知火袴が気絶していた俺に注射したらしい。

全てを聞き終わった直後、何て薬を注射してるんだとつい怨返しギフトを発動してしまう。

今回ばかりは自分に対し嫌悪も恐怖も抱けなかった。やはり予想したよりも威力が低くそれ程傷も付いていない。それでも傷は付いたのだが、不知火袴は少し動揺するだけでその訝し気な表情を崩さなかった。

その様子を見ながらこれなら人も殺さないで済むのだろうか——何て事を考えようとした所で、不知火袴が相変わらぬ訝し気な表情でこう問い掛けてきた。

「感情の起伏すらなくなる程に強力な精神安定剤。それを投薬したはずなのに何故貴方は自傷した、いや自傷出来たのでしょうか？ 憎い自分を殺したい。そんな事は考えられないはずですが……」

言われてみると、確かにその通りだった。

感情の起伏すらなくなるはずなのに、何故俺は自分に対して嫌悪感や恐怖を、憎しみや怨みを感じていたんだろう？　　というか、何故――怨返しギフトを発動出来たのか？

あれの発動には明確な怨みが必要不可欠なのではなかったのか？
そう自問してみても、納得出来る答えは出ない。

どうやら不知火袴もそうらしく、俺の様子を見て落胆しながら「まあ、その事は置いておきましょうか」と話を変えた。

間髪入れずに「そういえば、ここはどこなんでしょうか？」と疑問を解消するため質問すると、不知火袴は「ふむ、先ずはそこから説明しなければいけませんね」と苦笑しながらここはどこか、俺が何故ここにいるのかを説明してくれた。

不知火袴が言うにはここはフラスコ計画に基づき組織された異常アブノーマルを管理、研究するための医療機関らしい。

それを説明した後、倒壊した孤児院から救出された俺はここ箱庭総合病院へ救急車で輸送された。と今度は俺がここにいる経緯を説明してくれた。

その後は不知火袴が大事なフラスコ計画の実験体候補に何かないかと心配してこの病院に来訪し、都合良く目が覚めた俺に今後の説明などをするため話掛けると突然血を噴き出しながら俺が倒れ、その姿を見て直ぐ様医者を呼んで俺が目覚めるまでは病院内を徘徊し有望な異常達アブノーマルに目を付けていたとかなんとか。

いつ精神安定剤を俺に注射したのか聞いてみたら、「治療を終えた頃を見計らってこっそりと、ね？」と笑みを浮かべながら言われた。

何故かその笑みから小物臭を感じていると「入院先にこの病院を選んだのには理由がありましてね」と笑みを消して真面目な顔になった不知火袴が声を出した。

その理由が気になり先を促すと俺に異常アブノーマルの制御を完璧に身に付けさせるため、この病院に所属する異常アブノーマルの監視下で訓練させる予定だった。と俺に説明して、一息空けてから「ですが」と続ける。

「貴方の精神が予想以上に不安定だったものですから、一先ず冷静にさせて今後の説明をしようと例の精神安定剤を注射させていただきました。精神的に余裕が出来るまで訓練は取り止めという事になります」

怨返ギフトしの完璧な制御。それを一刻も早く身に付けたい俺はその言葉聞きつい不満気に顔を歪めてしまう。だが確かに今の俺では訓練にもならないと冷静に考えて、頷く。

感情の起伏をなくす程強力な精神安定剤を注射しても自分に対する嫌悪感がなくならないんだ。薬が切れたら自分がどうなるのか簡単に予想が出来る。

これで何も説明する事がなくなったのか、不知火袴は「また様子を見に来ますから、それまで大人しくしててくださいね?」と言って病室から去ろうとする。

その背中に「わかりました」と声を掛けると、何か言い残した事があったのか足を止めこちらに顔向けた。

「――ああ、それと、その精神安定剤ですが、明日の朝には効き目が切れていると思いますよ」

そう言い残して、今度こそ不知火袴は病室から出て行った。

「罪深い自分が憎いぜ（ドヤア）」な第2箱（後書き）

次からようやく主人公以外のオリキャラが登場します。
予定だと二人……。うん、予定です（キリッ）

これで書きたい話を書けるようになってくる。テンションが上がってきました。

妄想が止まらない。この状態、正しく厨二だッ！

次回は少しだけ球磨川君も出る予定。あと瞳先生も。

球磨川とは話さないだろうし、瞳先生とも長い会話はしないでしようけど。

「僕は悪くないっていうか俺が悪いんですけどねッ」な第3箱（前書き）

予定は予定です（キリッ）

なんて言ってたからなのか本当に予定になってしまったんだぜっ
（キリリッ）

とりあえずさんかいほどこびをつつてくるようんっ！

球磨川は出ないし瞳先生も出ないし主人公以外のオリキャラも結局は一人しか出せなかったし、本当どうなってるんでしょう。

書いては消してを三回程繰り返し、ようやく出来たのがこれです。全然話が進まへん……。プロットの段階ではここまでを一話で済ませるはずだったのに、本当どうなってるんだこれ。つい三回程「あ、ありのまま今おこった事を話すぜっ！」なんて言い始めちゃいました。本当どうなってるんだこれ（作者）の頭。

「僕は悪くないっていうか俺が悪いんですけどねッ」な第3箱

この病院で始めて目が覚めたあの時から、既に一ヶ月が経っていた。

孤児院を倒壊させ瓦礫の下敷きになったにもかかわらず、致命傷らしい致命傷もなかった俺はしかし、未だに病室のベッドで寝た切りの生活を送っていた。

両親を肉片に変え孤児院を倒壊させてしまった事を頻繁に思い出し、その度に自分に対して殺したくなるぐらいの嫌悪や恐怖を感じてつい怨返^{ギフト}しを発動させてしまう。それが原因で傷は増える一方だ。傷が増えるのは別にどうでも良い事なのだが、これだけ怨返^{ギフト}しを発動しているのに何故自分は死なないのか。それが不可解である。

もしか、俺が知らないだけでいつの間にか自分は不死になってるのか。それとも怨返^{ギフト}しでは自分自身を殺せないのか。などと考えてみても納得出来る答えは出なかった。

不死とか、流石にないだろ。後者の考えは何かが違う気がする。そう考えてこの件は保留にする事にした。

それ以外には特に特筆するような事は――

「宝くん、不知火さんからの贈り物だよー」

――ああ、そういえば、一つだけあった。

ベッドから上体を起こして、声の聞こえた方向に視線を向ける。そこにいたのは白衣で身を包んだ、太陽のように暖かい金髪の持ち主。街を歩けば周囲の視線を釘付けにするであろう驚く程に整っ

た顔立ちの可愛らしい少女――

「何かの薬みたいだけど、宝くんは何か聞いてる？」

――に見えない事もない、紛れもない男。現在22歳の既婚者。
現在三歳の娘もいるらしい。

まあ、アレだ。俗に言う男の娘である。

精神的に不安定な俺がまた暴走するかもしれないと考えた不知火袴が、俺が暴走しようものなら瞬時に取り押さえ無力化するために手配した凄腕の異常^{アフノーマル}。と、俺は不知火袴本人から説明を受けたのだが、とてもではないがそうは見えない。

元はこの箱庭総合病院で暴れる異常^{アフノーマル}を鎮圧するために組織された対異常鎮圧部隊。対異とも呼ばれているその隊長だったとか聞かされている。が、やはりそうは見えない。

ここ一ヶ月はほぼ四六時中一緒に――というか、監視されていたのだが、怨返^{ギフト}しで自殺しようとしても一度も止められていない。その事もこの少女みたいな男性の戦闘能力を疑う要因になっているのだろう。

やはり怨返^{ギフト}しを無理矢理止めるには力不足なのではないのだろうか――？

「あー、もう、宝くん聞いているのー？」

――まあ、それは今考える事でもないだろう。そう思って不満気に頬を膨らます、何度見ても少女にしか見えない男性――塞城千夏に声を掛ける。

「すみません。少し考え事をしていて……」

言えないだろう。力不足じゃないのかとか、やはり少女にしか見えなかったか考えていたなんて事は。

そんな事を考えている俺の内心を知らない塞城千夏は、やっと返事が返ってきて嬉しかったのか不満気な表情を満面の笑みに変える。

「ううん、気にしないで良いよ！ それでさ、何が送られてきたのか宝くんは聞いている？」

やはり少女にしか見えない。というか前世で見てきた少女達よりも少女らしく見える。

本当にこの人は男なのだろうか。なんて失礼な事を考えながら、塞城千夏が「これなんだけど」と右手の人差し指でちょんちょんとつついている台車に乗せられた数個のダンボールに視線を向ける。予想よりも多い、な。その中に入っている代物を俺は知っていた。そもそもそれを送ってくれと頼んだのは俺なのだから、知らない方がおかしいのだが。

「聞いてます。っていうかそれを頼んだの俺なんで……」

「あー、そうだったんだ。それで、これって中には何が入ってるのかな？ やっぱ子供らしくおもちゃとかなのかな？ うーん」

よほどダンボールの中身が気になるのか、うんうんと唸りながら首を横に傾けるその姿に思わず苦笑が漏れる。

やはり少女にしか見えないな。それも十代後半の――なんて、またしても失礼な事を考える。良く性別を間違ってナンパされるらしく、少女と間違われる事に嫌気が差したと彼は言っていたのだが、その言動も少女と間違われる要因の一つとは気付いていないのだろうか？

そう考えて、再び苦笑する。

「おもちゃなんかじゃないですよ。ほら、俺って良く自殺しようとするじゃないですか？　それで、傷が増えるばかりなのをどうにかしようと思って、強力な精神安定剤をお願いしたんですよ」

ダンボールの中にあるのは、例の精神安定剤。

量産を中止されたせいで僅かにしか出回っていないそれを無理言
って集めてもらったのだ。

それもこれも、早くこの異能アブノーマルの制御を完璧に出来るよう訓練しなければ――と思っ
てはいるものの、孤児院の事や両親の事が頭によぎる度に自己嫌悪や恐怖でつい怨返ギフトしを発動させてしまう自分を制御するため。

自力で自分を制御しようと試みた事もあったのだが、大量に送られた薬を見れば結果がどうなのかなと言わずともわかるものだろう。不知火袴に頭を下げこの薬を頼んだ時には充分な量が集まるかどうか少し不安だったが、これだけあればきっと大丈夫だろう。

「……」

「どうしたんですか、千夏さん？」

台車の上に積まれているダンボールを眺めながら満足気に一つ頷いたところで、塞城千夏がその端整な顔を苦々しく歪めている事に気付く。

何故そんな顔をしているのか気になり問い掛けてみると、彼は一拍の間を空けてから意を決したように口を開いた。

「……ごめんね。本当はさ、私が止めなきゃいけないのに……」

まるで自分の不甲斐なさを怨むようにそう言った彼は、続けて深々と頭を下げる。

目の前で誰かが傷つく事を黙って見ているしか出来ない。そんな事が我慢ならなくらいには、ここ一ヶ月見てきた彼は善人だった。俺が自殺を図った結果無意味に傷つく度に、彼は「不甲斐なくてごめん」と苦々しく歪んだ顔で謝ってくる。

「今度こそは止めるから」そう申し訳なさそうに言う彼の姿はここ最近見慣れたものである。

だからこそ、と言うべきなのか――

「……いえ、千夏さんが謝る事でもないですよ。元はと言えば俺が――」

――こんな人で無しが、こんな化け物が、彼にそんな表情をさせ

ている事実が我慢ならない。

「――俺が、そう俺が悪いんですから。家族を肉片に変えても大勢の人を殺しても、罪悪感が抱けないどうしようもないくらいに人で無しな俺が悪いんです。そんな自分に殺したくなるくらいに嫌悪を感じて恐怖を感じて憎しみを感じて怨みを感じて――気が付いたら自分で自分を殺したくなっちゃうんですよ。こればかりは俺が悪いんです。千夏さんはこれっぽっちも悪くないですよ俺が悪いんですって人で無しの俺が悪いんです化け物の俺が悪いんですってばっ！　そうだよそうなんだよそうなんですよ、千夏さんは悪くない俺が悪いんですだからほらそんな顔しないで笑ってくださいよただでさえ俺が悪いのに千夏さんがそんな顔すると余計に俺が悪くなっちゃいますっていうか実際に千夏さんがそんな顔するのは俺が悪いからなんですけどね！　あーもう嫌だな何で俺ってこんな駄目なんでしょうかやっぱり化け物だからかな人で無しになっちゃったからかな本当駄目な奴ですよ俺ってそういうええささと俺が死んでれば千夏さんだってそんな顔しなくて済んだんですよあーやっぱ俺って死んだ方が良くないかな死んだ方が良いですよこんな人で無しさつさと死んだ方が良いですよ自分自身が憎らしいですよ本当ほらさつさと死ねよ良いから死ねよ勝手に死ねよっ！　なんで千夏さんにこんな顔させてるんだよこの人で無しなんで両親を肉片に変えたのに喜んでたんだよこの化け物なんで大勢の人を殺したのに罪悪感を感じないんだよ気持ち悪い奴だな本当憎らしいし怨めしいよああ死ねもう早く死ねよ殺してやるから俺が殺してやるから自分で殺してやるからッ――」

にっこりと、自分でも驚く程に綺麗な笑みを浮かべて塞城千夏の呆氣に取られたように見開かれた目を見つめる。

「――ああ、何度も言うようですが千夏さんは、悪くないんですよ？」

「宝くんっ、止めっ――」

「^{ギフト}怨返し、発動――！」

閉ざされる意識の中最後に視界に映ったのは、必死の形相でこちらへと手を伸ばす塞城千夏の姿だった。

「僕は悪くないっていうか俺が悪いんですけどねッ」な第3箱（後書き）

男の娘は良いものだ……。うん、作者の趣味です（キリッ）

そして相変わらずの発狂系主人公。どんどんおかしくなっています。主人公も私の頭も（キリリッ）

「サブタイが思い付かない」第4箱（前書き）

作者は話が進まない病気とサブタイが思い付かない病気に掛かったようですっ☆ミ

どうなってるんだこれ。何とか球磨川は出せたけど、しかし話は進んでいない。本当どうなってるんだこれ。

大体プロット通り進んではいるんですが、予定したよりも展開が遅いですおすし。

っていうか当初の予定だと球磨川と話はしない予定だったのに、何故か会話する流れに。

仕方ないやんっ。ネタが思い浮かんでしまったんやもんっ。どうしようもないやんっ。

まあ組み込んでも今後には影響しない程度のちよつとしたあれなので、大丈夫なんですけどね。

あっ、あと言い忘れてた事があったんですけど、主人公は所謂原作知識を持ってません。

主人公が都合良く原作知識を持っていない。これが本作品で一番の都合が良い設定かも……。

「サブタイが思い付かない」第4箱

孤児院を倒壊させてしまったあの日——12月24日から既に二ヶ月以上の月日が流れ、現在は冬から春へと移り変わる別れの季節。要するに三月になった

ここ箱庭総合病院に来てからの一ヶ月間は、頻繁にやってしまう自殺未遂のせいで傷が増える一方だった。新しい傷が増える度に塞城千夏が沈痛な表情で謝罪してきて余計に自己嫌悪してしまう、という悪環境も傷が増える要因の一つだったのではないだろうか？なんて一ヶ月前に比べると随分冷静になった頭で考えてみるが、やはりあの孤児院倒壊や両親殺害の事が一番の原因だったのではないだろうか。

今は不知火袴に頼んだあの精神安定剤のおかげで落ち着きを取り戻し自殺未遂するなんて事もなくなったのだが、それでも自分に対する嫌悪や恐怖はなくなるらない。

それでもあの精神安定剤を服用している時としていない時では天と地ほどの差があるのだが。

ちなみに、感情の起伏すらなくす程に強力な薬を使っているにもかかわらず何故^{ギフト}怨返しが使えるのか、という謎は謎のままである。知り合いの研究者に原因の解明を依頼した、と数週間前に会った不知火袴は言っていたのだが、未だ何の憶測も付いていないらしい。

いや、別にその謎を解明しさらなる改良を加えた精神安定剤を飲んで感情の起伏をなくしたい。という訳ではないのだが。

感情の起伏がなくなる薬——改めて考えてみても恐ろしい薬である。俺に限って言うのなら、自殺未遂の原因である自分に対する嫌悪や恐怖をなくならないまでも減少させ、その上^{ギフト}怨返しの暴走も抑えてくれるだろう都合の良い薬なのだが……。

その薬のおかげで一ヶ月前までは傷が絶える事なく増え続け、常にボロボロだった——塞城千夏曰く死なない方がおかしいと言える

程重傷だった――俺の身体は、今では元気に走り回れるくらいには回復している。

喜ばしい事だ。喜ばしい事なのだが、何故か塞城千夏は嬉しそうに笑いながらもどこか思い詰めたような雰囲気^{キフト}を纏っていた。

言ってしまうばそんな事は傷が治るもつと前から――不知火袴から彼を紹介され、それから一日も経たない内に自分に^{ギフト}怨返しを發動した時からののだが。

彼は善人だ。善人であるから、俺が自殺しようとする事を黙って見ているしか出来なかった自分を責めているんだろう。

「今度こそ止めるから」と言いながらも一度も止めれず、薬に頼ってようやく俺の自殺未遂がなくなった事に不甲斐なさを感じているのかもしれない。

彼にそんな思いをさせている自分に嫌悪感が増して余計に自分を殺したくなる。そんな俺の心境も彼を苦しませる要因の一つのなのだろう。

冷静になった今なら、彼にそんな思いをさせたくないのならそもそも自殺未遂などするな。と思いはするのだが、しかしそう考えれるのも薬が効いている間だけなのだ。薬の効果がなくなれば、またしても俺は自分を殺そうとするだろう。

こればかりはどうしようもない。自分に対する嫌悪も恐怖もなくならないし、きつとなくしては駄目なのだ。もし、こんな自分に嫌悪も恐怖も感じなくなったのならば、その時こそ本当に――自分は醜悪なだけの化け物になってしまふ。そんな恐怖が、心の中にはあった。

――首を振って、頭に浮かんだ考えを消す。

自分は化け物になどならない。そうだ、俺は人間なのだ。

そう自分に言い聞かせていると、周囲から視線を感じた。

はて、何なのだろう？　そう思って気付かない内に俯いていた頭

を上げ、周りに視線を向ける。が、周囲の人々——その一部に、視線を逸らされる。

その様子を見て、再び俯く。

この病院で既に二ヶ月以上過ごしている俺は、従業員だけでは留まらず定期的に検査を受けに子供を連れて来ている親子などにも顔を知られている。

勿論ただ二ヶ月以上過ごしているだけでそんな事にはならない。

俺の顔がこの病院内で有名になってるのは、ある噂が周知の事実として流れているからだ。

当然、良い噂ではない。

「ママ、あそこにひとごろしがいるよー」「こらっ、指を指しちゃいけませんっ。ほら、早く行きましょ」「今日のはあの子一人なんだねー」「本当、いつもいつも千夏さんに迷惑掛けてるんじゃないわよ」「何回自殺未遂になれば気が済むんだって話だよ」「相変わらず気味悪い子供だなー」「いつかここも倒壊させられるのかな?」「早くどっかに行ってほしいよね」「両親を殺したのも実はあの子だって噂だよ」「え、本当に? 孤児院倒壊だけじゃなかったんだ」「笑いながら肉片に変えたんだって……。本当、気味悪いよね」「でも、噂は噂でしょー?」「いや、信憑性はかなり高いただの噂じゃないと思うよ」「原理はわからないけどあの異常があれば簡単^{アノーマル}に人殺せそうだしね。怖い怖い……」「うわ、目が合ったっ。私殺されるかも……」

突き刺さるのは、侮蔑や嫌悪の視線。

聞こえていないとでも思っているのだろうか。一つ一つの言葉が胸を抉る。

倒壊した孤児院から救出された唯一の生存者。それが原理不明の

アブノーマル
異能持ちで、何故か何度も自分を殺そうとしている。その度に自分を罵倒している様が噂になったのだろう。

最初は意味の分からない異能アブノーマルを持った頻繁に自殺しようとする気味が悪い子供。という噂だったのだが、気が付いたら両親を笑いながら肉片に変えた上に孤児院を倒壊させ大勢の人を殺した、自分すら殺そうとする気色の悪い人殺しという噂になっていた。

噂、と言ってもそのほとんどが事実だからこそ、胸が締め付けられる。

だが、その噂がほとんど事実だとしても——俺がどれだけ苦しんでいるのか、俺がどれだけそんな自分を嫌悪し恐怖し怨んだか、それを知らない人々に好き勝手侮蔑され嫌悪される事に怒りを感じない程俺は出来た人ではなかった。

——望んで人を殺したい訳じゃない！

怒りのままにそう否定の叫びを上げたかったが、しかしそれでは殺したという事が事実だと主張するようなものである。

だからこそ、押し黙るしかない。彼等が言っているそれは、彼等が囁いているそれは、彼等からしたらただの噂なのだ。

お前は化け物だと、そう事実を突き付けられた訳ではない。お前は人で無しだと、そう事実を突き付けられた訳ではない。

そうだ、事実ではないのだ。彼等が口に出す言葉は、彼等からすればどこまで行っても噂でしかないのだ。

彼等が見ているのは噂の化け物で、人で無しの俺だ。真実の俺じゃない。

真実に近かろうがほぼ事実だろうが、あくまでも噂なのだ。だから気にするな。気にする必要はない。化け物だと、人で無しだと——耳元で囁かれている訳ではないのだ。

そう強く自分に言い聞かす。曇り硝子に映る自分を馬鹿にされて、それを曇っているから馬鹿にされたのだと無理矢理納得するような行為だ。

それでも納得しないといけない。無理矢理だとしても、そうしな

ければ自分を抑えない。

初めてこの病院内を徘徊して、自分に対する周りからの印象を知った時——あの時はつい、見境なく周囲の人に怨返しギフトを発動してしまいそうになった。

化け物だと、人で無しだと囁かれたような気がして、あの時は精神安定剤を服用しているにもかかわらずみっともなく否定の言葉を喚き散らしたくなった。

そうなる前に同行していた塞城千夏に引っ張られてその場を去ったおかげかそうせずに済んだのだが、もしあのまま叫びを上げていればまた自分が怨返しギフトに吞まれていたかもしれない。後からそう考えるとそれ以降は自分を無理矢理納得させる事しか出来なくなった。ふと怒りを感じた時、意識しなくともそれが怨みへ変わり気が付いたら見境なく害悪を撒き散らしている。怨返しギフトにむしばまれている俺はそういう人間なのだ。

——決して、元からそういう人間だった訳ではない。

そう誰に言うでもなく心中で呟いて、周りからの視線から逃げるように足を進めた。

こんな視線に晒されている事をわかっていながら病院の廊下を歩いているのには、当然と言えば良いのか理由がある。

朝、目が覚めた時に塞城千夏から言われた言葉がそもその原因だ。

何でも、不知火袴からの指示で俺に検査を受けさせなければいけないのだとか。

そういうアブノーマル異常を管理、研究する病院なのにそれに関する検査は一度も受けてなかったな。などと思いながら何故今なのか聞いてみると、今までは精神状態が不安定だったからと返ってきた。

確かに精神安定剤を服用していない時は精神的に不安定だったし、検査を担当する医者に触れられたくない部分を触れられてつい怨返ギフしが暴走する可能性もある。そう考えて納得しそうになったが、何

故精神安定剤を服用し始めてから随分経った今なのか。という疑問の解決にはなっていない事に気付いた。

訝し気にそれを聞いてみると、苦笑とともにこう答えられた。

「精神安定剤を服用している状態で検査しても、宝くんの異常がどういったものなのかは正確にわからないからじゃない？ だから、精神安定剤を使わなくても大丈夫なくらい精神的な余裕が出来るまでは検査をしないって方針だったらしいけど……、ほら、ね？」

ほら、ね？　と言われても一瞬わからなかったのだが、すぐに思い当たる事があると気付いて納得した。

要するに、一ヶ月経っても精神的な余裕が出来ない事に痺れを切らしたという事である。

その後に「不知火さんに呼び出されたから今日は一人になっちゃうけど、大丈夫？　宝くん、迷子になっちゃダメだよ」と言ってくる塞城千夏にお前はお母さんかと心中で呟いたりして、そういう理由があつて俺は一人で検査室前の待合室を目指して足を動かしているのだった。

未だにこの病院の構造を正確に把握してはいないのだが、所々にある地図のおかげで迷う事はない。

相変わらず周囲から突き刺さる視線について足を早める。

どうせなら人通りが少なさそうな通路を進めば良かった。そう後悔するが、しかしそんな通路を俺は知らない。

千夏さんに聞いたとけば良かった。なんて考えつつも足を動かし続ける。しばらくそうしているとようやくと言えば良いのか、待合室が視界に入った。

早足でそこに近付き、置いてある長椅子へ座る。

ようやく着いたと安堵の息を吐こうとした時、ふと気付く。

——周囲からの視線を気にしたまま名前が呼ばれるまでジッとしなければいけないのか——？

視線から逃げようと早足で来たのが徒^{あだ}となったのか。そう考えて溜め息を吐いた。

どこに行こうがそこに人がいるのならばこういう侮蔑するような嫌悪するような、そんな否好意的な視線を送られる。そんな事すら気付かない程自分は馬鹿だったのか。

もしかしたら、今の俺は舞い上がっているのかもしれない。

検査を受けた結果、両親を肉片に変え孤児院を倒壊させ大勢の人を殺したという病院内で噂にもなっている――間違えようもなく紛れもない事実が、この身を蝕む異常が全ての原因であると担当の医者に判断されたのなら、きっと自分に対する嫌悪も恐怖もなくなる。お前は醜悪な化け物なんだと、お前は残虐な人で無しなんだと、そう耳元で囁かれた言葉を否定するための浅ましく醜い期待でしかないのだが、しかしそれでも舞い上がりずにはいれなかった。

――これで、もしかまた耳元で化け物だと囁かれても、その時は胸を張って俺は人間だと言えるかもしれない。

我ながら浅ましい。そう心中で毒突きながらも、検査へ期待を感じている自分をはっきりと自覚する。

そうやって期待を胸に今か今かと自分の名前が呼ばれる時を待っていた俺の心境に水を差したのは、いつの間にか右側のスペースに座っていた少年のどこか空虚な――事実空っぽの、感情すら感じられない不気味な音色の言葉だった。

「『まったく』何のためだなんて」

『みんな、大人の癖に』『的外れだよねえ』

『人間は無意味に生まれて』

『無関係に生きて』

『無価値に死ぬに決まってるのにさ』

――ふと、気付く。胸の中に、醜悪な怨念が、芽生えた。

「おまいとは相容れないおっ☆」な第5箱（前書き）

何だこのサブタイ。何なんだこのサブタイ。

大事な事なので（以下略

所々説明不足っぽい。その上何かが違う気もする。そんな第5箱です（キリッ）

球磨川くんらしさを頑張って出そうと思ったけれど、何かが違う。それでも頑張って作者的には球磨川くんっぽくする事には成功したんですけど、やっぱり何かが違う。

その内大幅に編集するかもしれません。特に批評がなければしばらくはこのままでしょうけど……。

そういえば、またしても瞳先生が出せなかった。どうなってるんだこれ。

めだかちゃんとか可哀想過ぎて色々とヤバイ。次話になってようやく出せるかもしれない瞳先生も色々とヤバいんだけども。

「おまいとは相容れないおっ☆ミ」な第5箱

ふと胸に沸いた醜悪な感情。それが何故沸いたのか？　そう自問するよりも前に、視線の先にいる不気味な少年がまたしても口を開く。

「『君もそう思うだろう？』 『えーと』 『めだかちゃん？』」

相変わらずの虚構な言葉。それが向けられた先にいたのは、何て事もないおかつぽの――この少年に比べれば、然程異常にも思えないような少女。^{アフノーマル}

その少女の訝し気な表情も気にせずに、少年の言葉は続く。

「『君もきつといっぱい人を終わらせてここに来たんだよね』 『良いんだよそれで』」

『僕や君は何をしても良いんだ』

『だって世界には目標なんてなくて』

『人生には目的なんてないんだから』」

はて、人生に目的なんてなかったのだろうか――？

そう疑問に思い考えようとしたところで、それは違うと悲痛な叫びを上げる自分がいる事に気付く。

ああ、そうだ。それは――違う。そんな無責任な言葉で、逃げてはダメだ。俺は文字通りに言葉通りに、本当の意味で無意味に無価

値に何の理由もなく大勢の人を殺した。

その人達が無意味に生まれて、無関係に生きて、無価値に死ぬと決まっていた？ 世界に目標はなく人生に目的はなかった——？

もし、本当にそうだとしたら、俺はこんな自分に嫌悪を抱く事も恐怖を感じる事もなかっただろう。それはとても魅力的な事で、とても素晴らしい事だと思う。

だが——

「——違う。そうだ、違うんだよ」

無意識に、否定の言葉が出た。

自分でも弱々しいと自覚する程小さな声は、しかし少年には届いたらしい。声と同様に虚構な瞳が、俺に向けられる。

虚構ながらも、ありとあらゆる負を詰め込んだような悍ましさを感ずる退廃的な瞳に見詰められながら、それでも喉からは途切れる事なく次々と言葉が漏れ出る。

——いや、もしかしたらそれは否定の言葉でも何でもない、ただの呪詛だったのかもしれない。

「無意味に生まれた？ 無関係に生きる？ 無価値に死ぬに決まってる？ 本当にそうなのか？ いいや違う、違うだろ。違わなきゃ駄目なんだよ。そうじゃ駄目なんだ。理由もなく無意味に生まれた人を怨んで、無関係に生きる人を無責任に傷付けて、無価値に死ぬ人を無意味に殺して——そう考えれば確かに楽なんだろうな。それはとても魅力的だし凄く素晴らしい事だと思う。そうだ、もし人が無意味に生まれたんだったら、もし人が無関係に生きているんだったら、もし人が無価値に死ぬんだったら、俺は俺を嫌悪しなくて

も恐怖しなくても怒まなくても無責任に普通に幸せに生きていけるのかもしれない。誰が何したって良いのかもしれない。でも、それじゃ駄目だろ。駄目なんだよ。意味があって生まれた人を理由もなく怨んで、関係がある人を無責任に傷付けて、価値がある死を無意味な死に変えて——そんな化け物が、そんな人で無しが、無責任で良いはずがない。無関係で良いはずがない。侮蔑されても恐怖されても馬鹿にされても気味悪がられてもそんな自分を罵倒して嫌悪して否定しながら生きなきゃいけない。そうだよ、そうしなきゃ本当の化け物に——！」

息が荒い。頭が痛い。吐き気がする。それでも呪詛は止まらない。もはや否定の言葉でもなんでもない。紛れもない呪詛だ。ならばこれは誰に向けられた呪詛なのか——考えずとも、それが自身に向けられている事は自覚している。

もしかしたら、この少年が放つ異様な雰囲気呑まれていたのかもしれない。期待していたところに水を差されて、身を焦がす嫌悪と恐怖をなくしてくれるような——そんな魅惑的な誘惑が聞こえたからなのかもしれない。

だからこそ——なのか、自分自身に言い聞かせる。

こんなに簡単に揺らぐ浅ましく醜い自分を、呪詛で縛り付ける。

そうだ。意味があって生まれた人を理由もなく怨んで、関係を築きながら生きる人を無責任に傷付けて、価値がある死を無価値な死に変える。そんな人が無関係なままで、無責任なままで良いはずがないのだ。

そう呪詛を吐くように自分に言い聞かせる。もう誘惑に揺るがないために、醜悪な化け物にならないために——

そんな俺の様子を見た少年は、まるで珍しい動物でも見たかのような、憧れの有名人にでも会ったかのような、そんなキラキラとした——しかしそれでもどんよりとした悍ましい瞳を輝かせ、取って

付けたような不気味な表情のまま口を動かした。

「『わー』『君ってあの子でしょ?』『受付の人が言ってた気味の悪い宝くんだった!』」

『自分を産んでくれた両親を喰いながら肉片に変えて』

『孤児院を倒壊させて沢山の人を殺しておきながら』

『塞城千夏さんって言うんだっけ? あんな綺麗な人といちゃいちゃする』

『何回も自殺未遂をした』『ドン引きする程気味の悪い人って聞いているよ?』

『実はさ』『受付の人にその話を聞いてから』『僕は君と会いたいつてずっと思っていたんだ』

『君となら良い友達になれるかもしれないって思ってたね』

『だから』『僕は、大勢の人を殺しておきながら無責任に平和に過ごしている』『君みたいな人で無しと出会えて』

『とっても嬉しいよ!』」

——啞然。そうとしか言えない状態になった。

胸に蔓延っていた黒々とした感情は、途切れる事なく吐き出され続けていた呪詛とともに飛散する。

自身を縛り付けるための呪詛を止められたにもかかわらず、何も考えられない程俺は啞然としていた。

そんな俺の心境に気付いているのか気付いてないのか、ピクリともしない作り物の笑顔のまま少年は口を動かし続ける。

「『噂で聞いた君は大勢の人を殺しても罪悪感を感じないような人で無しだったけど』」

『でも』『実際の君は案外そうでもないみたいだね』

『人並みに罪悪感を感じようとしてるのに』『どうやっても罪悪感が沸かない』

『もっと悍ましいナニカだっ！』

『でも大丈夫』『わざわざ罪悪感なんて感じなくたって良いんだ』

『無理に自分を変えようとしなくても良いんだよ』

『君が怨むのは無意味に生まれた人で』『傷付けたのは無関係に生きる人だし』

『殺したのは、無価値に死ぬに決まってる人だから』

『だから君は』『これからも罪悪感何も感じずに』『好き勝手に他人を怨んで傷付けながら』『理由もなく大勢の人を終わらせる』

『そんなドン引きするような人で無しのまま』『楽しくへらへらと生きていけば良いよ！』

『僕は』『そんな君となら友達になりたいって思ってるんだ！』

あの孤児院の月明かりが差し込む部屋の中で、真っ暗闇の中で囁かれた言葉。

お前は醜悪な化け物だと、残虐な人で無しだと、そう突き付けられたあの時と同じくらい——いや、もしかしたらそれ以上に大きな恐怖が、唾然としていた脳内に芽生える。

——何なんだ。こいつは——？

両親を肉片に変えたって、大勢の人を無意味に殺したって、罪悪感を感じないような俺と——こいつは、一友達になりたいと言ってくれるのか？（……………）

「『嘘じゃないよ』『僕は』『君みたいな人で無しだろうと』『気にせずに受け入れて』『友達になりたいんだ』」

虚構な笑顔でそう言い切り、こちらへ手を伸ばしてくる少年。
つい、心が揺れた。

こんな人で無しでも、こんな化け物でも、この少年は気にせずに受け入れて、友達になってくれると言うのか？

そうだ。この少年ならきっと気にしない。化け物だろうと人で無しだろうと受け入れてくれる。友達になってくれる。

それなら、そんな友達がいる俺なら——もしかしたら自分を嫌悪せずに、恐怖せずに、心の底から笑えるのかもしれない。

もしそれでも嫌悪や恐怖が消えなくなったら、この少年はそんな俺すら肯定してくれるかもしれない。

思わず、差し伸べられたその掌を掴みそうになる——が、すんでのところで押し止まる。

何を誘惑されている。この手を取ったら、自分は本当の人で無しになってしまうのではないのか！？

揺らぐな。自分は何のためにフラスコ計画の実験体候補となったんだ。化け物の自分を、人で無しの自分を、否定したいからだろう！
自分から人で無しになる道を選ぶとはどういう事だ！？

そう心中で自分に怒鳴りつける。

化け物になど、人で無しになどならない。俺は人間なのだ。今までも、これからも。

だから、差し伸べられた少年の掌を、有りっ丈の力で叩き返した。

「——生憎だが、俺はお前が言うような人で無しではないし、これからも人で無しになる気はないっ！」

そう吐き捨てるように叫ぶ。

しかし少年はそれを気にする事もなく、作り物のような笑顔を崩さない。

「『そっかー』『人で無しになる気はないっ!』『なんて言いながら』『つい僕の手を取ろうとした君なら』『簡単に手を取ってくれ』って思ってたんだけど』

『どうやら見当違いだったみたいだね!』

『でも』『本当に残念だよ』『君とは掛け替えのない親友になれるかもなんて思ってたんだけどなー!』」

「……期待外れで悪かったな」

「『いや』『宝くんは気にしないで良いよ!』『いきなり友達になろうなんて言われたら』『誰だって戸惑うだろうしね!』」

簡単に揺らぐ浅ましく醜い自身を心中で怒鳴りつけながら、出来る限り冷静に少年の言葉に返事を返す。

もう何を言われても揺らぎはしない。俺は人で無しにも化け物にもならない。そう決意して、長椅子から立ち上がり歩き出そうとする。

この少年と話始めてからかなりの時間が経ったような気がしたが、未だに名前を呼ばれない事を考えると実際にはそれ程時間が経った訳でもないんだろう。

歩き出そうとした足を止め周囲を見渡すと、人だかりが出来ていた。

噂にもなってる俺が見知らぬ少年と不穏な空気の中で会話をしていて、いつ俺が暴走するか分からずに冷や冷やしていた人もいるの

だろう。俺が立ち上がりその場を去ろうとしている事に安堵の溜め息を吐いている人も少なからずいる。

その様子を見て居心地の悪さを感じてしまう。この少年とこれ以上は話したくないという心境でもあったので、検査に呼ばれるまでは病院内をぶらぶら徘徊しよう。と考える。

検査の時間になった時に待合室にいらなくても、院内放送で呼び出されるだろう。

せっかく早く来たのに、とんだ無駄足だった。そう心の中で溜め息を吐いて、再び足を動かそうとする。

精神安定剤がなければ^{ギフト}怨返しが暴走していたかもしれない。この薬に随分頼っていると自覚し、今度は実際に溜め息が出てしまった。

「『あれ』『宝くん、まだ検査を受けてないのに』『一体どこに行くんだい?』」

『ちゃんと検査は受けないと』『駄目じゃないか!』」

その場を去ろうとする俺の背中に、制止の声が掛かる。

当然それにわざわざ返事を返すような心境ではないので、鬱々しさを感しながらも振り返らずに前へ進もうとして――

「『ああ』『そういえば、ふと疑問に思ったんだけど』」

『宝くんって』『両親を肉片に変えたって噂でしょ?』

『あの噂が本当なら』『一つ、教えてほしい事があるんだ』」

――再び背後から声を掛けられた。

もし、掛けられた言葉が違う内容だったのならば、気にせずに足

を動かし続けていたんだろうが、これは、駄目だ。思わず足を止め、背後へ振り返る。

「『血の繋がった紛れもない肉親を』 『宝くんを産んだ間違いようもない両親を』

『自分の手で肉片に変えた時って』 『どんな気持ちだったの?』

『噂だと嗤いながら肉片に変えたって話だったけれど』 『やっぱり気になる事は本人に聞いた方が良いかと思ってさ!』」

「――黙れ」

流石に、精神安定剤を服用してようがもう我慢の限界だった。

殺す気で――とまではいなくても、死なない程度に傷付けてその耳障りな声を苦痛に歪んだ悲鳴にしてやる。相変わらず不気味に笑う少年へ、それぐらいの心境で右手を向ける。

流石にこれを、この質問を受けて、我慢出来る訳がない。

何の意図が会ってこんな質問をしたのか――そう考える事は出来なかった。

触れられたくはない部分。無遠慮につつかれたくはない、初めて人を殺してしまった揺るがない事実。

所詮は噂だと――そう思っの質問ならば、いくらでも我慢出来た。

いや、それが真実だと知っている人にそう聞かれたのだとしても、精神安定剤を服用している今なら何とか――そう、何とか我慢出来たかもしれない。

だが――コイツにそう聞かれるのだけは、何故か我慢出来なかった。

何故なんだろうか――? そう思考して、すぐに納得出来る答え

を見付けた。

そうだ。コイツの目だ。

真っ黒で、空っぽで、混沌とした、ありとあらゆる負を凝縮したようなその悍ましい瞳が、俺の醜い部分を見透かしているような気がして――

『あの噂が本当なら』などと言いながら、コイツはきっと確信している。両親を肉片に変えたのは俺だと、確信して、それを確信しているにもかかわらず的確に俺が怒りを感じ怨みを抱くような無遠慮な質問を――

何故そんな質問をしたのか、それを考えれる程俺は冷静ではなかった。だからこそ、理由など気にせずにこの身をむしばむ怨みを少年にぶつけようと右手を彼に向けて――

――ニツコリ、そんな擬音が付いたと錯覚する程に嬉々とした、しかしこの上なく不気味な笑みを少年が浮かべた。

その笑みを見て、つい腕が止まる。

何かを感じた。そう、何か――筆舌に尽くし難い身の毛もよだつような悪寒を、感じた。

脳内にけたたましく警報が鳴り響く。

しかしその底知れない感覚に逆らい未だ消えない怒りのまま、ニコニコと空虚に笑う少年に向けた掌を潰した。

直後、少年の身体から血が噴き出す。

少年の血がすぐそばにいたおかつぱの少女に降り掛かる。真っ赤になった少年を見てか、それとも怨返しギフトを使った俺を見て危機感を感じたのか、周囲から悲鳴が上がる。

しかし、気にならない。今はこの少年に、何よりも早く怨を返したかった。

そうだ、まだ終わらない。まだ全てを返してはいない——
そう思っ掌を開き、すぐに潰す。また少年が血を噴き出す。
開く、潰す。開く、潰す。開く、潰す。開く、潰す。

——それをしばらく続けて、少しずつ少しずつ傷を増やしていく。
何度も何度も傷を付けて、ここまでやる必要があったのか——？
と自分でも疑問になる程傷だらけにして、ある程度怨を返したからか少しだけ冷静になった頭で、そういえば自分は何故こんなにもこの少年に怨みを抱いていたのか。と考える。——が、明確な答えはわからなかった。

触れられたくないモノに無遠慮に触れたからなのか、それとも真実だと確信を持ちながらもあんな質問をコイツがしたからなのか——？ そのどちらも、改めて考えると違うような気がしてきた。
俺が散々撒き散らした怨み。その根本は、何だったのだろうか——
——そう考えようとして、ふと、気付いた。

血を噴き出しながらピクリとも動かない少年が——

「——は？」

——血に塗れながら、傷だらけになりながら、しかしそれでも、
取って付けたような不気味な笑顔を浮かべていた。

思わず、啞然とした声が漏れ出た。

黒々とした怨みが瞬く間に収縮し、頭に浮かんでいた疑問が弾け
飛ぶ。

代わりに芽生えたのは——この異形に対する恐怖。

あの精神安定剤を服用している副産物として怨返しの威力は大幅
に現象している。
ギフト

殺す気などではなく、痛め付ける事が目的だった訳だからある程度
は意識して一回一回の威力を下げていた。

それでも、傷だらけになる程に何度も何度も受けたとなれば、苦痛に顔を歪め泣き言の一つぐらい言うのが普通だろう。

それなのに何故、この少年はこんなにも嬉しそうに、こんなにも空っぽに、こんなにも悍ましく——笑っていられるのか？

理解出来ない異形に対して底知れない恐怖を感じた。身体が震える。

そんな俺を見て、少年の顔がより一層悍ましく歪む。

「『やっぱり』『僕の予想通りだ！』」

『何だかんだ言って』『君は』『人をどれだけ怨んだって』『どれだけ傷付けたって』『何とも思えないような人で無しだよ！』

『その証拠に、ほら！』『ただ友達になりなかっただけの僕を』『ただ無邪気に質問しただけの僕を！』

『こんなにも怨んで』『こんなにも傷付けておきながら』

『まるで自分が被害者だとしても主張するように』『君はそうやって恐怖に震えているじゃないか！』」

ああ——そうだ。理解した。

そもそも相容れないのだ。理由がなくなつて、意味がなくなつて、この少年と俺は、相容れない。俺が俺である限り友達になんかなれない。

乾いた笑い声が喉の奥から溢れる。

この少年は、友達になりたいのだと言いながら——

「『君が被害者で』『僕が加害者だ』」

——ただの無邪気な質問だと主張しながら——

「『僕は悪くない』『そう、僕は悪くないんだ』」

——最初から、俺の心を折ろうとしていたのではないのか？
だとしたら、そうだとしたら——その目論見は、確かに成功した
のだろう。

膝から力が抜け、ここまで飛んできた少年の血で真っ赤になった
床へ座り込む。

「——は、ははっ。お前は、そんなに俺を折りたかったのかよ。そ
んなに俺を人で無しにしたいのかよ——！」

「『……はあ』『全く』『何を言ってるんだい宝くんは？』」

『君は元から』『友達になりたかっただけの僕を』『無邪気に質問
しただけの僕を』『無意味に怨んで』『無責任に傷付ける』『そん
な反吐が出るような人で無しだろう？』

『被害者面するなよ』『この人で無し』

『何度も言ううただけど』『僕は被害者だ』

『だから、僕は悪くない』『悪いのは、人で無しの君だ』」

硝子細工が粉々に砕け散るような、そんな音とともに俺の何かが
壊れたような気がした。

必死に否定していた事実が、突きつけられて——俺はそれを、受
け入れるしかなかった。

「おまいとは相容れないおっ☆」な第5箱（後書き）

宝くん

検査についてわくわく↓球磨川くんに水を差されたお↓何か言ってたからそれを否定していたら何故か友達になりたいって言われた↓何この子怖い……。悔しいっ、でも感じちゃうビクンビクン↓でもダメなのよ。私には友達になれない理由がっ↓って、え？ 何かいきなりトラウマ扱られたんですけどww↓悪い予感がしたような気がしたけど俺は気にしないぜっ。ほら立てよ球磨川アアアア↓何か笑ってるんだけどこの子ww↓おっ、おまいっ、そんな目的だったのか！？↓orz

球磨川くん

検査受けてこいだって。めんどくさいお↓面白そうな子供を発見！ 仲良くなる切っ掛けを作るんだお↓何か宝くんに水を差されたお↓何か言ってたけどぼくあ気にしないぜっ！ ↓僕と友達になって人で無しになってよ！ ↓叩かれた手テラ痛すww↓プランCに変更っ。違うやり方で人で無しにしてやるお↓宝くん発狂したwバルスww↓やーい、やーい、人で無しーww

簡単に書くとこんなお話。両方まともじゃないワロタ。

好きな相手と一緒に駄目になる球磨川くんは、駄目になりたくない宝ちゃんと仲良くなれないぐらいには相性が悪かったりします。身内と一緒に駄目になる。身内じゃなかったから特に意味はない

けど心をへし折る。球磨川くんはそんな人だから、人で無しになりたくないままの宝くんとは根本的に相容れない。そんな設定です。

っていうか、めだかちゃんが本当にかわいそう。

わくわく気分で検査を受けに来たら、変な奴（球磨川くん）に絡まれた上に変な奴同士（球磨川くんと宝くん）の会話に巻き込まれて、最後には変な奴（宝くん）のせいで変な奴（球磨川くん）の血で真っ赤になる。

めだかちゃんの異常の強度がもっと低かったらトラウマになってもおかしくはないっていうレベル。書いてて笑いそうになりました。

「早く俺から離れろ！ 死にたいのかっ!？」な第6箱（前書き）

気付いたら天井だった。結構本気で病院行こうかと思っっちゃったんだぜっ☆ミ

その内加筆する可能性大です。

やっぱり球磨川のキャラが何か違う気がががが。

瞳先生が結局一言しか喋らなかった悲惨。すぐ近くにいるのに今話で少しも出番がないめだかちゃん悲惨。でも千夏さんが一番かわいそうでした。

やっぱり描写不足。力量不足のせいですすいません。上に書いた通り加筆する可能性大です。

「早く俺から離れろ! 死にたいのかっ!？」な第6箱

「球磨川くーん。五番検査室に入ってくれ——って、え? ちよつ、ちよつと! 大丈夫なの球磨川くん!？」

人だかりの向こうから声が聞こえた。球磨川とは誰なのか——と考えようとしたところで、血で身体中を真っ赤に染めながら相変わらずの笑顔で少年が声を上げる。

「『んー、つと』『大丈夫ですよ。ほらっ』」

どうやら球磨川とはこの少年の名前だったらしい。傷だらけになった事すら何て事もないように、血で染め上げられた椅子から立ち上がる。

「『謂れなき暴力にも』『理不尽な痛みにも』『慣れてますから』」

誰が見ても重傷だと、そう判断するような傷を付けられても貼り付けたような虚構の笑みを崩さない。その悍ましい姿に、どこからか悲鳴が聞こえたような気がした。それを気にも留めずに、ぼーつと虚空を見つめる。

何も考えられない。何も考えたくない。人で無しだと、否定してきた事実を突き付けられ、受け入れるしかなかった俺には、もはや何かを考えようとする気力すらなかったのだろう。

何かをする事も何かを考える事も出来ない、曖昧な思考の中で、臆気な意識の中で、こちらにその悍ましい瞳を向けた球磨川を認識する。

——まだ、何かあるのだろうか。既に心は折られている。既に俺は崩壊している。心折られた俺に、崩壊した俺に、まだ、何かをするつもりか？ そう疑問に思う事は出来ても、何をするつもりかと考える事は出来なかった。

どうせ、俺の予想の斜め上を行くような事をしようとしているのだろう。考える事が出来たって、分からない事なのだ。考える気力もないのだし、そんな事を考えようとは思えない。

そして、やはりと言えば良いのか球磨川が放った言葉は予想通りに予想の斜め上を行く、荒唐無稽で理解不能なモノだった。

「『じゃ』『僕は今から検査だから』『これでお別れだねっ！』『君には理不尽に傷付けられたりもしたけれど』『僕は気にしないから』『また会った時には』『その時こそ人で無しの宝くんと』『友達になりたいな！』」

——心を折った相手に友達になりたいとは、気味が悪い程に理解不能だ。

この言葉は俺に少しでも多くの精神的ダメージを与えるために放たれたモノなのだろうか、それとも本気で友達になりたいと、そう思っているのか、虚構の笑顔からはその真意が窺い知れない。どちらにしても、俺にとって都合が悪い事には違いないのだろう。臆気な意識でもそれは明確にわかっていた。わかっていたのだが——

「『つて、あれ』『宝くん、どうしたの?』

『早く立ちなよ』『血で汚れちゃうよ?』

『何がショックでそんな茫然自失としているのか』『僕にはさっぱり分からないけれど』

『さっきも言った通り僕は』『謂れなき暴力にも』『理不尽な痛みにも慣れてるから』『気にしないで普段通り』『君は人を無意味に傷付けたって』『何とも思わないような人で無しのままで良いんだよ!』

『そんな反吐が出るような宝くんが僕は大好きだし』『そんな君にならこんなにもボロボロにされたって』『それを気にせずに受け入れて』『友達になりたいと思う!』」

椅子から立ち上がり、虚構の笑顔のままこちらに歩み寄り手を差し伸べてくる球磨川。

——そうだ。わかっているのだ。傷付けられる事も、差し伸ばされた手を掴む事も、それは俺にしてみればどちらとも都合が悪い事だ。

理由なく人を怨んで、無責任に人を傷付けて、無意味に人を殺した。そんな反吐が出るような人で無しでも、傷付くのは嫌だ。傷付きたくはない。

俺のような人で無しでもこの手を握れば彼ならば受け入れてくれる。それはとても魅力的な事だ。折られた心は、人で無しだと受け入れるしかなかった俺は、そんな俺とでも気にせず友達になってくれる人がいると歓喜すらしている。

だが、甘い誘惑に誘われて手を取ってしまえば、その時こそ本当に、俺は救いようのない人で無しになってしまうだろう。

——そもそも、こいつは俺の心を粉々に砕いた張本人だろう。そんな奴に手を差し伸ばされて何を喜んでいる。何を期待しているん

だ。揺るぎはしないと、つい先程決意したばかりじゃないか。確かに球磨川が言う通り俺は人で無しかもしれない。しかし、だからといって、受け入れてくれるからといって、この手を握ってはダメだろう。

鮮明になっていく意識で、そう自分に言い聞かせる。

——そうだ。手を取る必要はない。手を取る理由もない。この手を握れば、俺は——

しかしそんな思考の中で、こんな俺に手を差し伸べてくれたと、こんな人で無しでも友達になってくれると、そう期待し歓喜している部分も確かにあった。

だから、だろうか、差し伸ばされたその手について腕を伸ばそうとして——

「——っ」

傷心中に手を差し伸ばされて、人で無しの俺を受け入れてくれると言われて、こんな俺と友達になってくれると言われて——浅ましく期待して、醜く歓喜していた自分に、^{ギフト}怨返しを発動する。

身体中から生温い液体が噴き出す感覚とともに、勢い良く飛んだ鮮血が目前に佇む球磨川に降り掛かる。

このタイミングで^{ギフト}怨返しを使い自傷するとは思ってなかったのだろうか、笑顔のまま固まる少年のその滑稽な姿について笑みがこぼれる。

不格好なその笑みが崩れないように意識しながら、予想以上に痛む身体を立ち上がらせる。

そして胸中に芽生えた感情を抑えようともせず、吐き捨てるよう

に声を出した。

「——確かに俺はお前が言った通り人で無しかもしれない。理由もなく人を怨んだって、無責任に人を傷付けたって、無意味に人を殺したって、何にも、罪悪感も感じれない。俺はそんな反吐が出るような奴だ。だけど——」

空っぽの笑顔に、悍ましい瞳に、底知れない恐怖を感じた。

それでも、差し伸ばされた手に、投げ掛けられた甘い言葉に、期待を感じてしまった。

人を理由なく怨んでおいて、人を無責任に傷付けておいて、人を無意味に傷付けておいて——それでも罪悪感を感じない人で無しの癖して、甘い誘惑に心が揺らいた。俺は、そんな浅ましく醜い奴なのだろう。

だからこそ、浅ましく友達を欲しがって、人で無しの自分すら受け入れてくれると言われて心が揺れて、醜い自分に差し伸ばされた、その手を掴みたくなった。

「——それでも、俺は人間になりたい！ 人で無しのままは嫌なんだ！ 今は人で無しかもしれない、もしかしたらずっと人で無しのままなのかもしれない。だけど、それでも俺は人間になりたいんだ！ だから、お前の手は取れない。お前とは——」

——友達に、なれない」

傷付いた俺に差し伸ばされた、人で無しの俺に差し伸ばされたその傷だらけの掌を、叩き返す。そして、精一杯の虚勢を張って球磨川を睨み付けた。

恐怖はまだあった。差し伸ばされたその手を叩き返した事に、後悔を感じている自分すらいた。

だが、それでも、恐怖に震えているだけでは駄目だ。その手を掴んだりしては駄目だ。

俺は、人間になりたいのだ。

だからこそ、底知れない悍ましきを感じさせる球磨川と対面して、恐怖に震えそうになる身体を抑え付ける。

手を叩き返して、友達にはならないと宣言した。

それを聞いた球磨川は、一度も消さなかったその空っぽの笑顔を消した。

「『……ふーん』」

——その声は、どこまでも不吉な音色で、抑え付けていた震えが再び激しくなった。

「『じゃ』『宝くんと友達になるのは諦めるかなー』」

そう言ってクルリと背を向ける球磨川。

ここからでは表情が窺い知れない。その事に安心している自分がいる事に気付く。

彼が放つその不気味な重圧を真つ正面から受け止める。という事が予想以上に精神的なダメージになっていたのだろうか。肩から重荷を降ろしたような、そんな感覚がした。

しかし、それでも——何故か、震えは止まらなかった。

五番検査室へと向かう球磨川の背中に、何故か言い知れない悪寒を感じる。

その悪寒の正体を必死になって考えるが、答えなど出ない。

——何だ。何だ何だ何だ何だ何だ!? この言い知れない恐怖は!?

底知れない悪寒はっ!? 一体何につ、いや一体何をっ

! 球磨川は言おうと——っ!?

何か、何かを言われる。大事な何かが崩壊してしまうような、何かを。

聞いては——

「『それにしても』 『人間になりたい』 『ねえ……?』」

——駄目、だ。

「『無理だよ』 『君じゃあ無理だ』 『人間になんてなれないよ』」

『人間になりたい』 『そう思っている内は』 『君は絶対に人間になんてなれない』

『人間になりたいと思っている内は』 『君はずっと人で無しのままだし』

『人で無しに人間の気持ちなんて』 『わかる訳がないんだから』」

——そう最後に言い残して、今度こそ球磨川は去っていった。
胸中に、考えたくもない、けれど決して消えない疑問が渦巻く。

——君じゃあ無理だ。人間になんてなれない——
そう、なのかもしれない。

——人間になりたい。そう思っている内は、君は絶対に人間にな
んてなれない——
人間じゃない、人で無しの化け物じゃ、人間になんて、なれない
のかもしれない。

——人でなしに人間の気持ちなんて、わかる訳がないんだから——
確かに、そうだ。だから、人並みの罪悪感を感じようとして、だ
けど感じなかった。

——そして、そんな自分に俺は嫌悪と恐怖を感じて——

「——ははっ」

乾いた笑みが零れる。人垣の中からどこかで見たとような、綺麗な
金髪の女性みたいな人がこちらに駆けてくる様子が目に入った。

その後ろに付いてきている人達が俺を取り囲む。

——対異常鎮圧部隊の隊員だろうか。これだけの騒ぎを起こした
のだから来るだろうとは思っていたのだが、しかし予想したよりも
遅い。遅すぎるだろう。もしもっと早くにここに来たのなら、心が
折れる事も、人で無しだと投げ掛けられる事も、お前は人間になれ
ないと突き付けられる事も、あの悍ましい少年に恐怖を感じる事も、

なかったのではないだろうか。

「宝くんっ、早く正気に——」

「千夏先輩っ、近付いては危険です！ 早く離れてください！」

「でっ、でも！ 宝くんが——」

「今は迅速な対処が必要なんです！ 私情は挟まないでください！」

——そう考えると、意識せずに理不尽な怨みが沸く。それを抑えきれるとは思わなかったし、抑えようとも思わなかった。

——そうだ、こいつらが遅いから——

スッと、右手を上げる。

「くそっ！ 目標が行動を開始！ 孤児院を倒壊させる程の異常でアフノーマルも、使わさなければどうという事もない！ 総員、鎮圧行動を開始しろ！」

「たっ、宝く——」

対異常鎮圧部隊の面々が一斉に近付いてくる。

流石異常鎮圧のエキスパートと言えば良いのか、その速度は視認すら難しい程であった。

だが――

「――怨返し（ギフト）。発動」

――こちらの方が、早い。

対異常鎮圧部隊のみならず、人垣を形成していた多くの人々が血を噴き出す。

「ぎゃあああああ！」

「なっ、何なんだよ一体！？」

「ぼっ、化け物！」

「血がつ、いきなり血がつ」

「逃げろっ！ このままだと殺されちまう！」

錯乱状態に陥った人々が、我先にとその場から逃げ去る。

それを視界の端に収めながら、怨返しギフトの明確な標的と認識していたからか、逃げ出した人々よりも傷が随分と深い対異常鎮圧部隊を見詰める。

中には未だ意識を保っている人もいるようだが、その大半が血の海と化した廊下へ倒れ込んでいる。

――そうだ。こいつらが役立たずだから、俺は――

怨みのままに、もう一度右手を握り潰す。

そうすると、今度こそ全ての隊員が気絶した。

怨を晴らせたと、そう歓喜していると先程も見ていたような、何

か大きな怨を抱いていたような気がする血に塗れた背中を人混みの中に見付ける。

——何で、こんなに怨んでるんだろう。

それが気になって思い出そうとするが、すぐに止めた。

怨む事に理由も意味も、必要とは感じなかった。

——怨みたいから怨む。それで良いじゃないか——

そう思って右手をその背中へと向け、握り潰そうとする。が——

「だから、くんっ！」

——背中から感じた衝撃に、手を止めた。

だがそれも一瞬。再び右手を動かして——握り潰す。

背中に生温い液体が降り掛かったような気がして、振り向く。

「——」

そこにいたのは、どこかで見たような、毎日見ていたような、綺麗な金髪を持ち主で——

「止められなくて、ごめ、んね——」

「あっ——あは、あはははっ！ あはははははははっ！」

——その綺麗な金髪が、真っ赤に染まっている事に気付いて、思わず、笑い声を上げる。

「——ははっ、あはははっ！ 何だ何だよなんだよ！ 何で千夏さんがっ、何でっ、何で何で何で何で！ 何で千夏さんがここにいるんだよっ！ 何で千夏さんがこんなに傷だらけなんだよ！ 何でっ、何で千夏さんがっ、気を、失って——！？」

——人間にはなれない。脳内でそんな言葉が、反響した。

「ちっ、がう！ 俺は人間なんだっ。人で無しかもしれないけど、そうだっ！ 俺は人間だっ！ 人間に、なれるんだよ！」

——人間の気持ち分からないのに？ 虚構の笑みに、そう問い掛けられた気がした。

「わからない——？ いや、違う。分かるよ。分かるさっ！ そうだよ。確かに罪悪感を感じないけれど、恐怖だって感じるし誰かを憎いとも思えるし嫌悪感だってちゃんとあるし人を怨む事だっ、て——？」

血に塗れた、塞城千夏を見詰める。

——俺は、この人に情など、感じてなかったのではないか？ 俺がこの人に感じていたのは、情などではなく、ただの理不尽な怨みで——

——俺はそれを誤魔化すために、必死に自分に怨みをぶつけて——

「——っ。大丈夫だ。なれる、なれるんだよ！ そうだ、人間の気持ちかわからなくなっちゃって、人間になりたいだけの人で無しだって、ただの化け物だって！ 人間につ、なれる！ きつとなれる。そうだよそうなんだよなれるに決まってるじゃんあいつが間違ってるんだよ俺が人間になれない訳がないんだよ！」

目前で倒れ込む塞城千夏など気にも留めずに、足を動かした。
向かう先は——

「——なっ、何!？」

——五番検査室。

「早く俺から離れろ！ 死にたいのかっ!？」な第6箱（後書き）

安定の発狂系主人公でした。

怨返し（ギフト）の、っていうか災悪がどういったモノなのか、まだまだ引っ張ります。

球磨川くんはしばらく出てこない予定。次こそ瞳先生と密室で二人きり。瞳先生が悲惨な気がしてヤバイ。めだかちゃんは何か空気になるてしまいます。千夏さんが可哀想すぎてヤバイ。でもやっぱり瞳先生も可哀想すぎてヤバイです。

傷だらけの変な子（球磨川くん）の検査を終わらせたら、今度は傷だらけの変な子（宝くん）に血走った目で絡まれる。瞳先生が見た目通りの精神年齢だったらきつとショック死モノ。

あつ、そういえば、球磨川くんの検査ですけど原作との違いは傷があるかないかだけなので全面スルーです。ってか継ぎ接ぎだらけのぬいぐるみ出し忘れてます。すいません。

その内加筆するかもです。

「おお宝よ。ここで諦めてしまおうとは情けない」な第7箱（前書き）

今回は誤字脱字あるかも。いや探せば前話とかにもあるでしょうけど、今回は読み直しをしてないので特に酷い気ががががが。

誤字脱字があったらご報告してくださいだされば幸いです。

それにしても、瞳先生エ……。

「おお宝よ。ここで諦めてしまおうとは情けない」な第7箱

蹴り開けた扉の先にいたのは、小学生にしか見えない少女——というより幼女。突然の来訪者に驚いたのだろう、驚愕で満ちたその表情を浮かべている。が、だからといってそれを気にしていられるような余裕は、今の俺にはなかった。

塞城千夏との会話で聞いていたような気がする。見た目からは想像も出来ないがこの病院に所属する立派な医者で、一児の母だというその幼女——と言ってもそれでも今の俺より外見年齢は高いのだが——へ掴み掛かる。

確か名前は——人吉瞳。

「——なあ、あんたこの病院の医者なんだろう!? なら早く俺を診てくれ! 早く診察して検査して審査してっ、判断しろ! 俺は人間になれるのか!? 俺は人で無しのままなのか!? なあおい早く早くしてくれ早くしろ早くしてくださいほら早く早く早く早く早くっ!」

「ちよっ、ちよっと、君! 突然何なの!? いえ、それより! 何で待合室がこんな有り様に!? そういえば球磨川くんも傷だらけだったし——」

開けっ放しの扉からあの惨状が見えたのだろう。俺の背後に視線を向けてより一層驚愕している。

普通、あれだけの騒ぎが起きれば医者にだって何らかの連絡が来

と思うのだが、人吉瞳の様子を見る限り連絡はなかったのだろう。情報の伝達が上手く機能していなかった？ それなら対異常鎮圧部隊の到着が遅れた事にも納得出来る。

だがこんな近くであれだけの騒ぎが起こったのだ。気付かないのはいくら何でもおかしい。しかし納得出来る答えは一つもない。強烈な違和感を感じるが、しかしそれについて深く考える事はしなかった。

そんな事より一刻も早く検査をしてほしい。俺でも人間になれると判断してほしかった。

どんどん大きくなっていく身を焦がすような焦燥感を今の俺に抑えられる訳もなく、人吉瞳の驚愕など気にも留めずに口を開く。

「そんな事より早くしてくださいって言うてるだろおい！ ほら早くさあ早く早くしろって言うてんだろ聞こえてないのかよじゃあ聞けよ聞かせてやるから聞きやがれよ早く早く早く早く検査しろ診察して診てくださいい審査してくれほら言うてやったぞ！」

I

声を出す度に、意識せずとも人吉瞳の肩を掴んでいる手に力が入った。揺れる視界の中には何か思い詰めたような、どこかやけになつたような、そんな苦々しい表情をしている幼女。

目に涙を浮かべながら、吐き出すように人吉瞳が声を上げた。

「なっ、何なのよいきなり！　ようやく検査が終わったと思ったらいきなり掴み掛かれて待合室を見てみればあんな事になってるし！　何よっ、私にどうしろって言うの！？」

まるで迷子になり親と離れ離れになった子供のような弱々しく悲痛な叫びだった。

確か球磨川も五番検査室で検査を受けたのではなかっただろうか。あの球磨川が大人しく検査を受けるとは思えない。きっと心が折れるような悲惨な検査になったのではないだろうか。ただの予想に過ぎないが、それでも目前の少女にはつい同情しそうになった。

と言っても当然本気で同情する訳もない。同情する気もない。そもそも他人に同情する程の余裕など、なかった。

「どうしろってだから早く検査してくれって早く診察しろって早く診てくさいって俺はそう言ってるだろそう言ってただろやっぱり聞いてなかったのかそれならもう一回言ってやる何度だって言ってやる早くしろ早くして早くしてください早くしてくれ早く早く早く早く！」

一方的すぎる程に一方的な要求だ。そう自覚する事も出来ずに、人吉瞳が口を開くのを待つ。

脳裏に浮かぶ球磨川の虚構な笑みを気にしないようにして、グルグルと渦巻くあの言葉を意識しないようにして――

しかし、心のどこかでは理解していたのではないのだろうか。俺は――

「……検査しなくても、一目でわかるわよ。貴方は球磨川くんと同じ……。異常以上で、異常以下の、得体の知れない悍ましいナニカ

よ。そして情けない事に今の私は――」

――人間には、なれない。

「――貴方達が普通に幸せな生活を送れるとは、どうしても思えないの……」

予想外とも、予想通りとも言えるその言葉を聞いて、思考が真っ白になった。

――

――

――

――

――

「しかし、これで本当に良かったのですかな？ 宝くん、壊れてしまいそうですよ」

『何度も言うようだが、彼は一度壊れなければいけない』

「……ふむ。それもあちら側に対抗するため、ですか」

『……』

「本当、難儀なモノですねえ」

『……しかし、こうするしか方法はない』

「いえ、それはわかってます。では今後も予定通り――」

――

――

――

――

――

「ほら、飯だ」

耳に入った言葉に、閉じていた目を開ける。

視界に入ったのは食事の乗ったトレイを苦々しい顔でこちらに突き出す対異常鎮圧部隊の隊員。

「……手」

俺がそう言うと、忌々しく舌を打った後にこの窓すらない部屋の角に置いてある小さな机にトレーを置き、こちらに近付いて両手に掛けられたいくつもの手錠を一つずつ鍵を使い外していく。

名前も知らない彼は最後の手錠を外すと、机に置いたトレーをこちらまで持ってくる。それを自由——それでも身に付けさせられた拘束服のせいでなかなか動かない——になった両手で受け取り、乗せてある質素な料理をトレーに置いてあった箸を使って口の中に掻き込む。

あの日、人吉瞳の言葉を聞いて茫然自失としていた俺は背後から衝撃を受けて気絶したらしい。

らしい、と言うのはその時の事を曖昧にしか覚えておらず、後日この部屋に来訪した不知火袴から教えられた話だからだ。

その時にこの部屋——通称、異常拘束^{ロック}の説明も受けた。

ここ箱庭総合病院で問題を起こし更生不可能と判断された一定の基準を上回る強度の異常を、問題を起こさせないために嚴重に拘束し監禁するための部屋。今俺はそこにいる。

この部屋に入る事になった異常は^{アブノーマル}フラスコ計画に連なる研究施設が作成した拘束服の着用を強制され、さらに同上の施設が作り出した手錠と足枷を何重にも掛けられ拘束される。それだけではなく一見ただのコンクリートにしか見えない壁や床、天井も同様の施設が作った代物らしく破壊は困難。唯一の出入り口はついさっき対異常鎮圧部隊の隊員が使った扉だけで、その扉も同様の素材で作られた上に毎時間変わるパスワードの入力、指紋認証に網膜認証、その他にも静脈認証や声紋認証など様々なセキュリティシステムにより管理されている。もし仮に唯一の出口である扉を破壊したとしても、その瞬間に催眠ガスが扉の向こうにある通路に充満し対異常鎮圧部

隊の待機室へ連絡が行く。

^{アフノーマル}異常を拘束し監禁するためだけに考えられ作られた異常施設。そんな場所に俺がいる理由など今更言うまでもない。

^{アフノーマル}俺は検査を受けに箱庭総合病院へ来た異常やこの病院所属の医者や研究者、対異常鎮圧部隊など多数の人々を無差別に傷付けたのだ。そして、俺には更生の余地などない。

あれだけの事をしても罪悪感が沸かないのは変わらず、しかし何故か、そんな自分に対する恐怖や嫌悪がなくなった。だからといって誰彼構わず意味もなく怨み傷付けたいのかと聞かれればそうではないのだが。

^{ギフト}怨返しに吞まれた。という訳ではないと思う。ただ、何もしたくない。そんな退廃的な考えしか思い浮かばなくなった。

未だ人間にはなりたい。そう確かに思っているのだが、それ以上に何もしたくない。

どうせ俺では人間になれないのだ。そんな考えが頭をよぎって、何もかもがどうでも良く思えてくる。

だから、こんな場所に放り込まれても何も思わなかった。

「食べたんなら早くトレーを渡せ。ったく、俺は早くここから出たいんだっつーのによ……」

男の声を聞いて、視線を手元に向ける。気が付いたらトレーの上に乗せてある皿は空っぽになっていた。

それを渡して、手錠を付けられる。そうすると腕が少しも動かなくなかった。

その様子を見届けたからか、男はトレーを持ち小走りでこの場を去っていく。

再び一人だけになった部屋の中、固いベッドにごろりと横になる。

拘束具が邪魔で少し身体が痛い^{アブノーマル}が、それを気にするような気力はなかった。

通常ならば異常拘束に送られた異常は、それ専門の看守に世話——というより管理されるのだが、鎮圧のスペシャリストである対異常鎮圧部隊を単独で壊滅状態にさせた俺を危険視しているものが多いらしく、過剰な拘束でまともに動けすらない俺はどういう訳か対異常鎮圧部隊の隊員に身の回りの世話をされている。

これだけ拘束していれば、もし暴走しても対異常鎮圧部隊の隊員一人で鎮圧出来るとでも思っているのだろう。

実際はこんな^{ギフト}に物々しい監禁場所だろうとどれだけ嚴重な拘束具だろうと、特に理由はないが怨む事が出来るので^{ギフト}怨返しで破壊も可能なのだが、それをする気にはなれなかった。

身体がどれだけ拘束されてようが怨む事さえ出来れば対異常鎮圧部隊を壊滅状態にする事だって出来るのだ。俺を危険視している人物達は、危険視しているにもかかわらず^{ギフト}怨返しの凶悪な危険性を正しく理解していない。

——まあ、だからといってどうという事もなく、逃亡する気も反抗する気も俺にはないのだが。

人で無しのまま変わらないのだから、きっと人間にはなれないのだから、この先もずっと醜悪な化け物のままなのだから、だから——何かをしようとも思えない。

「おお宝よ。ここで諦めてしまおうとは情けない」な第7箱（後書き）

ぶっちゃけるとここまでがプロローグだったりしなかったり。

後数話ぐらいではのぼのになる予定。ほのぼのを何話かやったらその次はシリアス、間違えたシリアルです。

それまでお付き合いしてくだされば幸いです。嬉しすぎて作者が発狂します。宝くんと一緒に（キリッ）

「百合だって関係ないんだぜ☆ミ」な第8箱（前書き）

前話に続いて読み直ししてないので誤字脱字が多いかも。後日読み直して誤字脱字があれば修正します。

新キャラ登場の回。ここからころころと物語を転がしていきたいんですけど、しばらくはリアルが忙しくなるのでころころは難しいかもです。

明日から11月中盤まで毎日更新は多分出来ません。すいません。

遅くても週一で、早くても2日に一回とかぐらいの更新スピードになると思います。

「百合だって関係ないんだぜツ☆ミ」な第8箱

この部屋——異常拘束ロックに入った時から、一体どれだけの月日が流れたのだろうか。

窓も時計もないこの部屋では、時間というものが酷く曖昧で不確かなものに見える。

自分がどれだけ寝ていたのか、どれだけ起きているのか。いつ昼飯を食べたのかいつ朝飯を食べたのか。いつが朝でいつが夜なのか——普通に生活していれば当然のように理解しているそんな事すら理解出来ない。

天井に埋め込まれた小さな蛍光灯では満足に部屋を照らす事は出来ず、瞳を開けて視認した世界は不気味な程に薄暗かった。

明確な時間の感覚もなく、ひたすらに薄暗いだけで娯楽の一つすらないこの部屋では、身体がまともに動けない事もあり何かを思考するというのが唯一の暇潰しでありたった一つの出来る事でもあった。

——まあ、怨返ギフトしを使いさえすればそれ以外にも色々出来る事が増える——脱走とか反抗とか殲滅とか崩壊とか——のだが、やはりそんな事をする気にはなれない。

ただ思考に没頭する。そういえば異常拘束ロックに送られた異常の中には自身の異能アブノーマルを使い自殺した人が少なからずいるとこの前——どれだけ前の事だったかは明確に覚えてないしそもそもわからない——誰かが言っていたなとか、俺も怨返ギフトしを使って自殺しようかなとか、でも多分また死ねないんだろうな——とか、そもそも何で俺は思考しているのだろうかとか、特に意味はないけど誰かを怨んで傷付けて壊したいなとか、とりとめのない事を考えたり思ったり。

しかしそんな無駄な思考もすぐに飛散して、すぐにまた違う事を考え始める。

思考する事に理由などないし当然意味もないのだが、怨返ギフトしを使

わなければそんな事しか出来ないのだし無駄な考えだと自覚しているがそれでも思考する。

いや、思考しないという事も出来るのだが、やはり何もしないというのは味気ない。

何もしたくないのに味気なさを感じて思考するというのはいささか矛盾しているのではないだろうか。そう無駄に思考を巡らすがりや^{ギョ}りそれもすぐに飛散する。

そういえば球磨川と会い俺が崩壊したあの日、あれだけ怨返^{ギョ}しを使っただけにもかかわらず死者は出なかったらしい。何かをするような気力はないがそれを聞いた時は少し喜んでいたような気がするし、同時に落胆していたような気もする。

一体俺——竜宮宝は、どんな精神構造をしているのだろうか。喜んだと思ったら落胆するし、気が付いたら誰かを怨んでいるような気もする。特に理由も意味もないのに誰かを怨みたくて傷付けたくて殺したくて、しかしそれ以上にやる気が沸かない。

今の俺はどんな人間なんだろう。とまたしても無駄な思考を巡らそうとして、直ぐ様訂正。

——そういえば俺は、人間ではなく人で無しの化け物だったか。そう胸の中で呟くと、口の端が吊り上がったような気がした。

苦笑か、それとも失笑か？ もしかしたら人間ではない自分を嘲笑う歪んだ笑みかも知れない。どちらにしろ、何にしろ、化け物の笑みなど醜悪なものでしかないのだろう。

そう考えると、今度は目から何かがポツリと零れ落ちる。

何故涙が出るのだろうか。そう疑問に思うが、答えは見つからない。化け物の癖して何を泣いているのだと、そう自嘲すると何故か溢れ出る涙が増した。ぽっかりと穴が空いた心は、何故か悲しみで満ちていく。

自分が何故泣いているのか、何が虚しく何に悲しんでいるのか、

その疑問を消そうと巡らせていた思考を一度消し、考える。だが、その疑問すら気付かぬ内に飛散。悲しみも、気が付いたら消えている。

胸中に残ったのは氣力を奪い生気をなくすような、そんなひたすら大きい虚無感だけ。

その虚しさに思考する気すらなくして、ぼやけた視界を閉ざした。薄暗い世界が何も見えない漆黒の世界へと変わる。身に付けさせられた拘束具の圧迫感に苦しさを感じるが、次第にそれすら感じなくなつて最後には虚無感だけになる。

曖昧になつていく感覚の中で頬を伝い落ちる水滴を確かに感じながら、何をする気にも考える気にもなれずに固いベッドの上で膝を抱えて座り込んだ。

それからただけ経つたのだろう。頬を伝う涙の感触を感じなくなった時に、扉が開くような音が耳に入った。対異常鎮圧部隊が飯を運びに来たのだろうか。未だ虚無感が消えない頭でそう考えて、しかし今は何もしたくない。飯を食べるようすら思えない。何かを口に入れる気も口に出す気にもなれず、だからといって黙り込むのもアレだろうと思つて飯はいらないと声に出そうとする。が、結局は黙り込む。

やる気が沸かない。何かをしようとも思えない。考える事すら出来ない。

その内出て行くだろ。安直にそう思つて思考を放棄する。

そんな俺の耳に聞こえたのは、聞き覚えのあるような気がする対異常鎮圧部隊の隊員の声などではなく、聞き覚えなど塵程もない綺麗なソプラノの声。まるで幼女のような声に少なからず驚愕し、閉じていた瞳を気怠げに開いた。

真つ暗闇だった世界が薄暗い世界へと変わる。開けた視界に入つたのは、不気味な薄暗さの中でなお太陽のような暖かい輝きを放つ

「えーっと、はじめましてだな——」

——どこかで毎日見ていたような綺麗な金髪の、年端の行かない幼女だった。

「——俺、塞城零夏って言うんだけど……。あの、ちょっとお前とお話がしたいなー、なんて……」

彼女は気不味げに視線を泳がせながらそう言った後、思い悩んだような表情で黙り込んだ。

何故か、空虚だった脳内に何かが芽生えたような気がした。俺はそれを抑える事が出来ず、つい気が付いたら口を動かしていた。何なのだろうか。この感情は——

「……いや、あんた誰？」

——ただの不信感だった。

対異常鎮圧部隊の元隊長である塞城千夏には、一人の娘がいる。

綺麗な金髪と宝石のように輝かしい深紅の瞳を持った愛らしい見た目をしている彼の娘はしかし、誰がどう見ても異常な少女^{アブノーマル}だった。産まれてから一年も経たない内に言葉を発するようになり、それと同時に自らの足で歩き始めた。

彼女――塞城零夏は、父である塞城千夏が気が付いた頃には腕立てや腹筋、スクワットなどの筋力トレーニングを毎日欠かさずしているような紛れもない異常^{アブノーマル}であつた。

しかし塞城零夏の奇行はそれだけでは終わらない。

当時まだ対異常鎮圧部隊の隊長だつた塞城千夏にあらう事か箱庭総合病院へと同行させてくれと頼み込み、断り切れずにそれを了承した塞城千夏は自身の仕事に集中しながらも愛娘に何かあつたら心配していたのだが、その心配は待機室へ響いたノックの音に掻き消された。

誰だろうと同じく待機室にいた数人の部下達に視線を送るが誰も心当たりがないようだ。塞城千夏は訝し気な顔で入室を許可し、そして驚愕した。

何と扉の先から現れたのは、人吉瞳に手を繋いだ彼の愛娘だつたのだ。

――その表情は、何故か気味悪くにやついていた。

その事を愛娘に問い掛けてみるが、しかし返ってきたのは要領を得ない言葉だった。

愛娘に聞いても駄目だと自らの友人に視線を送ると、人吉瞳は苦笑しながら口を開いた。

興味本位で託児室から外に出たら見事に迷って、最終的には人吉瞳がいた五番検査室に迷い込んだらしい。

塞城千夏はそれを聞いて表情を苦笑のそれに変えると、その後ならこのだらしない表情は一体何なのかと問う。しかしそれは人吉瞳も分からないらしく、結局その時に何故彼女がにやついていたのかを理解出来る人はいなかった。

そんな異常とも言える彼女だが、しかし塞城零夏は不幸とは程遠い幸せな生活を送っていた。

彼女は所謂転生者という存在である。竜宮宝と同じの、しかし明らかに竜宮宝とは違う転生者だ。

異常の中でも高い強度を持つ塞城千夏。同様に高い強度の異常である塞城千秋。この二人から産まれた塞城零夏が異常なのはある意味当然とも言えた。

だからこそ彼女は幼児らしからぬ行動をしようが異常な事をやらなくても変わらず今世の両親から愛情を受けていた。

それだけではなく両親が異常らしくない程に普通や特別に友好的な事もあるって、愛らしい容姿をしている塞城零夏は近所に住む人々からも可愛がられて育っていたのだ。

竜宮宝のように両親に気味悪がられ近所の人々からは同情の視線を向けられるなんて事は一度たりともなかった。

そんな彼女は驚くべき事にこの世界で起きた出来事を描いた漫画を前世に愛読していて、その漫画により植え付けられた先入観は塞城零夏に歪んだ認識を持たせた。

——この世界が結局は二次元の世界であると——

まるでご都合主義のように彼女を受け入れる周囲の反応は、その認識を強めさせる一つの要因となる。

——二次元の中で繰り広げられる世界へ来たのだ。ならやる事は一つ——

塞城零夏は一つの願望を持つ。何て事もない呆れた願望。

——好きなキャラにフラグを立ててやるぜっ！——

二次創作ではある意味お約束とも言える願望だった。今世は女として産まれたが、前世は紛れもない男だったのだ。ガールズラブになってしまいが、しかしそれでも精神的なボーイズラブよりマシだ。しかしそれを叶えるためにはある程度の力を付けねばなるまい。彼女はそう考えて訓練を開始した。

お誂え向きと言えば良いのか彼女の肉体スペックは父と母からの遺伝なのか異常な程高かった。アブノーマル

それだけではなく竜宮宝と同様に異能だつてある。アブノーマル 怨返しギフトのように凶悪な代物ではないが、それでも充分に強力な異能が。アブノーマル

ある日それを己が持っていると理解した塞城零夏は、身体の訓練もそこそこに父に箱庭総合病院への同行を頼んだ。

渋る父に根気良く頼み込んだ結果ようやく了承を得た彼女は早速父に同行して箱庭総合病院へ。

前世で見た漫画通りならばその病院には人吉瞳や黒神めだかがいる可能性がある。その二人との邂逅を目的にして塞城千夏の「大人しくしててね」という言葉を全力で無視し、しばらく託児室に待機した後病院内の探索を開始。

その途中で本気で迷ったりもしたが結果的には人吉瞳との邂逅を果たせた。黒神めだかに会えなかったのは残念だが彼女はとうやら

まだこの病院には来ていないらしく、それならば仕方ないと塞城零夏はだらしなくにやけた顔に気付かないまま割り切った。

父にその事を聞かれた時によりやく自分がにやけていたと気付くが、それだけ人吉瞳と会えたのが嬉しいのだろうと塞城零夏は解釈し、その表情を直そうとは思わなかった。

そんな呆れる程に煩惱塗れの彼女はやはり周囲から気味悪がられる事もなく、箱庭総合病院にて球磨川禊と竜宮宝が邂逅するまで過ぎしていた。

歪んだ認識を直そうともせず、歪んだ認識を指摘される事もなく、竜宮宝とは違いそれなりに幸せな生活を送っていた。

そう、球磨川禊と竜宮宝が邂逅したその日までは、彼女は確かに幸せだったのだ。

前世とは性別が違うけれど、何不自由ないこの世界での生活は笑える程に幸せだった。漫画の舞台であった箱庭高校に入学するまでにどれだけフラグを立てれるか。そんな馬鹿みたいな思考を至極真面目に出来るぐらいには幸せだった。

そんな彼女の歪んだ認識をさらに歪ませる事で正し、幸せに馬鹿な事を考える事が出来るその愉快な思考回路を焦燥と恐怖で満たしたのはある二人の少年だった。

彼等が塞城零夏に何かをした訳ではない。ただ見ていただけだ。マイナスワースト見てしまっただけだ。その身体中が総毛立つ程に悍ましい負と悪意を、遠巻きに眺めてしまっただけだった。それだけで彼女は恐怖に震え、歪んだ認識を改めてこの世界を現実だと理解させられた。

「百合だって関係ないんだぜッ☆」な第8箱（後書き）

次も零夏回ですお。

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだからっ！」な第9箱（前書き）

約一週間ぶりの投稿です。遅れてすいません。

木曜にはほぼ完成していたんですけど、納得がいかず書いては消しての繰り返しで気が付いたら土曜。これはあかんと何とか投稿します。

阿呆な転生者を血達磨にしてやるわ！　なんて展開には現時点だとならないので、そーいう展開を期待していた方には申し訳ありません。

注意書きにあったように転生者は複数いるので、その内てんぷらじゃなくて銀髪オッドアイの調子に乗ったテンプレオリ主みたいなのが出て血達磨になる展開はあるかもしれませんけど。

や、調子に乗ったテンプレオリ主とかも作者は好きなんですけど、自小説の中で出すなら痛い目見てもらいたいな。みたいな。

銀髪オッドアイとか胸熱。厨二が服を来たような見た目の主人公がチートとご都合主義を駆使して無双したりリア充したり……。見ていてつい笑ってしまう。でも調子に乗った銀髪オッドアイのイケメン野郎が悔しがったり泣いたりする姿の方がもっと面白い！　みたいなアレです。はい、アレですよアレ。

まあそんなこんなで9箱目です。チルノ的な展開にはならないです。うん。

ではどうぞ。

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだからっ！」な第9箱

ある日、塞城零夏は黒神めだかと球磨川禊が箱庭総合病院に来る時期はそろそろだと知り合いとなった人吉善吉の年齢から予想した。その予想は外れる事なく、それから数週間も経たない内に彼女は待合室に置かれてある長椅子に座っている黒神めだかと球磨川禊を発見。早速話し掛けようと塞城零夏は二人に近付こうとするが、そこで可笑しな事に気付いた。

球磨川禊の横に見た事もない少年が座っていたのだ。しかも球磨川禊はその少年にこやかに笑い掛けている。

——こんなシーンは原作になかった。まさかあいつも転生者なのか？——

そう考え、再びその少年に視線を向ける。やはり原作では見た事がなかった。

描写もされないモブキャラなのかと一瞬思考したりもしたが、しかし球磨川禊があんなにこやかに話し掛けているのだ。そこら辺にいるモブキャラの訳がない。そこまで考えた所で球磨川禊がその少年に手を差し出した姿が視界に入る。

こんなシーンはなかった。やっぱりあいつは転生者だろ。塞城零夏がそう安直に結論付けた所で、件の少年が球磨川禊の手を弾き返した。

それを見て彼女の頭に血が上る。

——何出しゃばってんだよあいつ！——

彼女は我慢出来なかったのだ。自分以外の者が出しゃばるとい

事実が気に入らなかったのだ。

それは真剣にゲームを楽しんでいる途中に横から邪魔をされたような、そんな幼稚な怒り。それが芽生えると同時に、しかし怒りは程遠い煩悩に塗れた思考も芽生える。

——ここで格好良く登場してあいつを懲らしめたらめだかちゃんにフラグが立って、球磨川禊からも一目置かれるかも——

そんな楽観的——というか馬鹿な事を考えながら、怒っているような気味悪くにやけているような、奇妙な表情で彼に近付こうとする塞城零夏。しかしそうやって歩き出そうとした直後に顔馴染みの看護婦に呼び止められる。

どこか慌てたようなその表情に疑問符を浮かべ立ち止まると、話掛けてきた看護婦はあの少年に関する噂話を始めた。

曰く、嗤いながら両親を肉片に変えた人で無し。

曰く、孤児院を倒壊させ多くの人々を殺した化け物。

曰く、自分すら殺そうとする気味の悪い人殺し。

そして最後には、だから近付かない方が良いと付け加えられる。

神妙な顔で語られたその話を、しかし塞城零夏は鼻で笑った。

元は平和ボケした現代日本人である少年がそんな物騒な事を出来るとは思えなかったのだ。

アブノーマル

いくら現実離れた異能を持つとも元現代日本人にそんな事が出来る訳ない。異常に精神が吞まれるという現象を知らず、精神がアブノーマル異常に引っ張られるような事もなかった彼女はそうやって、竜宮宝という名の少年へ再び近付こうとした。

——が、視界に入った光景にその足は止まった。

竜宮宝の周囲が軋むような錯覚とともに、球磨川禊の身体から血が噴き出したのだ。

何が起こったのか理解出来ずに固まる。その間にも竜宮宝は球磨川禊へ向けた右手を閉じては開けて閉じては開けて、その度に世界が軋み球磨川禊からは血が噴き出る。

ようやく頭が動き始めた頃には、遠目からでも確認出来る程に球磨川禊は傷だらけになっていた。

平和ボケした元現代日本人らしく、未だ傷が増え続ける球磨川禊を助けなければとその異様な現象を起こしたと思われる竜宮宝を止めようとした。が、足が動かない。

何故か？ 塞城零夏はそう自問して、すぐに答えを理解した。いや、理解させられた。竜宮宝の無機質な――しかしそれでも身が凍る程に禍々しく醜悪な表情に、感じた事もない本能的な恐怖を感じたからだ。

その時ばかりは常日頃から脳内にあった馬鹿馬鹿しい考えなど忘れていた。

もしあの場に自分がいたら――そう考えると心臓が縮み上がった。ああなっていたのは自分かも知れない。もし看護婦が自身の足を止めてなかったなら、あの醜悪なナニカのそばには自分もいた。そんな考えが脳内で渦巻いて、塞城零夏は身体を震わせる。

無様に逃げ出したくて、情けなく目を逸らしたくて、しかしそれでも、竜宮宝から視線を外す事が出来なかった。目を逸らしても耳を塞いでも無様に逃げ出しても、あの醜悪で凶悪なナニカからは逃げられない。そう本能的に悟った。

この世界で初めて感じた恐怖に塞城零夏は身体を震わせる。そうやって無様な姿をさらしながら、それでも――いや、だからこそなのか、竜宮宝の無機質な瞳の先で未だ血を噴き出し続ける球磨川禊を助けなければと震える足を何とか動かそうとして、ある事に気が付き足を止めた。

震えがさらに激しくなった。言葉に出来ない程に悍ましい異様な異形を見て塞城零夏の膝が折れる。

——笑っていたのだ。球磨川禊は、あれだけ傷付いてなお笑っている。

その事を認識した時には既に原作キャラがどーのフラグがどーのなど考えられなくなっていた。あれだけ傷付いているにもかかわらず何故笑っていられるのか、そう疑問を抱く事すら出来ない。

しかしそれでも理解はした。理解させられた。ここは娯楽として作られた漫画の世界などではない、紛れもない現実だ。そう明確に彼女は理解したのだ。どこまでも現実離れた負の塊マイナスと悪意の塊ワースト。その二人が纏う身が凍り身体が震えるような不気味で醜悪な悍ましさ、彼女はここが現実だと思い知らされた。

その後の事を彼女はあまり覚えていない。

それでも自らの父が竜宮宝の有り様に涙を流していた事は覚えているし、周囲の人間が傷付き怯え逃げ出す中で立つ事すら出来ずに床に座り込みあまりの恐怖に失禁していた事も覚えている。

実の父が血を噴き出し倒れる様子を視界に入れながらも悲鳴を上げる事すら出来なかった事も当然覚えていた。いや、父だけではない。他にも色んな人が傷付き倒れた。その悪夢のような光景はしばらく塞城零夏の頭から離れず、事実悪夢として彼女の精神を緩やかに追い詰めていった。

日々悪質になっていく悪夢。頭から離れない負と悪意の悍ましい表情。その瞳が自分に向けられる事を過剰と言える程に恐れた塞城零夏は箱庭総合病院へ足を運ぶ事を止め、それどころか外出の一切をしなくなった。

球磨川禊は箱庭総合病院で検査を受けた結果異常なしという判断

をされ——実際には異常以上に悍ましい負の塊なのだが——病院へ通う理由がなくなり、検査以降は一度たりとも病院へ足を運んでいない。そして竜宮宝は異常拘束^{ロック}にて今も監禁されている。

よほど運が悪くなければどこへ外出しようとも彼等に遭遇する事はないのだ。自室に引き籠もる塞城零夏は球磨川禊の行方も竜宮宝に施された処置も知らないが、しかしそれでも普通に外出するだけで彼等に遭遇してしまうなんて事はそうそうないと誰だって思うだろう。

そんな事は塞城零夏自身思っていた。ならば何故、そう思っているにもかかわらず外へ出る事を拒み自室のベッドの上で恐怖に震え続けているのか。そもそも運悪く彼等のどちらかと遭遇したとしても自身が何かをされると決まっている訳ではない。それなのに何故塞城零夏はここまで彼等と遭遇する事を恐れているのか。

何をそんなに恐れているのか。彼女自身それが疑問になりそう自問する事もあったが、しかし答えは分からない。

ただひたすらに怖かった。恐ろしかったのだ。ただそれだけで彼女は彼等と遭遇するという塵程しかない可能性に過敏に反応し、そうなる事を過剰に拒んだ。

何故こんなに恐ろしく感じるのか。それは彼女自身分かってはいなかったが、それでも胸中にこびりついて離れない恐怖を乗り越えようとも思えずにあの日から約一ヶ月の間は情けなく臆病に生きていた。

そうやって恐怖に震えながらも日々を消化していたある日。塞城零夏は既に傷が癒え自由に身体を動かせるようになった塞城千夏の苦渋に満ちたか細い呟きを聞いてしまう。

この呟きが後々、竜宮宝が夢のない夢と呼ばれ恐れられるようになる要因の一つになるとは今はまだ誰も知らなかった。

「——やっぱり、助けられないのかな……」

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだからっ！」な第9箱（後書き）

今回のサブタイはアレですね。

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだからっ！」 Ⅱ 「平和ボケした現代日本人って言った方が平和ボケした現代日本人なんだからっ！」
みたいな。

「平和ボケした〜」って全部書くとサブタイが長くなってしまったので、「馬鹿って言った方が〜」になりますた。

それにしても、何かアレです。ちょっとスランプっぽいです。
日を跨いだのが悪かったのか、上手く書けてないような気がしてヤバイ。爆発しそうです。

次はあまり日を跨がずに投稿出来るよう頑張ります。

「本当にあった生暖かい話。略して本生」な第10箱（前書き）

まず一言、遅くなっていますでした。

労働基準法を全力で無視されて昨日までひーこら言いながら仕事してました。今週は合計50時間オーバー。まあまだマシな労働時間です。

勿論言い訳ではないです。いえやっぱ言い訳でした（キリッ

睡眠時間を削るなりすればきっと一週間に二話ぐらいいは投稿出来たんでしょうけど、睡眠の誘惑に負けました。反省も後悔もありません。睡眠サイコー！みたいな。

まあそれでも満足に寝れていないっていう。ナケルハナシダナ！。

前回から少し時間が飛びます。千夏と零夏のお話はオールカット。その内回想で出てきますが、それまでは事の経緯がわからず「え、なんでwwww」ってなると思います。

予定では今話に入れる予定だったんですけど、時間がなくなり睡眠の誘惑に負けそうになったので次回に入れようかと思っています。

まあ予定は予定（キリッ。と言う事で、もしかしたら次々回になる可能性も……。

注意。今回も描写不足感が半端ないですお。

「本当にあった生暖かい話。略して本生」な第10箱

その弱々しい呟きを確かな意味を持った言葉として明確に認識してしまった事は塞城零夏にとつて不幸な出来事だったのか、それとも幸せな出来事だったのか。ただ父親の呟きを娘が聞いた。それだけならば不幸だなどと思う訳がないだろう。しかし幸せだと思える訳もない。

が、それでも、今に至って言うのならば、あの呟きを聞いてしまった事は間違いようもなく不幸な出来事だったと、塞城零夏は明確に認識していた。

だがどうしようもない。そもそもこうなった原因は自分にあるのだ。あの時あんな態度を取らなければ、あの時あんな返事をしなければ、あの時にあんな事を思わなければ、そう数時間前の行いを後悔しても、何かが変わる訳ではない。ならば無理矢理にでも納得して足を進めるしかない。自業自得なのだから、仕方がないのだ。そう自分に言い聞かせて、目を逸らすな。前を向け。足を動かして前へ進め。そうやって塞城零夏は自分に渴を入れた。しかしたった一歩踏み出す勇氣は出ない。

「どうしたのですかな？ 宝くんはこの先にいるんですよ？ ほら、早くしてください。私だって暇な訳じゃあないんです」

「あっ、はい。すいません……」

だからと言っていつまでもここで足を止めている訳にもいかない。横合いから投げ掛けられた言葉に返事をして、しばらくの葛藤の後いつもよりも重くなったように感じられる足に力を入れて薄暗い通

路へ足を踏み出した。

向かう先は——異常拘束^{ロック}。

意識せず、つい溜め息が漏れる。自らをここまで連れて来てくれた不知火袴に対して失礼だと自覚はしているが、しかし溜め息ぐらい吐かせてほしい。そう心の中で呟いてから、塞城零夏は横を歩く老人にすら聞こえない程に小さく、またしても溜め息を吐く。

奥に進む連れて通路に蔓延する空気が不気味さを増しているような気がする。ただの錯覚か、それとも事実そうなのか、塞城零夏はそれを明確に判断する材料を持ち合わせていないながらも、しかしそれでも間違いようもなく明確にはつきりと、足を進めることに変わっていく異様な雰囲気^{ワースト}を錯覚ではないと判断した。

そうだ。事実錯覚ではない。何故ならこの先にいるのは竜宮宝^{ワースト}。塞城零夏は知らないとはいえ彼は紛れもない災厄^{ワースト}。醜悪で理不尽で劣悪で最悪な、無意味に悪意を撒き散らし無責任に他人を傷付ける事を至上とする忌み嫌われるべき人で無し。

今もなお異常拘束^{ロック}にて拘束され監禁されている竜宮宝^{ワースト}が無意識下で放つその醜悪な雰囲気^{ワースト}を、未だ異常拘束^{ロック}に辿り着いてすらいらない塞城零夏は明確に感じ取っていたのだ。

錯覚であるはずがない。この禍々しい空気を、この悍ましい雰囲気^{ワースト}を、空間が軋むと錯覚する程に凶悪な存在感を、自らは覚えていく。この先に竜宮宝がいるのなら、これは錯覚であるはずがない。むしろ不自然だと言える程自然にそう理解した塞城零夏は、震え始めた身体をなんとか抑え付け歩みを早めた。

自らの歩調が早まるとともにそれと同じように速度を増した不知火袴の足音を認識の外でぼんやりと聞きながら、胸中に芽生えた感情を気にしないよう必死に足を動かした。

不幸だなんだと言ったって今更どうしようもない。そもそも自業

自得なのだ。嘆く事こそお門違いな事なのだろう。もう逃げる事も出来ないのだし、腹を括って前を向け。もしこの先で竜宮宝と陰悪な雰囲気になって襲い掛かれたとしても、自分にはアレがあるのだ。この前は忘れていたが、しかし今ははっきりと覚えている。だから大丈夫だ。怖がる事なんて何一つない。

塞城零夏はそう考える事で気を抜けば失禁してしまいそうな程に強大な恐怖を消そうとするが、しかし成果は得られない。震えは止まらないし気を抜けば失禁しそう。だがそれでも胸中を駆け回り駆け巡り掻き乱すこの得体の知れない恐怖をなくそうと塞城零夏は思考を続ける。

そうしてしばらく歩いていると、突如肩を掴まれて歩みを止められる。

これから行う事に対して感じていた緊張。近付くに連れて増していく竜宮宝に対する恐怖。それを消そうと一心不乱に思考を続けていた時に突然肩を掴まれた事に対する驚愕。それらが緋い混ぜになって頭の中が真っ白になる。

元から緩んでいた尿道がさらに緩み少しアレが出そうに――何かとは言わない――なるが、しかしすのでところでキツく締める事に成功。ギリギリセーフだと一息吐く暇もなく、今度は背後から呆れたような声が投げ掛けられた。

「零夏さん、曲がり角を曲がらないでどうするつもりなんですかな？　まさか壁を壊して前に進むなんて言い出すつもりじゃ――」

――ありませんか。そう続けられるはずだった言葉は最後まで続かず、薄暗い通路に鳴り響いた甲高い悲鳴に掻き消される。

「ぴぎいいいいいいいいいいいつ!？」

緊張。恐怖。驚愕。それらが緋い交ぜになり爆発した結果が緩んでいた尿道がさらに緩んで少しアレが出そうに——何がとは言わな（以下略——なる。という事だけのはずがなく、突如投げ掛けられた声を聞いて塞城零夏の錯乱はもはや狂乱の域に達した。

間拔けな悲鳴を上げながら右肩に置かれた不知火袴の掌を右手で弾き、そのままの勢いで振り上げた右腕を出鱈目に振り落とす——

「びぎやああああああああああっ!？」

——いつの間にか足を二、三步踏み出せば衝突する程に近付いていた目前の壁へ向かって。

「……」

当然と言えば良いのか、異常を拘束し監禁するためだけに考えられ作られた異常施設——異常拘束へと続く通路が、二桁にすら達していない年齢の幼女が破壊出来るような脆い物であるはずがなく、一見ただのコンクリートにしか見えないその壁は異常の中でも群を抜いた戦闘能力を持つ者達で組織された対異常鎮圧部隊の面々でも破壊不可能な程強固だ。高い強度を兼ね備えた異常達から生まれ、その異常さを色濃く受け継いだ幼女でも、前世の記憶というアドバンテージを産まれた時から兼ね備えていた転生者でも、そう易々と破壊出来る訳はない。

狂乱状態になり訳も分からず逃げ出そうとし、そんな代物を幼女ながら異常と言^{アブノーマル}える程に強力な力で殴り付けた結果、壁には傷一つ付いてないにもかかわらず塞城零夏の拳は真っ赤に腫れ上がる。この状況で骨が砕けなかった事に感心するなんて事を不知火袴に出来る訳もなく、普段は細められているその瞳は驚愕と困惑で見開かれ何も喋れずに固まっている。

そして当然、そんな状態の不知火袴を気にする余裕など狂乱状態の塞城零夏にはない。強烈な痛みを訴える右拳を左手で抑えながら、より間抜けになった悲鳴を上げる。不知火袴が驚愕と困惑から立ち直った時には、塞城零夏は目の前から消えていて、ただ視界の端にその小さな後ろ姿が見えるだけだった。

この通路はもしも異常拘束^{ロック}から脱走者が出た場合に足止めをする役割を持っており、箱庭総合病院の一般公開されていない階層――地下三回から地下一三回。その内の地下十一階と地下十二階を丸ごと使い形成された複雑な迷路になっている。

今いる場所は異常拘束^{ロック}に近いと不知火袴は記憶しているが、それでも複雑な構造故に距離を詰める事すら出来ずに迷う可能性は高い。例え迷わなくとも、足止めとして開発されたこの通路には数多くの対異常トラップ^{アブノーマル}が用意されているのだ。そのどれもが異常拘束^{ロック}に監禁される程の異常に對抗するために作り出された凶悪な物であり、実験という建て前でこの迷宮に放り出された実験体^{モルモット}は一つの例外もなく無惨な死を遂げている。

異常拘束^{ロック}を管理する看守や対異常鎮圧部隊の面々。例外としてフラスコ計画において高い地位を持つ極一部の人々だけが知る事になる地下十一階から異常拘束^{ロック}までの安全ルート。高い地位を持つ不知火袴がそれを知っていたが故にここまでは無事で居られた。しかしその安全ルートを知らない塞城零夏がこの迷宮内で一人になり、この先も無事のままで居られるのか――？

――否、無事で居られる訳がない。良くて死亡。普通で死亡。悪

くて死亡。きつとこのままでは彼女がこの迷宮に放り込まれた実験モルセ体と同じ末路を辿る事になる。果たしてそれで良いのだろうか――？
そう不知火袴は自問して、即座に否定。そうだ。このまま彼女を、
塞城零夏を死なせてしまったら――

「――最悪な、災厄の結末に――！」

それだけは駄目なのだ。自分の為にも、旧友達の為にも、あの方の為にも、塞城零夏を死なせてはいけない。塞城零夏の死は災厄な未来への片道切符。彼女がいなくては、竜宮宝の一悪化（進化）は止まらない。そして竜宮宝の一悪化（進化）は、未曾有の大災害の明確な予兆――

「――不知火袴です！ 今すぐ地下十一階から異常拘束ロックまでの道程に設置してあるトラップを全て停止に！ 手の空いている看守は監視カメラから塞城零夏の探索。発見後はその位置までのナビゲートをお願いします！ 今は脱走者が出る可能性を気にする必要はありません！ 塞城零夏を生かす事。それだけを意識してください！
もし塞城零夏が死ぬような事態になれば――」

「ああ——始まったか」

「うん、そうだね。どうやら始まったみたいだ。今頃不知火袴は顔色を赤青黄と変えながら忙しく慌てふためいていると思うんだけど、彼曰く旧友の君はそのところどう思っているんだい？」

「……」

「……黙りかい。すぐそうやって黙りするのは相変わらずだね。人外である僕にしてみればいつまで経っても変わらない知り合いがいるという事は嬉しい事でもあるんだけど。まあ君が変わっていないなんてただの戯れ言だよ。冗談にしてもセンスが無さ過ぎる。でも皮肉としてはなかなかセンスがあると僕は思うんだけどどうだろう？ 昔の君は慌てふためく友達を見て逆に心配される程に心配するような友達思いの良い子だったのに、今となっては——」

「……自覚は、している。だからこそ、こうなるようにしたんだ」

「——今の君は、本当にからかい甲斐がないね。まあ、そんな事はどうしても良いんだけどさ。それじゃ、そろそろ僕は帰るよ。どうせ、この先の出来事も僕の出る幕がないくらいには決まっているんだろう？ それなら僕は大人しく観客席に座ってるぜ。元からしばらくは手を出さない予定だったしね」

「……感謝する」

「いやいやいや、感謝したいのはむしろ僕の方だぜ？ 彼等には手を煩わせていたからね。その悩みがたった一人が犠牲になるだけで解消されるなんて、僕にしても願ったり叶ったりだよ」

「……」

「じゃ、今度こそ僕はお暇するぜ。さようなら——人外」

「……さようなら、人外」

「本当にあった生暖かい話。略して本生」な第10箱（後書き）

次も日曜に投稿する予定。仕事をしているとニートになりたいと思ってしまう私は間違っているんでしょうか……？

「ある日迷宮の中、ラスボスの間へ続く扉を見付けたS城R夏さん」と第11巻

時間が足りないイイイイイイイ!

正直言う今日は投稿出来ないかと思ってたんだぜっ☆ミ

忙しいのは十一月中盤まで。そう思っていた時期が私にもありました……。

実際には十二月序盤までだった死にたい。嫌な……、誤情報だったね(神妙に

まあ何とか投稿出来た訳ですが、しかし話が進まない。

主役キャラの心情をしつこく書いているからなのか、やけにねちっこく見えますし。

「どカーん。ズギヤギヤギア。私は死んだ」なんて事にはなりません、ある程度は減らした方が良いんでしょうかね。心理描写とか説明文を……。

いや、まあ、減らすと言っても内容が薄っぺらくならない程度の絶妙な減らし方を——やっぱり駄目だった。

来週も何とか一度は投稿したいです(キリッ

でも無理かも知れないです。オワタ。しかし頑張る。

「そんな意気込みで大丈夫か?」「大丈夫だ。問題ない」「やっぱり駄目だった」

万人に称えられ崇められ好かれる心優しき勇者が、万人に恐れられ嫌われる悪しき魔王を倒す——そんな陳腐なエピソードで語られる、魔王が座すに相応しい豪華絢爛な王座が鎮座する最後の間。目を逸らしたくなる程に邪悪で強大な存在感に満たされたそこへと続く扉。それを目の前にしたのが勇者であれば、勇猛果敢に扉を蹴破りその先に待ち構える悍ましき魔王へ剣を向けるのだろうか——

だが当然と言えば良いのか、彼女——塞城零夏は勇者ではない。ここが所詮は二次元の世界であると、どこまでいってもこの世界は現実足り得ないと、そう誤認していたのなら、脅威を脅威と感じられない程に楽観的な思考の下に目前に佇む物々しい扉を蹴破る事だって——実際には彼女程度の力ではそんな事は出来ないのだが——出来たのかも知れない。

しかし今の彼女は何の間違いもなくこの世界を異常が闊歩し過負荷が嘲うとある漫画に酷似した——酷似しているだけでしかない、紛れもない現実であると正しく認識していた。

——ならば当然、異常な身体能力アブノーマルを備えていようと、強力な異能アブノーマルを持つていたとしても、平和な日本にて平凡な日々を過ごしていたどこにでもいるような普通な人間でしかなかった彼女が、転生という非現実的な出来事を経験し異常な力アブノーマルを手に入れた今でもその時のまま変わっていない塞城零夏が、扉を蹴破り魔王に剣を向けるなどという無謀な行為を出来る訳がない。

だからこそ、と言うべきなのか——

「――」

――不気味な雰囲気が蔓延する薄暗い通路の先にある物々しい扉。塞城零夏はそれを視界に収めたまま先程まで無我夢中で動かし続けていた足を止め、驚愕を隠す事も出来ずにか細い声を漏らした。

「え、これって――」

今でも頭から離れないあの悍ましい負と悪意。マイナスワーストその片割れ――切る事もせずに伸ばされたのか、色褪せた黒く長い髪を無造作に下ろした不気味な風貌の少年、竜宮宝。餌を前にした飢えた獣のような、そんな血走った禍々しい瞳をしていた彼が纏っていたあの身が凍ったと錯覚する程に悍ましい雰囲気。それに酷く似た雰囲気が扉の奥から滲み出てこの薄暗い通路を浸蝕しているような気がして、塞城零夏は恐怖を感じるとともに――

「――目的地に到着。って事なのか……?」

――この扉の奥には竜宮宝がいて、何の疑問を抱く事もなく確信した。

塞城千夏と塞城千秋。その二人から産まれた異常、塞城零夏は転生者である。しかし違った。同じく転生者である竜宮宝とは残酷過ぎる程に違った。共通点は現代日本からの転生者であるという事と、同じ年齢である事のみと言っても過言ではない程に違い過ぎた。

——彼女は親に愛された。彼は親に嫌悪されていた。

——彼女は笑って、彼は笑わなかった。

——彼女は隣人に可愛がられた。彼は隣人に同情されるとともに、気味悪がられていた。

——彼女は嘲わず、彼は嘲った。

——彼女は転生後に幸福な人生を送っていた。彼は転生後に不幸な人生を送っていた。

——彼女は壊れず、彼は壊れた。

——彼女は馬鹿げた夢を見ていた。彼は惨めな夢を見ていた。

——彼女は異常で、彼は災厄だった。

——彼女は少女で、彼は少年だった。彼女は夢想家で、彼は夢すら見れなくなった。彼女は幸運で、彼は不運だった。彼女は、彼は、彼女は、彼は——

何もかもが違った。産まれも性格も転生後の生活も性別も夢も全てが違った。転生者であるという事と同じ年齢であるという事以外は何もかもが違い過ぎた。それは揺るぎない真実であり、紛れもない現実だった。塞城零夏と竜宮宝が違い過ぎるという事実は変えようがない残酷なモノである。

——そう、思っていた。

しかし違った。現代日本からの転生者であり、同じ年齢。それだけが二人の共通点だと思っていたが、それだけではなかった。

彼女と彼には、それ以外にも共通点があったのだ。

塞城零夏はこの世界を紛れもない現実だと認識し、それと同時に三つの事柄に恐怖を抱いた。

何に對して、と聞かれれば彼女はこう答えただろう。めだかボックスで起きた出来事が現実になる可能性と、めだかボックスに登場した一部のキャラクター達。そして竜宮宝や自分のような転生者イレギュラーに對してだと。

この世界はめだかボックスという漫画に酷似しただけでしかない現実だ。そう、漫画に酷似しただけの、現実である。

ならばめだかボックスで実際に起きた喜劇や悲劇イレギュラーが起きる可能性はそう低くないはずである。竜宮宝という異物を除けば、原作内で起きたイベントは——黒神めだかと球磨川禊の邂逅。人吉瞳による球磨川禊への検査の事である——取り立てる程の変化もなく現実で起きた。

そして黒神めだか、人吉善吉、球磨川禊や人吉瞳と言ったキャラクターも現実に生きている人間としてこの世界にいる。まだ確認してはないが、他の原作キャラクターも三次元を生きる一人の人間としてこの世界にはいるのだろう。

舞台も役者も酷似していて、その粗筋も今の所は——転生者イレギュラーを除

いて――さして変わってはいない。

だからこそ彼女は怖かったのだ。

この先に起こるだろう悲劇が、現実として自身に牙を向く可能性は高い。塞城零夏はその予測に恐怖を感じた。

原作にて脅威的な能力を用いて闘争を演じたキャラクター達。漫画の中で描かれたその二次元の存在達が、三次元に生きる人間として自分に襲い掛かる可能性だって0ではない。いや、可能性が0ではないとは言ったが、しかし実際にはその可能性はむしろ高い方である。原作内で起きた偉業にして異形。それが現実の出来事として箱庭総合病院にて起きる可能性は、先程も言った通り高いはずだ。

ならば箱庭総合病院にて働く塞城零夏の肉親――塞城千夏や彼女が箱庭総合病院へと通う内に親しくなった様々な人々が、塞城零夏へと優しく接していた彼等が、悍ましき過負荷マイナスに傷付けられ痛め付けられ心を折られる。その可能性は0であるなどと樂觀的な思考は出来ない。塞城零夏や竜宮宝などの転生者イレギュラーがこのまま何もしないのであれば、恐らく高確率でそうなるのだろう。

それはとても恐ろしい事だと、塞城零夏は恐怖に震えた。

出来るならば助けたい。傷付けずに、痛みを与えずに、心を折らせずに、何の被害もないまま偉業を阻止したい。

塞城零夏はそんな御都合主義的で幸せな結末を夢想した。しかし彼女には過負荷マイナスと立ち向かう勇気がない。

球磨川禊マイナスというトラウマから芽生えた過負荷マイナスに対する認識が、彼女の氣力を根こそぎ削ぎ落とすのだ。

塞城零夏には強力な異能アブノーマルがある。だがもし仮に彼女が原作にて偉業を達成した二人の過負荷マイナスに立ち向かったとしても、誰も傷付かず痛み付けず心が折られない御都合主義的な結末などない。だってここは現実だからと、塞城零夏は夢想した至上の結末を有り得ない事と切り捨てた。

そうなれば後に残るのは一偉業（異形）への恐怖と、知っていても何も出来ない惨めな無力感だけ。

塞城零夏が勇者だったのならば、無謀だとしても強大な過負荷マイナスに一人で立ち向かったのかも知れない。だがしかし、彼女は勇者ではなく臆病者なのだ。強大な敵に一人で立ち向かう事など、出来ない。ならば仲間を集めようと偉業の事を誰かに話し助力を求めたとしても、幼児の戯言だと一笑の下に切り捨てられる様は容易に想像出来る。

こうなればこの先起こるであろう偉業を認知している——自分と同様の、現代日本からの転生者イレギュラーへ助けを請うしかない。そう、それしか偉業を阻止する術はないのだが、しかしそうしようとどれだけ考えたとしても転生者イレギュラーに対しての恐怖が思考を邪魔する。

転生者イレギュラーが箱庭総合病院に所属する、もしくは滞在する人々を助けるように力を貸してくれる確証はない。

初めて邂逅を果たした同郷の人間——竜宮宝は理不尽で醜悪な化け物だった。少し前の自分は正しく現実の世界であると認識する事すら出来ないただの馬鹿だった。

もし竜宮宝のような人物に助けを求めたとしても、その先に待ち構える結末は予想が出来ない。もしこの世界を所詮は仮想のモノであると誤認している人間へ助けを求めたとしても、その果てにある結末は良いものではないだろう。いや、高確率で、本来辿るべきだった悲惨な結末と比べ尚悲惨なモノになるだろう。

現実を空想としか認識出来ない人間がマトモに相対出来る程、彼等マイナスは優しくはない。むしろ嬉々として誤認という弱さに付け込み不幸な現実というモノを教えてくれるだろう。足を引っ張り弱点を晒し最後には心折られる。そんな役立たずがいくら増えようと偉業を阻止出来る訳がない。

だからと言って強力な異能アブノーマルを持った転生者イレギュラーを都合良く見付ける事が出来たとしても、その人物が一緒に過負荷マイナスへと立ち向かってくれるなんて都合の良い事もそうないだろう。脳裏を過ぎった竜宮宝の不気味な姿に塞城零夏はそう結論付けた。

確定した悲惨な未来が、不確定で悲惨な終わりへと変わる。助け

を求めた結果そうなる可能性は低くはない。

ならばどうする。そう自問しても、彼女には都合の良い解決策を思い付く事が出来ない。そもそも、塞城零夏には悍ましい脅威へと立ち向かう勇気などないのだが――

――以上の文を見ればわかんと思うが彼女は臆病者なのだ。

悲惨な現実が待ち構えているとすれば現実を逃避する事しか出来ない程に無力で、悍ましい存在が自身に牙を向ける可能性があれば必死に逃走する程に怖がりで、悲惨な現実を回避出来る可能性も少なからず存在する選択肢を悲惨な現実がより悲惨なモノへと変わる可能性を恐れて選ぶ事が出来ない程には、臆病なのだ。

方向性は違えどその臆病さは自身を人で無しだと認められない臆病な竜宮宝との紛れもない共通点であった。

何かに恐怖を感じ逃げようとする。そんな臆病さは誰だって兼ね備えているのだろうが、しかしそのありふれた臆病さは切っ掛けさえあれば時として強大な変化を生む。

臆病な塞城零夏。臆病な竜宮宝。彼等が巡り会うのは或いは必然だったのか、塞城零夏は決められた道筋^{レベル}を歩くかのように竜宮宝との対面を望んだ。

――切っ掛けは彼女の父、塞城千夏のか弱い眩きだった。

それが後に数々の悲劇を起こす始まりの鐘であったと、そう認知している人間は誰一人としていなかった。

「ある日迷宮の中、ラスボスの間へ続く扉を見付けたS城R夏さん」と第11巻

案の定、と言えば良いのか千夏と零夏のやり取りが書けなかった。
来週こそは、来週こそは……（↑フラグ

いやなんか、すいません。お気に入り登録してくださってる方に
見限られないよう頑張ります。ハイ……。

「臆病者の脱☆引き籠り計画！」と第12箱（前書き）

サブタイに特に意味はありません（キリッ

ようやく千夏と零夏のお話（注…OHANASIじゃないよ！）
を書けました。ほのぼのまで後少し……！　しかしほのぼのに行く
まで後何話必要なのか。シリアスばかり書いていたからなのか所々
シリアルになってるという事態が発生しました。

しかし直す気なし。良いじゃない！　シリアルにはシリアルなり
の面白さがあ（ry）

まあ、そんな感じで。

「臆病者の脱☆引き籠り計画！」と第12箱

そもそも、避けられない悲劇に恐怖し目に見えぬ脅威に怯え震えていた彼女——塞城零夏が、何故異常拘束^{ロック}などという異常施設を指し地下迷宮に足を踏み入れていたのか。

数々の罪を重ねてきた更生不可能な異常^{アブノーマル}。そんな人で無しが数多く収容された施設へと足を踏み入れるなど、普段通りの塞城零夏ならば絶対にしない。

その根拠が彼女は臆病だから——という理由だけでは収まり切らない程、この異常施設は悍ましい狂気に満ちている。それは災悪^{ワースト}、竜宮宝が収容される前から蔓延り続けていた異常施設に相応しい異常な雰囲気であり、高い強度を誇る異常でもそう頻繁に訪れたいとはまかり間違っても言えない程に禍々しく薄気味悪い。

そしてその異常施設内を包む雰囲気は現在、竜宮宝という災悪^{ワースト}を抱え込んだ事でより一層醜悪で悪質なモノへと変わっている。塞城零夏がそんな場所へ自らの意志で出向くなど考えられる事ではない。彼女は臆病者なのだ。そして異常拘束^{ロック}には、臆病な彼女が恐怖に震え怯え逃げ出そうとする事が当然と言っても過言ではない脅威が拘束されてるとはいえ大量に潜んでいる。

それだけではなくこの異常施設には今、塞城零夏がこの世界で初めて明確に認識した脅威——竜宮宝がいる。

はたして塞城零夏にとっての恐怖の対象とも言うべき彼がいる場所へ、臆病者である彼女が自らの意志で足を進めるのだろうか——

——当然、答えは否。

しかし彼女は現に、誰に強制された訳でもなく自らの意志で考え悩みそう決め足を進めた。

ならばこれは一体どういう事なのだろうか？ 塞城零夏に臆病な自身を変える決定的な出来事でも起きたのか？ しかしそれも否。

ならばどうして――

――結論から言えば、塞城零夏の行動は疑問を感じない程に臆病者らしい動機が原因であった。心境の変化があった訳でも何か大きな出来事があった訳でもなく、彼女は彼女として、臆病者に相応しい当然の行動をしたまでであったのだ。

どこか楽観的で、しかし現実的な、そんな甘い考えを現実にするために狂気蔓延る異常施設へと足を運んだ彼女はだが、その考えが楽観的だったと思い知らされると同時に、それ以上に現実的で合理的であったと何の疑問もなく自覚する事になる。

――
――
――
――
――

彼女は今――いや、それよりも早く、この世界を現実と認識したその日から、既知なる異形と未知なる異物への恐怖に怯え続けた。

脳裏を過ぎる悍ましい負。^{マイナス}頭から離れぬ禍々しい災厄。^{ワースト}胸中に渦巻く既知への怯え。決して消えない未知への震え。脳内に浮上する悲惨な未来の光景。何も出来ない無力感。立ち向かう事への恐怖。それらをその小さな身体に溜め込み発散させる事も出来ずに怯え

震えて涙を流し日々を過ごしていた塞城零夏はある日、常ならば太陽のように暖かい――脳天気とすら言えるぐらいに輝かしい笑みを浮かべている父の疲弊し切った弱々しい眩きを聞いた。聞いてしまった。

――やっぱり助けられない？

――自らの父は一体何を助けられなかったのか。心当たりはあった。いっそ確証と言っても良いくらいには明確な心当たりを、塞城零夏は知っていた。それでも、彼女は自問せずにはいられなかった。だが答えは分からず。

――故に彼女は口を開いた。何を助けられなかったのか。誰を助けたかったのか。疑心の中に無視出来ぬ恐怖を抱えながらも、リビングに置かれた革張りのソファへ座り込み項垂れる父へと疑問を投げ掛けた。

返ってきたのは、心の中では分かっていたはずの、しかし認められなかった答え――いや、語弊がある。認められなかった答えではなく、考えたくともそれが出来ない理解不能で意味不明の、塞城零夏からすればそれが答えだと認めようとする事すら出来ない程に認識の外にあった答え。

父が疲弊し弱り切っても助けたかったその人物の名前。心の中では分かっていたながらも認識の外にあったその答えを聞いて、塞城零夏は再び衝撃を受ける。

――竜宮宝。塞城千夏は確かにそう言った。それに対して塞城零夏は衝撃を受けた後、真っ先に自らの耳が正常かどうかを疑った。

しかしそれも当然だ。^{ワースト}災厄を助けようなどと、そんな愚かな事を

思う人間がこの世界に一体何人いるのか。もし災悪ワーストという史上最悪の人で無し集団を知る者ならば、きつと何の疑問も挟まず即座に言うだろう。「きつと一人もいない」と。

塞城零夏は災悪ワーストという呼称すら知らない程に彼等について無知だ。だがそれでも、竜宮宝ワーストの悍ましさは嫌と言う程理解していた。

だからこそ彼女には衝撃的だった。自らの肉親が、血の繋がった父親が、あの醜悪な化け物を思い「やっぱり助けられないのかな」などと言うとは思っていなかった。

自らの父は腐った噂話が囁かれるくらいには竜宮宝の近くにいた。それも二ヶ月以上もの間、四六時中と言っても過言ではないくらいにだ。ならば情の一つや二つ湧いてもおかしくはない。むしろそれが当然だ。これで情が湧かない方がおかしい。塞城零夏にはそう思う事が出来ない。竜宮宝を一目見た事がある者ならば、その大半が塞城零夏と同じように長い時を近い位置で過ごし情が湧いたとは到底考えられないだろう。

何せ相手は竜宮宝。理由なく他人を怨み無責任に他人を傷付け無意味に他人を殺す事を当然の生活習慣とする醜悪で理不尽な化け物を心の奥底に秘めた災悪ワースト。そんな彼と二ヶ月以上の時を共に過ごした結果、情が湧く？ それは有り得ないし考えられない。数多くの人々を怨み傷付け嘲っていた竜宮宝の禍々しい姿は、あの惨劇に居合わせてしまった人々の記憶から今もなお消えてはいない。それは当然、塞城零夏も同じである。

目を閉じずとも鮮明に思い浮かぶ醜悪な化け物。あの悍ましい存在と共に二ヶ月以上もの時を過ごす。塞城零夏からすればそれはとても恐ろしい事だった。いや、塞城零夏ではなくとも、普通特別異常問わずに大多数の人物がそう思うのだろう。

その恐ろしい出来事に直面し、結果的には情が湧く。やはりそんな事、塞城零夏には考ええなかった。

故に彼女は問おうとした。何故竜宮宝を助けようとしていたのか。口を開き声を出し疑問を解消しようと、まずは口を開いた。次いで

声を上げようとし、はたと気付く。

気付いてしまえば、意識してしまえば、何故今まで気にならなかったのか不思議に思う程に不可解な疑問。それは塞城零夏の脳内に渦巻いていた何故あの醜悪な化け物を助けようとしていたのか。という疑問と同等か——いやそれ以上に、不可解で不思議な疑問だった。

だからこそ彼女はグルグルと渦巻いていた疑問を今は気にしないようにして、開いた口から上げるはずだった問いを別のモノへと変えた。

——一体何から、あの理不尽な人で無しを助けようとしたのか。対異常鎮圧部隊の面々を数瞬の内に悉く地へと伏せた化け物に、脅威らしい脅威はそうないのではないのか。

喚き散らすように投げ掛けられたその問いは、要約するとたったそれだけのモノだった。本来ならば錯乱していると言えるぐらいには要領を得ない支離滅裂な問い掛けであったが、それは仕方ないと言えよう。

肉親という者は、どこの世においても娘にとって——或いは息子にとつて——最も近い位置にいる理解者である。竜宮宝が肉片に変えた肉親のようにそれとは正反対の立ち位置にいる者も決して少なくはない。むしろ最も近い位置にいる理解者として自らの子供に接する事が出来ない親の方が多いぐらいだ。だからこそ近い場所にいる理解者。という表現はあってないも同然のモノでしかない。現に幸せな生活を送っていた塞城零夏にしても、その誤った認識を両親に理解されてはいなかった。

しかしそれでも、最も塞城零夏の近くにいた者は塞城千夏と塞城千秋の二人——転生を果たし二度目人生とは言っても、塞城零夏か

らすれば自らの最も近くにいた二人は紛れもない両親であった。

その片割れが、急にどこか遠くへ行ったような、そんな疎外感。

理不尽な人で無しをそれ以上に理不尽なナニカから助けようとしていたという理解出来ない考え。それが塞城零夏に、塞城千夏——実の父親すら理解の外にいる異常であるという錯覚を抱かせた。

その錯覚は愛らしい顔を苦々しく歪めて投げ掛けられた問いに対する返答で、即座に飛散する事になるのだが——

「何から助けようとしていたのかって聞かれても、さ……。助けられないのかな。なんて、ただの比喻だからね。ただ、宝くんを幸せには出来ないのかな……。なんて、思っちゃって……。駄目だよ。私がこんなだと、零夏ちゃんも暗くなっちゃうよね……」

——今にも消えてしまいうような程に弱々しく儂げな表情をその端正な美顔に浮かべ、そう涙ながらに呟いた自らの父親。

その声を聞いて、その表情を見て、塞城零夏は僅かに冷静さを取り戻すともに、この世界に生まれてから高々三年と少しの間に何度も抱いてきた既視感を感じた。

塞城千夏は変わってはいない。困っている人を助ける事を当然と考え、目前で傷付く人を何もせずに見ている事が我慢出来ないくらいには今も昔も善人なのだ。助けようとして助けられなかった時、目前で誰かが傷付いた時、善人過ぎる程に善人である自らの父親はいつだって自身の無力を嘆き悲しみ悔いていた。

塞城千夏は、塞城零夏の父親は、変わってはいない。理解出来ない異常ではなく善人過ぎる程の善人のまま、どこか遠くには行かず最も近い場所に立ったまま、変わってはいないのだ。

その事実が塞城零夏が感じた疎外感を消し去り、幾分かの冷静さを取り戻すこれ以上ない良薬となった。

まだ完全に冷静になったとは言えないまでも、それでも彼女は憑き物が落ちたような安心感を覚えた。両親が変わらないままदैてくれる。それは塞城千夏と同様に疲弊し切っていた塞城零夏の心を癒やすには十分な程の暖かい事実。

――が、しかし、少しの冷静さを取り戻したところで、新たな疑問が浮上した。塞城零夏はその疑問に、即座にある種の期待を抱く。だからこそ彼女はまたしても問いを投げ掛けた。先程のように喚き散らす事はせず、臆病者の小物らしい見下げた期待の下に、答えやすいよう出来るだけ柔らかく――

「――その宝くんって、どんな子なの？ 優しいパパがやっぱり幸せに出来ないのかな。なんて言うぐらいなんだし、相当不幸な子なんだよな？ って、あ、そういえば！ 宝ってどこかで聞いた名前だなーって思ってたんだけど、もしかして病院で噂のあの竜宮宝？ あはは、さすがのパパでも、あんな人で無しを幸せには出来な――」

――そこまで言ったところで、視界がブレる。一瞬遅れてやってきた衝撃と痛みに、自らの頬が叩かれたんだと塞城零夏は理解した。叩かれた衝撃でズレた視線を元に戻す。そこにいた右手を振り抜いた体勢のまま咎めるような目付きを自身に向ける父親は、今度は振り抜いた右手をゆっくりと動かし、頭上の付近でまたしても振り下ろした。

――しかし先程とは違い、痛みを感じない。

「――叩かれた頬っぺた、痛いでしょ？ でもさ、今零夏ちゃんが言った言葉を聞いたら、宝くんはもっと痛い思いをするんだよ。あ

の子は確かに強力な異能アフノーマルを持つてるけどさ、だからって好きでそんなものを手に入れた訳じゃないんだ。両親を肉片に変えて孤児院を倒壊させたっていう噂は本当かもしれないし、この前は箱庭総合病院で沢山の人を傷付けた。だけど、あの子は、宝くんは、化け物じゃないって、人で無しじゃないって、泣きながらさ。アフノーマル異常に吞まれないよう心を壊すようなお薬にまで頼って……。それでも駄目で暴走しちゃったけど、その時、宝くん泣いてたんだよ？　きっと、すごく辛かったんだと思う。本当は優しい子なんだよ。だから、そんな子を傷付けるような事を、零夏ちゃんには言ってほしくないかな……」

優しさの中に僅かな悲しみを秘めた瞳をこちらに向ける塞城千夏の、慈愛に満ちた暖かい音色の言葉。それを聞いて、塞城零夏は喜びに口端を吊り上げた。

グルグルと、脳内に蔓延り続けていたこの先に起こるであろう悲劇への恐怖。それが少しだけなくなって、身が軽くなる。

その心境を必死に抑えて、しかし吊り上がった口端は直そうとせぬまま、彼女は声を上げた。

「——うん。じゃあ、今度からはそういう事は言わないようにする！」

先程言った通り、塞城零夏が自らの父の疲弊し切った表情に感じた疑問。それに彼女は期待を抱いていた。

確定した、或いは既に不確定になってしまっている未来。前世に愛読していた漫画と酷似した、酷似しているだけでしかない現実。自らが生きる現実の出来事として高確率で起こるだろう数々の悲劇

に対する恐怖を打ち払う、一つの光明。怯え震えるしか出来ない無力な臆病者である塞城零夏はそれを、自らの父親が浮かべる疲弊し切った表情から見出し連想する事で見付ける事に成功した。

塞城千夏は善人過ぎる程に善人だ。助けれずに傷付かせてしまった者がいたのならば、自身の無力を嘆き悲しみ悔いる程に。だからこそ娘である塞城零夏は、そんな父の苦々しく歪んだ顔や疲弊した弱々しい顔を何度も見てきた。しかし、ここまで疲弊し切った父を見た回数はそれ程多くもない。

それでも塞城零夏は知っていた。塞城千夏がここまで疲弊しているのは、決まって助けたかった相手を助けられなくて――その人物が何らかの幸せを必死に求めた結果、幸せを手に入れる事に絶望した時。

ならば、竜宮宝にもあったのではないのか。必死になって手に入れようとした幸せが――？

――もし、その幸せを、自身が与える事が出来たのならば、きっと竜宮宝はどんな相手が敵であろうとその悉くを理不尽に淘汰してくれる。

塞城零夏は自らの父の表情を見て、そう考え期待した。果たしてその期待は、今のところは裏切られてなどいない。

問題なのは竜宮宝にとっての幸せ。それを知らない事だった。故に父の逆鱗へとギリギリ触れる程度の発言をし、慈愛に満ちた一情報提供（説教）を喜んで受けた。

竜宮宝にとっての明確な幸せが何なのかは生憎と分からなかったが、しかしそれでも大きな進歩だ。

物騒な薬を使ってまでその身を蝕む異常から逃れようとしていたというのだから、普通の人間ノーマルになりたいのだと塞城零夏は解釈。

ならば普通ノーマルの人間であると、竜宮宝を肯定し続けていればいずれは自分に心を開くかもしれない。臆病者らしく他力本願な思考の下、

彼女は樂觀的な考えを巡らし歓喜に笑う。

これで偉業阻止は達成出来る。そう考える彼女は間違っていない。

災悪^{ワースト}は悪意の塊であると同時に、理不尽の権化である。そんな彼等は災悪^{ワースト}に目覚めた時から常に淘汰する側にいた。淘汰される事などなく、ただ悪意の赴くままに理不尽に淘汰し続けていた彼等。そんな化け物を相手にして、淘汰され続けていた過負荷^{マイナス}が膝を折らずにいられるのか。

過負荷^{マイナス}が災悪^{ワースト}を打倒するなど現実的ではない。だからこそ偉業を阻止する仲間として竜宮宝を選択したのは間違いない。竜宮宝という化け物に付け込むチャンスを見い出せた事はこれ以上ない程の幸運だった。

しかし彼女は無知なのだ。災悪^{ワースト}という事象に対して、彼女は無知過ぎた。

その結果、彼女は災悪^{ワースト}の気配に怯え震え尿道を緩める事になった。そしてそれから間を空けず、塞城零夏は竜宮宝^{ワースト}を前にして後戻り出来ない愚行を犯す事になる。

「臆病者の脱☆引き籠り計画！」と第12箱（後書き）

緩んだ尿道^{レール}。決壊する防波堤。止まらない水害……。新たなワースト、水金淘汰。押し寄せる（黄色がかった）津波を、塞城零夏は押し留める事が出来るのか――？

次号、急展開！ 刮目して見よ――当然嘘です（キリリッ

「Q:友達になるために重要な事は?」「A:まず第一に漏らさない事です」

本作、たからボックスもついに第二章……。長かった。ひたすらに長かったです。

これも読者様達のおかげです。今までありがとうございました。
第二章からはついに物語が動き始めて、ワーストやイレギュラー達の謎が明かされ始めます。

バトル、ほのぼの、シリアス、恋愛、シリアル……。様々な要素を詰め込んだ作者の力作。たからボックス、第二章「尿道決壊編」
それなりに高いクオリティーだと自負しておりますので、読者の皆さんはワクテカしながらお読みください！

と、いうのは勿論冗談です。

なんだよ尿道決壊編って。胸が熱くなるn（ry）

まあそれはともかく、やっと宝くんと塞城零夏が異常拘束で出会

うまでの話を書き終わりました。

これまでの話にも言えますが、地味に伏線が隠されています。お暇ならお探してみても一興——な訳はないですよ（キリッ
ワーストについての設定が徐々に明らかになっていきます。読者様からすれば疑問符を浮かべざる得ない設定かもしれませんが、現在出ているワーストが宝くんだけの上に、その宝くんもワーストらしくはないので疑問符を浮かべてしまうのも仕方ないかと。

読者様がワーストの設定に疑問符を抱かなくなるようなキャラクターや展開を用意しているので、それまで辛抱していただけ幸いです。

では、記念すべき第二章「尿道決壊編」第1箱！ 始まりま——
——終わりました。

「Q: 友達になるために重要な事は?」「A: まず第一に漏らさない事です」

確定した悲劇と、未確定の惨劇。不安定でありながら既に当然の事象として確定されている未知。自身を含めた周囲をそれらから守るため——当然、臆病者である彼女からすれば自己の安全が第一なのだが——元凶の悉くを淘汰し得る戦力の確保を目論み、竜宮宝に焦点を向けた塞城零夏の判断は間違っていないかった。

災厄——そう名付けたのは一体誰だったか、はともかくとして、それは彼等を表現し呼称すること上なく適切な名称だ。

悪意的な災害。或いは、悪意故の災害。

喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、慈しみ、憎しみ——そういった人間として当然あるべき感情が、須く道德に唾を吐き捨てる非人道的な行為に直結する人で無しの中の人で無し。それだけならまだ良いいや、良い事など一つもないのだが、しかしまだマシだ。

彼等は感情があろうがなかろうが、そんな事は関係なく悪意的な——或いは悪意故の——結果を残す。

その理不尽な人間性こそが彼等を災厄足らしめる根本であり本質である。その理不尽性は人格のみならず彼等の持つ異能にすら影響を与え、何て事もない異能は災害のように理不尽な暴力へと豹変した。

ありとあらゆる法則が適用されない頂上にして法外の力。それは悪意に染まり切った醜悪な人で無しを悪意撒き散らす最悪の災害へと変える程に、絶対的な暴力だった。

ならば理不尽の権化である災厄を前にして元より淘汰される側である過負荷は勿論、産まれながらの上位者である異常ですら淘汰されるべき有象無象へと成り下がる事は当然と言っても良いだろう。

別に、おかしい事ではない。おかしい事ではないのだ。

——未曾有の大災害を前にして法が人々を守らない事と同じくら

いいには、おかしくはない。

だからこそ、何度も言うように災厄——竜宮宝に近付き媚びを売り、肯定し賞賛し心を開かせ友達となり仲間とし、そして結果的には自らの敵を淘汰すべし暴力とする。その目論見は間違っていない。

が、しかし、竜宮宝が今いる場所は異常拘束^{ロック}。

脱走も侵入も不可能な程に数多の罠が設置され幾多もの精密機械によって管理されたその異常施設へ、産まれてから十の年数も経っていない異常の小姑娘^{アフノーマル}がたった一人で侵入出来る道理などない。

ならば当然、異常拘束^{ロック}の最奥にて監禁されている竜宮宝に近づく事は不可能。竜宮宝が異常施設に拘束され監禁されている時点で、塞城零夏の目論見は破綻していたのだ。近づく事が出来なければ、媚びを売り肯定し賞賛する事も当然出来ない。臆病者である彼女の目論見は元から破綻していた、決して叶わぬ夢想でしかなかったのだ。

——まあそれも、塞城零夏一人であればの話である。

何の偶然か何の奇跡か、塞城零夏は一人ではなかった。いや、一人ではなくなったと言った方が適切か。

彼女が来たるべき脅威に対抗するため竜宮宝に近付こうと決意し目論みながら幾日も経っていないある日の事だ。塞城零夏は後悔の念に苛まれていた。

目標を目前にして居ても立ってもいられなくなり、考えなしに行動をしてしまう。後になってその事を後悔するが、時既に遅し。その事実^{事実}に後悔の念を強くするが、やはり時既に遅し。そんな悪環境は誰しも——とは言わないが、少なくとも人数が経験しているだろう。

その日、塞城零夏はそんな心境だった。

いざ偉業阻止のためと意気込み決意し両親に何も言わぬまま家を出て、微笑ましい表情で話掛けてくる顔見知りの人々に挨拶や返事をしながら箱庭総合病院へと足を進め、時間は掛かったものの何とか到着。この時までには、塞城零夏の胸中に後悔の二文字などなかった。そう、この時までには、である。

彼女が後悔を感じ始めたのはこの後からだ。

箱庭総合病院の中へ入り一直線に受付へと向かい、受付嬢に「おはようございます」と挨拶。そして塞城零夏は「今日は千夏さんと一緒にやないんだね」と話掛けてきた受付嬢と一区切りがつくまで世間話をした後、他力本願な目論見を達成するため――竜宮宝の居場所を受付嬢へ問うた。

すると受付嬢が浮かべていた穏やかな笑顔は即座に豹変。塞城零夏がその事に啞然とする暇もなく、受付嬢は唇を動かす。普段ならば緩やかな弧を描くその唇から放たれたのは、激しい苛立ちが込められた言葉だった。

曰く、零夏ちゃんは知らなくて良い。そんな事を聞きに来るぐら
いならお家でお飯事をしていた方が良い。

異常施設が一般には公開されていない施設であり、竜宮宝はその
異常施設の最奥にて拘束され監禁される凶悪な異常――アブノーマルフラスコ計
画に限ればそう記録されている――という事を考えれば、関係者――
対異常鎮圧部隊の元隊長である塞城千夏の娘とはいえ、竜宮宝の
居場所をそう軽々しく教えてはいけないという事にも納得出来る。

ならば受付嬢の返答には何等おかしい事もない――のだが、当然
と云えば良いのか塞城零夏はそんな事情知らない。

受付嬢の苛立ちを隠さない態度から、竜宮宝に関する話題がこの
人にとってのタブーなのだと塞城零夏は判断し、だからといって自
らにその居場所を教えない道理はないのかと不満を感じる。
嗤いながら両親を肉片に変え、孤児院を倒壊させ大勢の人々を殺
した。という物騒極まりない噂がまことしやかに囁かれていた時は
この受付嬢のように本心から苛立つ人物は極少数だったが、今は違

う。

箱庭総合病院内で起きた竜宮宝の暴走は、まことしやかに囁かれていた噂を——しかし本心から真実だと思い込んでいた人物がたった数人しかいなかった噂を、不特定多数の人々に事実として認識させるには十分過ぎる程の出来事だったのだ。

あれ以来、まことしやかに囁かれていた噂は囁かれもしない周知の事実となり、箱庭総合病院内において竜宮宝の話題はある種のタブーとなっていた。

幼児一人に何を恐れているのか——そう疑問に思う人が一人や二人いたっておかしくはない。が、あの惨状に運悪く居合わせた人々は元より、その惨状を人伝に聞いた人の中にすらそう疑問を抱く人物はいなかった。

まあ、それも当然だろう。開設からあの出来事に至るまで箱庭総合病院にて暴れる異常の悉くを鎮圧してきた対異常鎮圧部隊の面々が、ああもあっさりと地に伏せたのだ。

産まれてから十年の半分すら経っていない幼児に、という事は関係なく、その事実はあまりにも衝撃的過ぎる出来事だった。

その時に居合わせた対異常鎮圧部隊の面々が弱かった。という訳では断じてない。

異常として最高峰の強度を誇る者達で構成された対異常鎮圧部隊は全隊員をたった一人の幼児を鎮圧するためだけに動員するという上層部の判断に小さくはない疑念と疑問を抱きながらも、文字通り油断なく全身全霊で竜宮宝を鎮圧しようとして——その結果不様に地を這う事になったのだ。

災害を前に、強度が高いだけでしかない異常が為す術無く膝を折る事は当然と言っても良い程に当たり前の事ではあるのだが、しかしだからといって対異常鎮圧部隊を瞬時に地に伏せた竜宮宝に恐怖を感じない理由にはならない。

まあ、長くはなかったが、つまりは受付嬢の苛立ちが化け物——竜宮宝に対する恐怖を隠すための強がりなのである。が、塞城零夏は

そんな複雑な心情も知らない。

彼女は「アイツの事が嫌いなんだな」程度の事しか思わずに、それでも、竜宮宝の居場所を聞いた直後に機嫌の悪くなった受付嬢を見てこの人からは聞けないと判断。

あの問い掛け以降からは終始不機嫌だった受付嬢に「どんだけ嫌いなんだよ」と間違っているような間違っていないような事を思いつつも、受付から離脱。

「聞く人を間違えたな」などと思いつつも塞城零夏は視界に入った顔見知りに挨拶をし、世間話も程々に竜宮宝の居場所を問い掛ける。すると今度は、竜宮宝の名前を口に出した瞬間に普段ならば知的な雰囲気醸し出しているいかにもエリートと言った風貌の看護婦が突然取り乱す。

「トトトイレに行ってくるわねっ」と駆け足でその場から去る背中を見ながらようやく何かがおかしいと思い始める塞城零夏。

しかし竜宮宝の悪評を考えればこういう事もあるのだらうと短絡的に考え、またしても見知った顔へ挨拶。

以下、程々に世間話、竜宮宝の居場所を問い掛け、取り乱す——もしくは苛立ち、或いは半狂乱のエンドレスループ。

さすがに少し頭が弱い——バカと言っても良い——塞城零夏でも、どれだけ聞こうと教えてもらえない事に見てわかるぐらいには大きな苛立ちを感じつつも、今の箱庭総合病院内において竜宮宝の話題がタブーになっていると結論をつけた。が、だからといってこのまま大人しく家に帰るというのも癪である。

それ故に彼女はタブーとわかっていながらも竜宮宝の居場所を問いつけたのが——終いには「何かあったの？ お父さんが怪我して頭がおかしくなっちゃったの？ きつとそうだわ。頭がおかしくならないとあんな化け物に会いたくなんてならないはずだもの」なんてまくし立てられながら精神科に連れて行かれる始末。

これには塞城零夏も竜宮宝の居場所を前以て調べ——自らの父親に聞くとか——なかった事に後悔の念を抱かざる得ない。

何が悲しくて竜宮宝の居場所を聞いただけで頭の心配をされなきゃいけないんだよ。そもそも何で、居場所を聞くだけでこんなにも時間を浪費しているんだ。もう良いや、今日は帰ろう。帰って好きなだけ寝よう。そう自暴自棄になった塞城零夏を誰が責められようか。その後、自らの腕を血走った表情で掴みつつも落ち着きなく足を動かす知り合いの看護婦の腕を振り払い、両親から受け継いだ異常な脚力^{イマル}を駆使し逃走——しようとしたが、それは直後に中断させられる。

看護婦が某超野菜人並のスピードで塞城零夏に追い付き食らい付いたから、という訳では断じてない。もしそうならば塞城零夏のトラウマの一つに、血走った目の超スピード看護婦に追いかけて回されるという意味の分からない出来事が追加されていたのだろう。が、先程も言った通り看護婦に追い付かれたという訳ではないので、そんな愉快なトラウマが追加される事は当然ない。

ならば何故、と聞かれたのなら、塞城零夏は「こっちこそ何でだよ」と混乱し啞然とした表情で吐き捨てるだろう。

何故と聞かれて彼女がそんな返答をしてしまうくらいには、自らの逃走を故意にしろ事故にしろ中断した人物は衝撃的で不可解な者だった。

——不知火袴。塞城零夏が前世にて愛読していた漫画の中でもこの世界でも、彼はそう名付けられ名乗っている。

曰く、箱庭学園理事長という肩書きを持ち——それと同時にフラスコ計画において高い地位に居座る老人。その人が、その人物が、その老人が、突如曲がり角から現れて塞城零夏と衝突した。

そして老人はまるで予定調和だと言わんばかりに取り乱し戸惑い狼狽える事もせずに、体格の差か尻餅を付いた塞城零夏に白々しく「おや、大丈夫ですか」と宣うのだ。

それから幾分か時間が経過して——塞城零夏は異常拘束^{ロック}へと続く突破不可能の迷宮へと足を踏み入れる。

そしてその横には一人の老人——不知火袴。

何の意図があるのか不知火袴は竜宮宝の居場所を知ろうと足を動かし口を動かし終いには逃走しようとしていた塞城零夏に、目的の災厄が居座る異常施設への案内をすると普段と変わらぬ表情のまま提案したのだ。

肉体的な消耗に時間の浪費。加えて、精神的な消費——それらが彼女の判断能力を低下させたのか、或いは元から馬鹿だったのか。塞城零夏は不知火袴の提案を何の疑問も抱く事なく了承するのであった。

——まあ、そんな訳で、塞城零夏一人では侵入不可能であった異常拘束へと、御都合主義極まる不知火袴の提案を了承する事で彼女は足を踏み入れた。

異常施設へと続く迷宮の中空に漂い通路に充満する障気と表現するに過言ない雰囲気に、今更ながら不知火袴の提案に二つ返事で了承した事やこの先に待ち構える竜宮宝を仲間にするなどという命知らずな目論見を考え付いた事に後悔したりもした。

緊張や恐怖で肩を叩かれただけで過剰に反応し自爆したり奇声を発したり逃げ出したりもした。

他にも尿道が緩んだり様々な——本当に、様々な——事があったが、塞城零夏は迷う事も傷付く事もなく目的の場所へと辿り着いた。

今も塞城零夏の身を案じてる——純粹に心配している。という訳ではないが——不知火袴を哀れに思うぐらいには何事もなく御都合主義的に、強いて言うならば竜宮宝が居座る異常拘束の最奥に近付くにつれて尿道が緩んだ程度か。まあ、それはともかく、塞城零夏は異常施設の最奥へと辿り着いたのだ。

普段ならばパスワードの入力や指紋認証などと言ったセキュリティを正規の手段で突破しなければいけないのだが、何の不都合か

好都合かそういったシステムはパスワード認証のセキュリティを除き正しく作動していない。

そして塞城零夏には、そのパスワードを必ず当てれるという確信があった。
アブノーマル

異常だから——という訳ではない。もっと確信的で確証的な感覚を彼女は御都合主義的に掴んでいたのだった。

ならば何故、塞城零夏はパスワードを入力し扉を開けて竜宮宝と対面しようとしなのか——恐怖、或いは緊張。といった感情が二の足を踏ませない。なんて誰だろうと一度はなった事がある状態だからである。

つまりは、塞城零夏の精神的な問題のせいで、彼女はここまで来ながらも未だ竜宮宝と対面していないという訳だ。

一分か十分か三十分か一時間か——彼女は把握していないが、正確に言えば四十七分二十四秒。それが竜宮宝が居ると漏れ出る悍ましい雰囲気から判断した扉を視界に収め、そして開けるまでに塞城零夏が消費した時間。

臆病者である彼女からすれば、たった五十分近くで竜宮宝と対面する踏ん切りを付けたという事は言うまでもなく頑張った末の素晴らしい結果なのであるが、それはそれとして——

竜宮宝と球磨川禊の邂逅。球磨川禊の検査。人吉瞳の挫折。竜宮宝の暴走。様々な出来事が起きた、塞城零夏がこの世界を紛れもない現実と認識したあの日。それから既に一ヶ月と少し。

ようやくと言えば良いのか、塞城零夏は不安定ながらも既に確定している悲惨な未来を回避するために震える足を進めたのである。一つ息を吸って、吐いて、震える指先でパスワードを入力。重々しい音を立てながら開いた扉を潜り抜けようと足を踏み出して——

「——っ」

——視界に入った拘束具に身を包む異形の姿に一瞬息を止めて、しかし悲劇を回避するためには進むしかない、もう後戻りは出来ない、頭のどこかで理解して塞城零夏は震える唇を動かした。

「えーっと、はじめましてだな——」

気怠げに開かれた異形の瞳が、グルリ——或いはギョロリ、と塞城零夏へ向けられる。

空っぽの、何もない——しかしそれでも悍ましい悪意が不気味な光を灯す醜惡な瞳を向けられて、彼女はついと視線を逸らす。

その悍ましい異形を見ていられない——という訳ではなく、見ていたくないのだ。

だが、目も合わせたくないのでは竜宮宝に心を開かせるという事は到底不可能。

話をする時は目を見て話せ——なるほど確かに、目も合わせれないのでは満足な話し合いも出来ないのだから、それは真実だろう。

竜宮宝と満足な話し合いすら出来ないのでは、事実塞城零夏の目論見は話にもならない夢想となる。それは彼女自身理解している。

理解しているからこそ何とか目を合わせようとしているのだが、結局は目を合わせれずに中空へと視線を泳がせるに留まる。

あの異様な瞳と目を合わせてしまったら、緩んだ尿道がさらに緩んでしまう——そう、身体の震えを誤魔化すために冗談めかして胸中で呟いてみたものの、即座に冗談にならない冗談だと心中で毒突く。

塞城零夏の涙腺は竜宮宝^{トラウマ}を前にして決壊手前。尿道も同様の有り様だ。

こんな事になるのなら扉の前で引き返せば良かったんだと抗議す

る自分にこうしなければもつと恐ろしい未来を歩む事になると言い聞かせ、止まっていた唇の動きを再開させる。

「――俺、塞城零夏って言うんだけど……。あの、ちょっとお前とお話がしたいなー、なんて……」

酷く不自然な内容の言葉だが、しかし彼女は言い切った。その事に達成感を感じる暇もなく、塞城零夏の耳に声が届いた。

異形な姿と同様に、異様な瞳と同様の――

「……いや、あんた誰？」

――異質な声が、薄暗く不気味な空間へと響く。

空虚で、醜悪で、真っ黒で、空っぽの――劣悪な悪意が秘められた悍ましい音色。

それを聞いて、それと同時に、中空を泳いでいた塞城零夏の視線が竜宮宝の視線と絡み合う。

――嫌な事件だった。後に彼女はそう語る。

「あ、うえ。えと、その、だな。俺は塞城零夏で――って、え。さっき言ったよな。うん、え？ 何、何て答えれば良いの？ 何て答えれば良いんだよ？ えと、その……。うえ――う、え？」

緊張。恐怖。疑念。動揺。疑問。様々な感情が入り混じり入り乱れ、悍ましい瞳から目が離せない。

落ち着け、ここで失敗したらこの後もこの先も全てがパーになる。ここで竜宮宝に好印象を与えなければ、自らを含む周囲の安全など夢のまた夢の夢想以下のガラクタに成り下がる——そうやって自分を落ち着けれる程、彼女の精神は強固ではなかった。

「え、ちょ、あの、何、何々、一体何だよ。って、うわ、ちょっ、待っ——」

まずは涙腺が決壊。次に尿道が決壊。そして最後に——

「——う、うわああああああああああん！」

——精神の決壊。

突然泣き喚き出した塞城零夏を目にして、さしもの竜宮宝とて目を見開き啞然とする。

まあ、臆病者でしかない塞城零夏が災悪^{ワースト}にしては災悪らしくないとはいえ、しかしそれでも紛れもない災悪^{ワースト}である竜宮宝が無意識下で纏う悪質で醜悪な雰囲気^{ワースト}に耐え切れないのは当然と言えよう。

確定した悲劇。未確定の惨劇。不安定ながらも確定している悲惨な未来。

何度も言うようだが、それらを回避するための戦力として竜宮宝に焦点を当てた塞城零夏の判断は間違っていない。

——が、それでも塞城零夏^{ワースト}は一つの間違いを犯していた。

一戦力^{ワースト}としてならば災悪^{ワースト}はこの上なく最上の暴力ではあるが、しかし彼等^{ワースト}は暴力である前に災悪^{ワースト}なのだ。

見知らぬ他人も見知った恋人も悪意を撒き散らす対象でしかなく、

喜怒哀楽といった感情の行き着く先は須く非人道的で悪意的な結論。何かをすれば劣悪な結果を残すし、何をしてでも悪質な結果を残す。^{ワースト}それが災悪で、それが彼等。^{ワースト}

そんな理不尽な人で無しを、そんな醜悪な化け物を——どうしてただの臆病者が受け入れられるのか。

竜宮宝が塞城零夏に心を開くか開かないか、ではない。塞城零夏が竜宮宝を受け入れる事が出来るか出来ないか。竜宮宝を一つの戦力として扱う事に一番必要で最も重要な事柄は、竜宮宝の心境の变化ではなく扱う側の図抜けた精神だったのだ。

それを理解していればまた結果も変わったのだろうが、彼女はそれを理解していなかった。

その結果として——

「——もうやだ何こいつ何でこんなに不気味なの何でこんなに悍ましいんだよ何であんな事考えちゃったんだよ俺の馬鹿阿呆間抜け本当やだ帰りたいよお！」

——塞城零夏はこうなった。

「Q:友達になるために重要な事は?」「A:まず第一に漏らさない事です」

ビビりのTS少女が可愛すぎてヤバイ。

精神科に行った方が良いかもしれないんですけど、きっと私の頭は正常なのでやっぱり行かないです。

まあ、つまり、ようするにあれだよ。うん。

良いぞ! もっとやれ! そのままショック死させる勢いで怖がらせてやるんだ宝!

うわあああああ——ウツデイ! ダホマツ! 私は死んだ。ス
イーツ○

……ふう。どうやら取り乱したみたいですね。すいません——と
ネタに走った過ちをなかった事にする人をよく見掛けますが、私は
! 私がどんな酷いネタをしても! それをなかったことになんか
しない! 私はついさっきしたネタを! マイナスみたいには扱わ
ない! だかr(以下略)

ところで話は変わりますが、読者の皆様はTS少女ってどう思
いますか? 私は勿論「良いんじゃないかな」と思っではいるんです
けど、作者の趣味がイコールで読者の趣味にはならない訳ですので
少し気になりました(笑)

先日、感想欄のコメントを見てやはり恋愛を取り入れた方が良
かなと思って考えたんですよ。ヒロイン候補というか、一番不自然
じゃないヒロインが誰かってのを……。

考えた末、というより考える前からもし宝のヒロインにするのな
ら塞城零夏が一番良いと作者は判断しましたorしてました。

それもこれも、そもそもこの作品は竜宮宝と塞城零夏を中心にし

て考えた作品でありまして、しかも原型は「人間になる事を諦めて化け物のままヒロインを守ろうとする主人公」と「臆病者で腹黒かったりもするちょっとバカなヒロイン」の擦れ違いを描いた超鬱展開が連続で起こる代物なんですよw

しかしプロットを作ろうとした時点で作者のテンションが急落して、急遽構想を変えたっていう○

その過程で宝くんと塞城零夏の歪んだ恋愛は歪んだ友情に変わった訳ですが、やはり恋愛を入れるなら宝くんと塞城零夏しかないかと作者は思う訳です。

しかしそうになると、読者の反応が気になる。

ほら、TS少女をヒロインにした恋愛物って賛否両論じゃないですか？ いや、まあ、賛否両論っていうのは私の偏見なんですけどねw

偏見にしろ何にしろ、読者様の意見はやはり聞いておいた方が良いと思ひまして……。

という訳で、長くなりましたがようはアンケートです。一票入るかすら疑問ですが、やっておいて損はないでしょうし。

1・TS少女と恋愛？ 構わん。もっとやれ！ ただしバッドエンド、テメーはだめだ。

2・TS少女と恋（中略）バッドエンド、それもまた良し！

3・TS少女と恋愛とかキメエwwww作者おめえ頭に蛆わいてんじやねーの（笑）

4・安心院さんと安心のイチチャイチヤ（え

5・その他（スイーツ（笑） ハーレム。どろどろな三角関係。崩れていく角砂糖のような失恋。その他キャラクターのいずれか）

この中から一つ選んで、選んだ番号を感想 or メッセージにて作者にお伝えくだされば幸いです。

いくつかおかしな選択肢がありますが気にせずに投票してくださいねっ！（キリッ

5のその他の場合は、ご希望の詳細もお教えください。え、安心院さん？ ヤダナーそんな選択肢あるわけないじゃないですかー（チラッチラッ

（最近の作者。

思ったよりもアンケートに投票があつて作者発狂↓コーヒーを吹き出し携帯が変色↓作者発狂↓しかし防水だった↓作者発狂。

給料が入って作者発狂↓遊戯王デュエルターミナルで連コイン↓しようかと思つたが人目を気にしてデュエルターミナルの前でうろちよろ↓トイレで作戦会議↓デュエルターミナルの前へ帰還↓はげたおじさんがデュエルターミナルを占領していた↓作者発狂。

日を改めてデュエルターミナル↓第一弾でミストウォームとブリューナクをゲット↓作者発狂↓帰宅し携帯を覗く↓投票が増えていて作者発狂↓いちごオレを吹き出す↓デュエルターミナルでゲットしたカードが変色↓作者発狂。

……ふう。

改めまして、投票ありがとうございます。本当に本当に、ありがとうございますウ！

不幸中の幸いかブリューナクとミストウォームは無事でしたけど、この恨みを私は忘れません！ 本当にありがとうございますア！

まあ、ブリューナクとミストウォーム以外に目ぼしいカードはなかったものでそれ程ショックだった訳じゃあないんですけど、これはネタになると思ひ前書きに――って前書きで私は何を書いているんでしょう。めだかボックスなのに、遊戯王↓今週のジャンプ↓安心院さんの台詞↓めだかボックスなのに、遊戯王○

あの例えは、きっと安心院さんの体験談から来た物。異論は認め
ません（キリッ

「精神年齢的に大人の俺がお話なんて……（チラッチラッ）」で第14箱

ワースト
災厄——竜宮宝は考える。

異常拘束へ身を置いてから常に張り巡らし回転させ停止し飛散し
ロック
続けていた様々な事柄と同様に、考えはするものの決して果てに届かない意味のない思考。

昨日の夕食は何だったのか。そんな疑問と大差ないくらいにはどうでも良い事柄なのだが、それでも竜宮宝は思考した。

それは暇潰し以上の価値も意味もない行動である——が、竜宮宝自身がその行為に価値や意味を求めてはいない。

ならばそんな薄っぺらな思考は直ぐ様掻き消える事は当然——かに思われたが、今回に限っていえばそうではなかった。

何もかもがどうでも良くなるような、竜宮宝の心中に居座る強大な虚無感はまだ健在。しかし何故か、目の前の事柄についての無価値で無意味な思考は止まらなかった。

心折られ絶望し夢すら崩れた抜け殻同然の彼でも突如泣き喚き始めた幼女を目前にして無思考ではいられなかった。という訳か——まあそれはともかく、様々な拘束具に自由を奪われている彼——竜宮宝は、身を包む虚無感に何の感傷も感じない程度には無関心で無感動のまま、無意味で無価値な思考を飛散させる事も停止させる事なく目の前の幼女について考えていた。

どうやって泣き止まそうだとか、何をして慰めようだなどといういかにも善人的な——或いは偽善的な、もしくは独善的な——理由ではなく、文字通り理由のないまま思考を続ける。

彼の思考を埋め尽くしていたのはたった一文のどうでも良い疑問。しかしその疑問を抜け殻同然の竜宮宝が解ける訳もなく、だからこそ彼は問うた。愛らしい童顔を一目見て分かるぐらいには真っ青に変色させている、満足な照明すら存在しない薄暗い空間の中でなお暖かな金髪を輝かせる幼女へとその異様な瞳を向けて——

「……なあ——」

——異質な声を投げ掛ける。

そうして、「何故泣いているのか」と問いの続きを放とうとする竜宮宝。

しかし始まりの一文すら口に出す事も出来ずに、その問い掛けは終了。再び投げ掛けられた底冷えするような暗く冷たい音色に、既に決壊していた塞城零夏の涙腺から溢れ出る涙の雫が量を増す。それに比例して耳障りな泣き声の音量も上昇

拘束された身では耳を塞ぐ事すら叶わない。分厚い壁に覆われた竜宮宝を監禁するための檻。その中を反響し絶叫され響き渡り埋め尽くす騒音に、彼が抱えていた疑問は飛散。耳を打つ雑音に不快さを感じ顔を歪め、虚無感を押し退け到来した醜悪で理不尽な悪意を自覚し苦々しく舌打ちを一つ。それを聞いか塞城零夏は体の震えを激しくするが、竜宮宝は気にも留めない。

今の彼は抜け殻同然だ——が、それでも、未だ人一人殺す事を拒む程度には、ガラクタ同然の人間性が残っていた。

故に竜宮宝は虚無感を彼方へと消し去る醜くも強大な悪意のままに行動しようとはせず、ただ泣き声は耳障りだからと不快さに歪んだ表情を直す事もせずに口を動かした。その結果——

「おい。もうアンタが誰だとか何で突然泣き出したのかなんて事はどうでも良いからさ、その耳障りな雑音止めてくんないか——っていか止めてください止めやがれ止める止めてくれそんでさっさと視界から消えろ消え失せろお願いだからお願いします」

「——う」

——ついに限界に達したのか。塞城零夏が力無く地面に座り込む。竜宮宝本人は自覚すらしていないが、彼が持つ災惡^{ワースト}特有の醜惡な存在感——それはガラクタ同然の僅かな人間性と相俟り、酷くアンバランスな異形を形成している。

例えば広大な海原に揺らめく蠟燭の灯火。例えば灼熱地獄と化した砂漠に存在する泥^ぬ濘^かるんだ泥沼。例えば生い茂る樹木で形作られた樹海にて異様を曝す荒野。

両立するはずのない事柄が両立している、酷く不可解な異様。災害のように理不尽な悪意とガラクタ同然の人間性はそれにとでも良く似た異形を形成し混成し作成し——今の彼、人間は疎か人で無しにも化け物にもなり切れない中途半端な竜宮宝を形作った。

しかし中途半端とはいえ竜宮宝は唾棄^{ワースト}すべき災惡。その悍ましい存在感は臆病者の精神を決壊するに十分どころか過分な代物だ。それは涙腺や精神を尿道諸共に決壊させた塞城零夏の醜態を見れば明白。そこに災害のように理不尽で強大な悪意を秘めた言葉を投げ掛けられては、心折られ自我を崩され諦め嘆く事はむしろ当然。何せ彼は災惡^{ワースト}なのだから、その前に臆病者如きが心保てる道理などない。

だからこそ塞城零夏の精神は決壊し夢想は破碎され、彼女は人知を越えた災惡^{ワースト}を前にもはや怯える事すら出来ずにただただ絶望するしかなかった——と、もし竜宮宝が生粋でありながら純粹に醜惡である災惡^{ワースト}ならばなっていたのだろう。がしかし、彼は人間にも人で無しにも化け物にもなり切れない中途半端な災惡^{ワースト}。竜宮宝に残ったガラクタ同然の人間性は災害のような理不尽さを僅かに削り、そこに出来た小さな隙間から埋め込まれ浸透した彼の人間性^{ガラクタ}は災惡^{ワースト}を前にして絶望するしかない臆病な小娘に恐怖という感情を抱かせる要因となった。

それは彼女にとっての不幸か幸いか。

もし仮に竜宮宝が中途半端ではなかったのなら、彼女は恐怖を感じ

じる事もせずに絶望するだけの廃人へと成り下がっていただろう。
抵抗不可の災害を前に、仰せない程の戦力差を前に、理不尽な悪意
を前に——人は感じていた恐怖を次第に忘れ絶望する。

荒れ狂う津波に吞まれて感じるのは恐怖ではなく諦めで、燃え盛
る業火に身を焼かれ理解するのは絶望なのだから——理不尽を前に
して恐れる事すら出来ずに絶望する事は当然であり正常。

不幸を愛する球磨川禊ならば理不尽に膝を折りながらも空虚な笑
みを浮かべ続けるのかも知れない。

産まれながらの勝者である黒神めだからば災害にすら臆さず立
ち向かったのかも知れない。

生物としての枠組みを超越した人外である安心院なじみならばそ
れすら取るに足らない事象と見下したのかも知れない。

——だが、塞城零夏は不幸を愛する事も出来なければ産まれなが
らの勝者でもない。確かに異常な力を所有してはいるが、人外には
程遠い。むしろ彼女の精神はあまりにも人間らしい代物で、だから
こそ彼女は普通に怯えて普通に逃げる臆病者。

故に理不尽を前にした時、臆病者である彼女は恐れる事も逃げる
事も出来ずに絶望するしかない。が、今塞城零夏の目前に立つ災厄
はあまりにも中途半端な理不尽。それでも誰が立ち向かうとその
悉くを淘汰する程度には理不尽な力を所有しているのだが、しかし
竜宮宝自身はガラクタ同然の人間性に未だ縋り付いている。

それは災厄としての理不尽性に罅を入れ醜悪な理不尽性を欠落し
た理不尽性へと変える原因。そして、欠落した理不尽性は塞城零夏
に絶望ではなく恐怖を与えた。

それが幸いだったのか不幸せだったのかを一言で断じる事は難し
い。恐怖に震え涙を流し無様に失禁しただけで良かったとも言える
が、そんな醜態を晒すよりは廃人になった方がマシだと語る者もい
るだろう。その他にも様々な意見があるのだろうが、しかし怯え震

える張本人である塞城零夏には幸福か不幸かなどと思考する余裕も結論付ける暇もない。

何せ限界に達した彼女は、災悪^{ワースト}を前にして既に失神していたのだから――

「……」

薄暗い空間に充満し散漫する災悪^{ワースト}――竜宮宝の吐き気を感じる程に醜悪な気配。絡み付いて離れなかった酷く悍ましい真っ暗な瞳。感情など塵一つ程も込められていないような、しかし確かな悪意が秘められた不気味な声。

どれを取ってもそれは臆病者一人の涙腺を尿道諸共に決壊させ精神を崩壊させるには充分な代物なのだ。

ならば竜宮宝^{ワースト}の存在感に圧迫され彼の眼光に射抜かれ災悪^{ワースト}の悪声に打ちのめされて、その結果臆病者である塞城零夏が失神したとしても不思議ではない――が、竜宮宝はそうは思っていない。

当然だろう。彼は自身を気味も気色も性質も悪い、人になれない人で無しの化け物だと少なからず自覚してはいるが――それでも、有象無象の群集の精神を圧迫し押し潰し壊し尽くす理不尽な悪意を無意識下に撒き散らしていると自覚してはいないのだから、塞城零夏が突如座り込み倒れ伏し気絶したとてその原因が自分にあると思える訳もない。

だからこそというべきか、竜宮宝は倒れ伏した塞城零夏を視界に収めながら僅かに眉を寄せる。

一般公開されてはいないが、しかしそれでも認知度が高い異常施設。一般公開されていないのに認知度が高いなどと聞けば警備の質を疑われそうではあるが、数多の異常^{アブノーマル}を拘束し監禁するために作られた異常拘束^{ロック}の警備はそれ自体が異常な域へと達した侵入不可脱出

不可の牢獄。その異常施設へ見た感じ自身と歳も変わらなさそうな幼女が一人で侵入したと思えるはずもなく、だがそうなるこの幼女はフラスコ計画において高い地位に居座る者かこの異常施設を管理する看守のどちらか——竜宮宝は先程そう思考したが、結論は出なかった。

今となつてはどうでも良い事だが、どうでも良い事だとしても竜宮宝には思考するしかない。思考する事しか出来ない。

だから彼は思考する。意味なくぐるぐると、理由なくグルグルと、頭を回転させ思考を回し考えを転回する。しかし当然といえば良いのか、答えは見付からない。それは竜宮宝にはガラクタ同然の人間性しか残っていない故に——という訳ではない。

もし竜宮宝が真つ当な人間性を持っていたとしても、きっとこればかりは理解出来ない。

だってそうだろう。突如現れて唐突に「話をしたい」などとはざいて、かと思えば突然泣き出し崩れ落ちて倒れ伏す幼女。一体何の意図があつて、大体何の理由があつて——化け物居座る異常施設の最奥へと足を踏み入れたのか。竜宮宝がその意図を理解出来る訳など塵程もない。

しかしそれでも竜宮宝は思考し続けて——しばらくの内に思考は飛散。取り敢えず失神した幼女をどうにかしようと考えるが、拘束された身ではそれも叶わず。

怨返しギフトを使用すれば拘束具など即座の間に鉄屑へと変わるのだが、彼にはその悍ましい異能を使う気がない。

結局は答えを理解する事も出来なければ何かをする気にもならないと結論付けて、ただぼーっと視線を漂わせるだけになる。

竜宮宝の視界に倒れ伏す幼女の下腹部を中心に広がっている水溜まりが入ったが、彼はそれにすら無反応を貫き微動だにしない。

そうしていつも通り普段通りに、意味もない思考を続けて——彼の脳内に声が響く。

かつて孤児院の一室で嘲るように囁かれた言葉とは違う——馬鹿

らしい、一言。

何故こんなモノが脳裏を過ぎったのか。そう竜宮宝は考えて――

「……本当、馬鹿みたいだな」

――ハッ、と鼻で笑った後、呆れたように呟いた。
そのまま、倒れ伏す塞城零夏へと視線を向ける。

「……確か、塞城零夏だったか」

そう呟きまた一つ鼻笑いをして、しばらくすると意識して思考を
掻き消す。

――本当に、馬鹿みたいだ。彼は心中でそう毒突いた。

『全く……。そうならそうと最初から言ってください。あれで十年は寿命が減りましたよ』

「……すまないな。だが言ってしまうえば変動する。この道筋から外れてしまったら、それこそどうなるかわからない」

『……はあ、わかってますよそれくらい』

「……ならば何故、一々あんな事を？」

『そりゃあ愚痴を溢したくもなりますよ。安心院さんから聞きましたよ？ こっちは顔色変えて忙しく動き回っていたっていうのに、貴方は孤児院で子供達とのんびり遊戯王をしてたってねえ』

「……」

『フラスコ計画——だけではなく、世界の存続すら危うい状況の中、焦ってるのは私だけで安心院さんも貴方も呑気のまま。せめてもう少し緊張感というものをですね——』

「待て、もう良い。遊戯王はしなければ良いんだな？ 今度からは気を付けよう。子供達が呼んでいるようだから私はこれで——」

『——って、話は最後まで聞きなさい——』

「塞城零夏の回収は頼んだぞ。また連絡する」

鶴喰くんがかわかつこよくてヤバい。香ばしい設定が良い味を出していますね……（神妙な顔で

しかし安心院さん。小学生と遊戯王カードでデュエルして負けた時『すごい』とは思っても『負けた』と思うかい？　きっとこれは経験談からの台詞。

当時小学生の弟に遊戯王で負け、顔を真っ赤にしてオリエンテーション直後の善吉くん並に支離滅裂な負け惜しみを言っていた過去の私エエエエエ

弟「ボーンタワー三体並べたったエエエこれで勝つるエエエエエ」

私「ドロー。ジャンクシンクロンを通常召喚。効果で墓地からレベルスティーラーを蘇生。墓地からのモンスターの特殊召喚に成功したので手札からドッペルウォーリアーを特殊召喚。さらにボルトヘッジホッグを自身の効果で蘇生。LV1とLV2モンスターが二体に、LV3ジャンクシンクロンでジャンクデストロイヤーをシンクロ召喚。効果によりシンクロに使ったチューナー以外のモンスターと同じ枚数だけフィールド上のカードを破壊。ボーンタワー三体選択ですお（どやあ）」

弟「……」

私「ん？　ん？　ほら早く破壊しようぜエエエエエ　君のボーンタワーは碎骨になったんだYO！」

弟「いや、昇天の黒角笛発動するから……」

私「――え」

弟「だから昇天の黒角笛を――」

私「……ターンエンド」

弟「僕のターン。ドロー。手札からゾンビマスターを通常召喚して効果発動。手札からゴブリンゾンビを墓地に送って墓地からゾンビキャリアを蘇生」

私「……」

弟「ゾンビキャリアと二体のボーンタワーをシンクロ。デスドラゴンをシンクロ召喚。手札から生者の書を発動して墓地にいるゾンビマスターを蘇生。ボーンタワーの効果でデッキトップから二枚墓地に。ゾンビマスターの効果で手札からモンスターを墓地に送り墓地からボーンタワーを蘇生し（中略）やーいやーい山札切れーwwwwwwww」

（#^Д^）「メキメキメキ」

(！) アンケート継続中ですよ (チラッチラッ)

詳しくはwebで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8281x/>

たからボックス！

2011年12月5日19時11分発行